



「case.アトラスの契約(下)」



ロード・エルメロイⅡ世の事件簿

7

「case.アトラスの契約(下)」

三田 誠
イラスト 坂本みねち



Characters

Lord El-Melloi II世 Case Files

ズエビア・エルトナム・アトラシ
アラード・ラス・エスケル基死徒

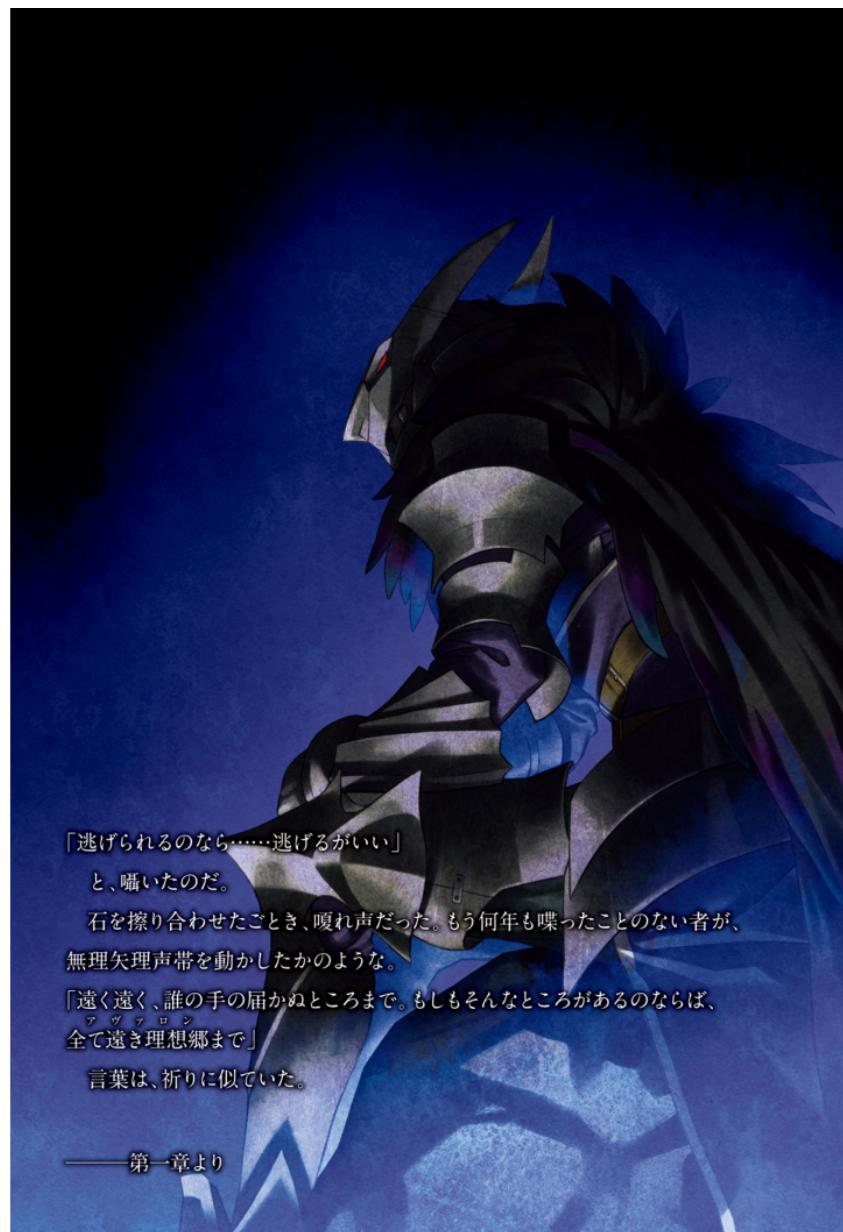
スヴイン・グラシュエート
時計塔现代魔术村の生徒

イルミア
村の教会のシスター

ベルザック
デラックモアの墓地

グレイ
エルメロイII世の内弟子

エルメロイII世
時計塔现代魔术村君主



「逃げられるのなら……逃げるがいい」

と、囁いたのだ。

石を擦り合わせたごとき、嗄れ声だった。もう何年も喋ったことのない者が、無理矢理声帯を動かしたかのようだ。

「遠く遠く、誰の手の届かぬところまで。もしもそんなところがあるのならば、
アヴァロン
全て遠き理想郷まで」

言葉は、祈りに似ていた。

——第一章より

ロード・エルメロイⅡ世の事件簿

「case.case.アトラスの契約（下）」



Lord El-Melloi
Case Files

ロード・ エルメロイ II世の 事件簿

7 「case.アトラスの契約(下)」

目次 Contents

『序章』	005
『第一章』	011
『第二章』	071
『第三章』	151
『第四章』	219
『第五章』	265
『終章』	349
『解説』	386
『あとがき』	390

ロード・エルメロイII世の

事件簿

7 「case.アトラスの契約(下)」

角川文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。

目次 Contents

序章

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

終章

解説

あとがき

◆序章◆



一足音で伝わるものがあると、物心がついた頃には知っていた。

たとえば、どたどたと賑やかな足音。

たとえば、祈りにも似た静かな足音。

たとえば、けたたましくもどこか悲しげな足音。

みんな足音に感情が表れるなんて思っていないから、かえってそれは素直な気持ちを伝えてくれた。ああ、人と話すのが苦手な自分にしてみれば、会話より足音を聞いている方が、よほど相手のことを知れたかもしれない。

両親については、二種類だった。

自分を慈しんでくれる際のそれと、自分を崇めてくる際のそれ。

比率は徐々に後者に傾き、おおよそ十年ほど前に決定的になった。……この場合、致命的になったと書くべきだろうか。

毎朝、少しずつ足音が変わっていくのだ。

一日の始まりを告げる、しゃっちゅう何かに蹴け躡つまずいて、しかし嬉しそうな足音が。

まるで神様にでも触れるような、敬虔さに満ちた足音へと。

香ばしいパンの匂いが、いつからあんなに寒々しく思えるようになったのだろう。温かなスープと瑞々しいサラダに、違和感を覚えるようになったのはいつから？ 食事中のこちらの表情を見逃さず、どんな些細な変化にも異様なまでに反応するようになって、そんな配慮に泣き叫びたくなったのは？

本当は、分かっている。

十年前のある時期からだと。

自分の身体が凄まじい勢いで変じていき、周囲から神み子こなんて呼ばれるようになった日からだと。もともと同年代の人間自体が村にほとんどおらず、気軽に話せる相手もいなかったのに、その時

期からは本当に皆無となってしまった。

父が亡くなった後の母はなおさらこちらへの生活管理に熱心になり、睡眠や礼拝はもちろんのこと、自分がものを食べる順番や衣服の着方にまで気を遣うようになっていたので、周囲も自然とそれに影響されていったのだ。

.....ああ、いや。

ひとりだけ。

そんな自分にも、友達がいた。

そいつは歩いたりしないから、足音なんかたてようもないのだけど、自分から逃げることもなかつたし、神子だなんて崇めてくることもなかつた。

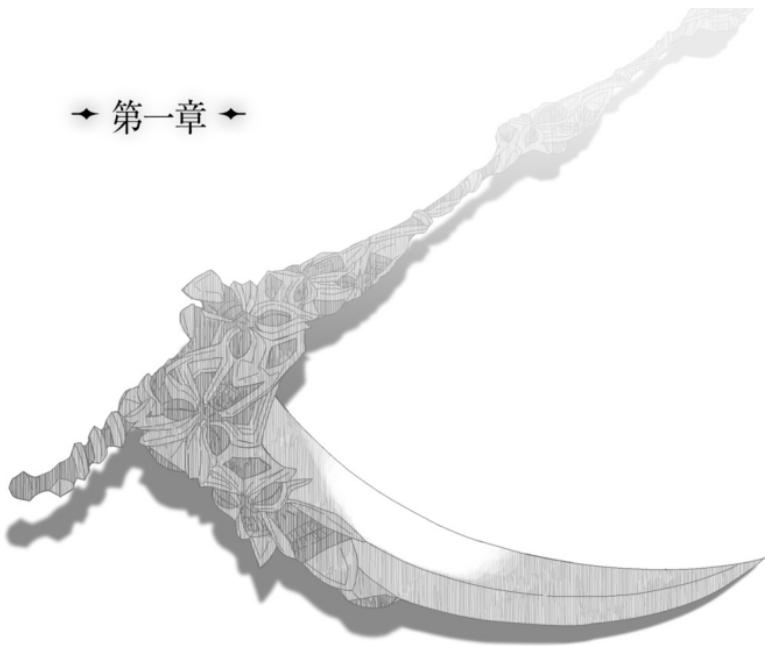
「また泣いてやがるのか、愚図グレイ」

しおりちゅうそんのことばかりを言う、鳥籠に入った匣はこ。

自分が変わり果ててしまったのと、入れ替わりに目覚めた封印礼装。

そして、今は一

◆ 第一章 ◆



狭い地下通路で、自分たちは座り込んでいた。

地肌を剥き出しにした壁と天井は、今にも崩落してしまいそうで、内側の者をひどく不安にさせる。普通に考えれば数百年以上はこのままだったのだろうから、怖がる必要もないのだが、どうしても視覚効果は人間を蝕むものだ。

「……つまるところ、撤退したわけだが」

と、呼吸を整えながら、師匠が喘いだ。

その視線は、新しく加わった人物へと注がれていた。

曖昧な顔をした、白銀の騎士がそこに佇んでいたのだ。

もっとも、曖昧というのは表情のことではない。実際に、顔だけではなく、手足を含んだシリエット全体がぼうと霞かすんでいるのである。それでも妙に感情豊か一というか表現豊かな立ち居振る舞いもありまつて、おおよそどんな心情を抱いているかは読みとれる。

「当然だろう。もともと、オレはこういう切った張ったの大道芸向きじゃない。大事にするのは女を抱く手と、この舌だけだ。あの辛気臭い骸骨兵どもをかき分けて、安全地帯まで戻ってこられただけでも、得難い幸運と思ってほしい」

などと、堂々言ってのけるのだから筋金入りだ。

実際助けてもらったのだから、それに返す言葉なんてないのだけだ。

あの骸骨兵たちから逃れ、わけも分からぬままに走り続け、ようやっと辿り着いた場所だった。どうやら、この地下洞窟は最初に下りてきた以外にも、多くの分かれ道とつながっているらしく、そのうちのひとつに自分たちは身を潜めていたのであった。

そして、

「…………」

自分は、茫然としたままだった。まさか、アッドからこんな騎士が現れるなんて夢にも思わなかったからだ。思うはずもない。

自分の手には、今も大鎌が握られている。

ともすれば、今にも崩れてしまいそうな恐怖に耐えている。

そんなこちらをちらりと見遣ってから、師匠はぽつりと言った。

「サー・ケイと言いましたね」

「ほう。サーをつけるのか」

「もちろんです、ケイ卿サー・ケイ。かのアーサー王の義理の兄なれば」

分かっていた言葉なのに、声をあげそうになった。

アーサー王の伝説。ブリテンに名高い、聖剣と円卓の物語。いくつもの冒険とロマンスに彩られた、騎士物語の原型。

その言葉に、ちっ、と騎士は舌打ちした。

「そりやあ出てきたのがオレで残念だったな。とはいって、伝説なんか、実際に会ってみればがっかりして当然だ。空に輝く星だって、実際に触れてみればだいたいは石の塊なんだろう。中には真実なんてどうでもいいと思わせるだけの輝きもあるだろうが、そんなくだらないのはオレの趣味でないからな」

いかにも不快そうに、眉をひそめる。

そのひとつひとつの仕草が、胸をざわつかせる。

この仕草を自分は知っている。知っているのに、記憶とは一致しない。一致しないのに、その源は一緒だと、自分の中のどこかが確信している。矛盾する感情と印象とが、ずっとずっと自分を揺さぶっている。

「……聖杯に呼ばれたサーヴァントは聖杯が現代知識を与えるが、

そうでないものは世界が知識を与えるのでしたか」

「ハッ。魔術師というのは、いつでもどこでも無駄な話ばかり蓄えてるもんだな。古書みたいに紙魚でもわいてくるんじゃないか？」

「かもしれません」

生真面目な顔で師匠がうなずくと、騎士はなおさら不景気そうに肩をすくめた。

「だが、答えとしては三十点だ。そもそもオレはサーヴァントでもなければ英靈でもない。座からやってきたんじゃないんだから、世界が植え付けてくれる道理もない。今のはそこしみついたれた封印礼装に刻まれていた知識だよ」

と、訂正する。

ただ、自分には最後の言葉が一番の衝撃だった。

ずっと強張っていた喉が、その台詞を受けて、弾けるように叫んだ。

「アッドは、どうなったんですか！」

思わず、にじりよっていた。

「どうして、呼びかけても答えてくれないんですか！　壊れてしまつたんですか！」

初対面の相手に、これだけ詰め寄るのは、自分の人生では初めてだったかもしれない。怯えも恐怖も何もかもを忘れて、今の自分は白銀の騎士へと迫っていた。

騎士の手が伸ばされる。

こつん、と拳で大鎌の表面をこづいて、

「壊れたわけじゃない」

と、騎士一ケイはかぶりを振った。

その言葉に、どれだけ救われただろう。

「でも、しばらくは機能停止だ。オレをこうやって実体化させてるのも、ずっと溜め込んでいた魔力を使っての裏技みたいなもんだろう。無論、ここがやりやすい環境だったというのもあるだろうが」

「機能停止……」

大鎌を握りしめ、自分がごくりと唾を飲み込む。一体それはどれだけの期間か。

一日か一ヶ月か一年か。それとも、もっとずっと長いことなのだろうか？

ただ、その答えは騎士も持っていないようだった。一番知りたいことだったが、ぐっと堪えて、意味のある問い合わせる。訊かねばならないことは山とあり、その中からいささかでもマシなものを見出す。

「じゃあ、どうしてあなたがアッドから……」

「そこの魔術師はだいたい分かってるんじゃないかな？」

と、話を振った。

少し、師匠の返答までは間があった。

慎重に仮説を検討するだけの間をおいてから、

「もともと、アッドの人格モデルがあなたなんでしょう。この場合、人格モデルというのには細かな肉体や装備の条件も加わります。人格を决定づけているのはけして精神だけではないからです。……もっとも、こうして実体化できた理由までは分かりかねますが」

と、師匠は口にしたのだ。

「おおよそ、そういうことだ」

「人格……モデル……？」

「その『槍』だよ」

騎士が、こちらの大鎌を指差して言う。アッドが呼び出したのだ

から当然だろうが、つまりはこの大鎌の正体も知っているということだ。

聖槍ロンゴミニアド。

かつてアーサー王が振るったとされ、聖剣エクスカリバーと並び称される宝具。

「厳密に言えば、その『槍』を封印するための、礼装の人格モデル。もともと、この村はアレの亡骸と『槍』を最初に運ばれた場所でな」

いかにもうざったそうに、騎士が続ける。

「で、その『槍』を封印するにあたって、縁者の中で一番都合のいい人格として、オレが選ばれたってわけだ。ハン、ほかの騎士まぬけどもと違って、武功や神秘には興味ないからな。封印のはずが解除に積極的なんて、馬鹿なことにはならないだろう。あんな見ていられないヤツは、せいぜい眠れるだけ眠っておけばいいんだ」

騎士の言つてることは、自分には半分ぐらいしか分からない。

かつて、彼が仕えていた王のことだろうか。

アーサー王。

彼にとっては義理の弟一自分の故郷の伝説通りなら、義理の妹にあたるはずだが、その関係はずいぶん複雑なものだったらしい。

「最終的に、アレの亡骸がどうなったかは知らない。象徴としてはグラストンベリーやらが主張してるし、きっとそれも意味があるんだろう。人が信仰するところにこそ意味は宿るってなもんでな。もともとあいつが守ってきたのは、この島そのものだ。別段、特定のどこかじゃなければ墓じゃないなんてこともないだろう」

軽々しく、陰鬱な口調で騎士が言う。

しかし、自分の胸にはひどく重たかった。彼の言葉のひとつずつが、彼方の時代から鳴り響く弔鐘のようだった。多分触れてしまつたからだと思う。あの『十三拘束』のうち、五つを解除したときに聞こえた、サー・ケイを含む騎士たちの誓いのひとかけら。

『是は、生きるための戦いである』
イ。

—承認、ケ

「…………」

深呼吸する。

自分の思いは、自分だけのものだ。

あのとき、いくら彼らの声が聞こえたからといって、それを押しつけてはならない。彼らの声に励まされたからといって、そんなことを伝えても、何にもならない。今ここにいるこの人とこそ、自分は向かい合うべきなのだから。

言葉を、慎重に選ぶ。

騎士へと、顔をあげる。

そのタイミングで、こちらを覗き込む騎士と視線が合ってしまった。

「しかしまあ、よく似てるなあんた」

「え」

「いや前言撤回。似てるけど似てないな。うん、まるで似てない」

勝手に納得して、小さくうなずく。

どちらなんだろう。

もちろん、騎士の言ってる相手が誰かは分かる。ずっと、自分がそうなのだとと言われてきた相手だからだ。

「拙は、その、アーサー王と—」

「人間の印象をつくるのは顔だけじゃないってことだ。お前があれに似てるなんてのは百年早いし千年はマシだ。たとえ、お前の由来がどんな風でもな」

言って、騎士はぐるんと肩を回した。

「なんにせよ、あんたらはこのややこしい状況から抜け出したいんだろ。そこまではつきあってやるさ。なにしろ、こいつがオレを呼び出したのは、そのためだ。労働環境はいささか難ありだが、まあ短期間なら」

「場所と言わず、状況と言ったのは、私たちに起きた事態を分かってるからですか」

これは師匠が尋ねて、騎士が面倒そうに答えたのだ。

「分かってるとも。二周目とか言ってるんだろ」

二周目。

半年も後の時間軸から、自分たちはズエピアの手によって、この場に移動されてきた。ここが実際に過去かどうかは分からないが、そのように思えるのは確かだ。

かつて、師匠と自分が初めて出会ったその直後の時間。

「それも、アッドから？」

「ああ。ひたすらややこしいが、この娘が見聞きしていたことは、だいたい匣の方でも把握していた。その情報はオレの方でも共有されているさ」

「もうひとつ、お尋ねしたい」

と、師匠が付け加えた。

「この地下洞窟は、一体なんなんですか？」

「残念ながら、アッドが知らないことはオレも知らない。生前のオレが直接連れてこられたわけでもないんでな」

騎士が、大げさに肩をすくめる。

「だけど、確かに、ここはブラックモアの墓地にとって本体といえる場所なんだろう」

ひんやりとした地下の暗がりへ、その陰鬱とした声は沈殿して

いひつた。

【……逃げた？】

その思念は、軽やかに洞窟へ広がった。

中心に座っているのは、仮面の少女だった。

奇怪な骨の兵士たちが、彼女を守るかのように周囲に佇んでいた。ホラー映画みたいに不気味な光景だというのに、なぜか奇妙な莊厳さと真摯さをも伴っていた。

遠く失われた日の、騎士物語のようにも見えた。

【どうやって？】

尋ねられると、何人かの骨兵がガチガチと歯を噛み合わせた。まともな言葉にはなっていないのだが、その動きは何らかの情報を少女に伝えたらしかった。

【白銀の騎士が現れた？】

数秒ほどの間をあけて、思念が続いたのだ。

しばし、仮面の少女は顎のあたりに触れて考え込んだ。

【追え】

骨兵たちが動いた。

いくつもある洞窟の分かれ道を、三々五々と散らばっていく。どのような仕組みかは分からぬが、骨と魔力だけで組まれたような彼らは自己の判断能力も有しているらしい。

仮面の少女は、変わらずに岩に座り込んでいた。

その岩と纏った鎧は、鉄の花に似ていた。だとすれば、座り込んだ岩は玉座に似ていたかもしれない。立ち去った骨の兵士たちが近衛の騎士とすれば、彼女こそは一国の女王というべき風格を備えていた。

地下世界の女王。

古代であれば、冥府の女王と呼ばれただろうか。

しばらくして、

「逃げられるのなら……逃げるがいい」

と、囁ささやいたのだ。

石を擦り合わせたごとき、嗄しゃがれ声だった。もう何年も喋ったことのない者が、無理矢理声帯を動かしたかのような。

「遠く遠く、誰の手も届かぬところまで。もしもそんなところがあるのならば、全て遠き理想郷アヴァロンまで」

言葉は、祈りに似ていた。

「……だが、そんなところは、どこにもあるまい。まして、私とお前には」

低く、声が響く。その名残さえも闇に消え失せたとき、ことん、と別の音がした。

仮面が振り返る。

ちょうど、骨の兵士たちが消え失せたのと逆の方角だった。

【何だ】

再び思念で問い合わせた先に、気配が生まれた。

気配は何事かを仮面へと告げて、仮面もまた何度も小さくうなづいた。

【……そうか。以前から監視されているのは聞いてたが、教会の側も動いたか】

仮面の思念は、ずっと昔から分かっていたことを、改めてなぞるようだった。

だから、その続きも、何年も前から演算している結果を出し直すぐらいに速やかで、いっそ退屈そうな響きを帯びてもいた。

【分かった。ならば、私は古い契約に従って、彼らを排除すると誓おう】

生ぬるい風が、地下に吹いた。

思念は、やりとりの最後を、こう締めくくったのである。

【私が、彼女になるときだ】

*

夕日が、地平線にかかっていた。

べったりと山麓を汚す赤色の中、村ではいくつもの影がせわしなく動いていた。

その中心が、教会だった。歴史こそあるものの、ごく穏やかで平凡な営みを続けていた場所は、まるで異なる気配に侵食されていた。

まず、その門が打ち砕かれていたからだ。

手近なステンドグラスは叩き割られ、聖水盤も鈍器か何かで打擲され、聖餐皿や香炉といった祭具も残らず床に投げ捨てられていた。

外界から持ち込まれた宗教的因素を片端から毀損したその施設の在り方は、まるで村が本来の姿を曝け出したかのようにも見え……かろうじて無事な説教壇では、司祭ならざる人物が佇んでい

た。

「……では、そのように」

と、嗄れた声が流れた。

わずかな間をおいてから、老婆が視線をあげる。

おばば様、と村では慕われている人物だった。事実上の長とも言えるだろう。

その前には、多くの村人が集まっていた。人数的には、いつも礼拝の際に集まる数の倍程度。ただし、今聖堂をどよもしている雰囲気は普段のそれとは決定的に違っていた。いや、この場合、彼らも本質を曝け出したというべきだろうか。

「聞け。我らの王が欠片は、ついに選択を下された！」

おお、と村人たちから歓声があがる。

老婆の言葉を、彼らは神から託された預言のごとく受け止めていた。

本来、彼らはこのために集ったものだ。

平凡な村人など偽りの姿。彼らは何世代も何十世代も前から、このときに向けて生きてきた。とりわけ、グレイがあの姿になった折からは、全員がこの時代に生まれたことを歓喜し、ただ待ちわびていた。

古道具屋で埋没していた中年の店主は鋭い鋤すきを構え、いつも軒先で微睡まどろんでいた村唯一の食堂の老シェフはひっそり隠していたナイフを研ぎ澄ましていた。

誰もがあの少女のことを思い出しては、相好を崩した。

誰もがあの少女の成長を、我がことのように喜んでいた。

「分かってるな」

今、老婆が下知する。

声音は何十年も若返ったようだった。

「我らの王を迎える。未来の王を迎える。ようやっと、そのときが来た」

誰ひとり、咳しわぶきもあげはしない。

しかし、いずれの全身からも高揚が漲っている。もはや狂信と言って良い域の、強烈な意志だった。おおよそ百人ほどの人々はこれ以上なく団結し、ひとつの巨大な生き物と化したかにも見えた。

「けして、この村の外に出してはならぬ」

さらに、老婆が言う。

「マグダレナ」

呼ばれて、しずしずと一人の女が歩み出た。

グレイの母だった。

自分がそんな名だったことをやつと思い出したように、晴れ晴れと母は顔をあげた。

「グレイの居場所は分かるか？」

「はい、見当はついています」

朗らかに笑いつつ、うなずいた後ろで、ぼたぼたと何かが垂れていた。

夏の空気にむっと嫌な臭いを放つ、赤色の水たまりだった。

がっくりとうなだれた、教会の通信員である。縛り上げられたその男の傷口から、いまだに血がこぼれているのだった。訓練された人間さえ耐えられぬ手際の良い拷問は、いまマグダレナと呼ばれた一グレイの母によってなされたものだ。

血まみれの手をそっと掲げて、彼女は頬ずりした。

「いまや、教会は我らの敵だ」

高らかに、老婆は宣言する。

「討ち滅ぼせ。かつてこの山で独立を守ったごとくに。吼ほえ猛た

けれ。この土地こそは、けして侵略されぬ我らの聖地だと。—そうだ！ 遙か伝説の時代から我らは王を待ちわびてきたのだと、今こそ誰はばかることなく叫ぶがいい！」

そこで、ふわ、と老婆の表情は柔らかくなった。

皺だらけの手をあげる。碎けたステンドグラスの狭間から差し込む夕日が、つかのま血の色にその手を染め上げた。

「我らの、黒き聖母に誓って！」

黒く塗られた聖母が、彼らをいつもの表情で見守っていた。

「……今のうちに、もうひとつ確認しなきゃな」

と、騎士が持ちかけた。

慎重に、周囲の地形を調べながらである。この騎士いわく、戦うことはともかく逃げることなら一家言あるとかで、闇雲に地下道を進むのではなく、近場の分岐路をひとつずつ確認するところから始めていた。

「一周目の三日目後半から四日目にかけて、お前たちは何をしていた？」

その言葉に、喉が低く呻うめきを漏らした。

曖昧に霞んだ顔で、騎士はまっすぐに師匠を見つめていたのである。

「あなたは、覚えてないのか？ アッドの記憶は引き継いでるとか言ってなかつたか」

「残念だが、三日目の夜あたりからは、アッドの記憶にもないようだ。教会や村の連中と会って、家に帰って、夕食をとったあたりで終わりだ。おそらく、グレイの食事かなんかに薬でも盛られていたんだろう。もともとアッドの意識はグレイと同調してるから、こいつが深く眠ったり意識を混濁させていれば、アッドも似たことになる。そのへんの仕組みは、村の連中だって分かってるだろうしな」

「待て」

と、師匠が手をあげて、話を止めた。

「薬を盛られたと言つたな」

「おいおい今更だろ。そのまんまだよ。オレが狙うような頭のゆる

い女じゃあるまいし、あの村がグレイを大切にして、指一本触れな
いなんて思っていたわけじゃないだろ」

かすかに、師匠の肩が震えた。

もちろん、分かっていたはずだ。

この二周目で師匠と再会して、一周目の出来事について整理した
際、四日目について詳しく触れなかったのは、自分のトラウマに踏
み込むのを避けてくれたからだ。故郷を出た直後の自分は、極端に
村の話題に触れることを嫌がっていた。

もうひとりの自分の死体が出たなんて聞かされていても、もはや
何の興味も覚えないほど—徹底的に、自分はあの村から目をそらし
ていた。村を出た最後の日の出来事についても、考えようとな
かった。もはや行く場所などないのだからと、過去のすべてを打ち
捨てて、ロンドンや時計塔に馴染もうとした。

きっと、師匠や、ライネスを含むエルメロイ教室とのやりとりが
なければ、この村に来ようなどとは考えなかっただろう。

「最初から、あの村はそういう場所だ」

騎士が、囁く。

皮肉げな語り口は、他人ではなく己に言い聞かせているようにも
思えた。

「グレイを、アーサー王と同じ身体に仕立て上げるための村だよ。
ああ、そんなくだらないことを一族揃って、どんだけ続けてたんだ
ろうな。執念深いどころじゃない。先祖代々といえは聞こえはいい
が、到底そんな価値はあるまいに」

罵倒とともに、分かりきった真実を、騎士が告げる。

ずっと、自分が覚悟していたこと。師匠が一瞬だけ硬直してくれ
たのは、きっと喜ぶべきことなのだろう。神秘に触れる者の多く
は、世俗的な良識や思想などすべて無視する。いいや、そもそもそ
んなものは最初から念頭に入っていない。今まで何人も出会って
きた魔術師たちと同じように。

「ところでグレイ。お前は、本当に一切合切覚えてないのか？ 薬

で意識が混濁していたとしても、一切の情報が遮断されるわけじゃないだろ。阿あ呆ほうだろが粗そ忽こつだろが、本当は何かしら、頭の隅っこにでも隠し持ってるんじゃないのか？」

まるで、鋭い槍の切っ先を、つきつけるような言葉。

「あの村を出た後、お前が故郷についてずっと触れようとしたのは、つまり、そういうことなんじゃないか？」

その舌鋒に、頭の中で火花が散った。

「一痛つ！」

「グレイ！」

駆け寄ろうとした師匠を制止して、自分は片手で頭を押さえていた。

そうだ。

あのとき、自分は夢うつつではあっても、かすかな意識を残していた。

あれは、ああ、そうだ。五感のほとんどが朦もう朧ろうとしているが、それでもわきあがる臭いだけは、まだ鼻の奥にこびりついている。もつれて腐った草と水の臭い、吸い込んだこちらの喉までも爛ただれてしまいそうな瘴しょう気き。この村で、そんな場所の記憶はない。だけど、そうなるだろう地点には心当たりがあった。

「あれは……沼の……」

「沼？」

訊き返した師匠の声が、遠かった。フラッシュバックする感覚が、自分の脳を揺さぶっている。確かに経験したこと。この感か覚ら器だが受け止めたはずの、しかし自分の中から消え失せてしまった欠片。糸車を回すようにして、必死にその記憶をたぐりよせていく。しかし、たぐりよせた端から、泡のように消えてしまう。

「拙は……そう……会ったんです……」

何と？

これ以上、思い出せない。

封印された記憶は、いまだに固く扉を閉ざしている。ほんの少し開いたその隙間から、わずかに光がこぼれた程度のことだ。砕けた欠片を搔き集めた果てに、一瞬だけ何かの像が浮かび上がった。

いや、声だ。

何十とも何百とも思える、けたたましい鴉の鳴き声。

そのすぐ近くで、自分に向けられた、あの叫び。

—『お前は……私に……』

血まみれで倒れた……ああ……あの仮面こそは。

「鴉たちの……中で……もうひとりの……拙が……血に……」

「グレイ！」

今度こそ倒れかけた自分の背中を、師匠が支えてくれた。

「これが、村について考えることを嫌がってた理由か」

騎士が、軽く肩をすくめる。

「アッドもあんたも、優しすぎたのは良し悪しなんじやないかね。魔術師らしく夢見のひとつでもかけてやれば、案外解決したかもしれないぜ」

「考えなかったわけじゃない」

と、こちらの背中に手を回したまま、師匠が返した。

「だが、トラウマと戦っている相手の意識へ介入することは、対象の人格へ大きな影響を与える。……それと、魔術師らしいということといえば、弟子を大切にするのも、当然課されるべき義務のひとつだ」

「は。それが優しすぎるっていうんだ。阿呆め」

ほんやりした唇を尖らせて、騎士が舌打ちする。

「で、今のグレイの話の後、お前のもとに預けられたわけか？」

「……私のもとには、四日目の朝、ベルサックが意識を失った彼女を抱いてやってきた。この娘を預かってほしい。黒い聖母のもとでグレイの死体が出ているから、追われる事はない。細かいことは訊くな。それでこの娘は救われるし、お前はブラックモアの墓守を得られるだろうと」

「なるほど。つまり、一周目は蚊帳の外だったわけだ」

ため息とともに、騎士が頭を搔いた。

「放っておけば同じ結果になったかもしれないが、あいにくもう触れてしまった。だいたい同じ結果になんて仕方ないしな。……だが、そうすると、ベルサックと村の間に何があった？ 何かの儀式にグレイが使われていたってことは、ベルサックが、村からグレイを奪還したのか？ それとも、もっと別のトラブルがあった？」

「……分からぬ。当時の私は、そのことについて問わなかつた」

そこまで言ったときだった。

突然騎士が、漠然とした顔を地下道の壁へと寄せて、

「……こりやまずい」

と、囁いたのだ。

「どうか、しましたか」

「誰かが、追ってきてる」

と、暗闇を凝視した。

緊張とともに、自分もゆっくりと身を起こした。

大鎌のままのアッドを握りしめる。この姿で停止してくれたのは、彼が残してくれた恩おん寵ちようにも思えた。少なくとも自分

は戦える。師匠を守ることだってできる。

しかし、その決意は、人影が露あらわになるとともに崩れ去った。

「……ここだったか」

と、重い声が響いたのだ。

師匠の魔術の光に、逞たくましい人影が照らし出される。すでに初老に達しているのに、巨大な斧を片手で軽々と握りしめていた。

「おいおいおい、タイミングよすぎだろ。悪魔の噂をすればSpeak of the devil……ってか」

「ベルサック……さん」

喉に、いがらっぽいものが絡んだ。

どんな顔で、今この人と向かい合っていればいいのだろうか。

自分が故郷で過ごしていた頃、この人は唯一自分を『人間』として見ていてくれた。さきほどケイが話していたような、アーサー王と同じ身体ぐうぞうとしてしか考えられなかつた自分を、少なくとも彼は「次代の墓守」として育ててくれた。本来はまだ彼の所有物であるアッドを、惜しみなく自分に与えてくれた。

ベルサック・ブラックモア。

ブラックモアを後継する、正当なる墓守。

「……想像しないおまけがついていたようだ」

と、曖昧な姿の騎士を見やり、ベルサックは目を細めた。

「失礼ですが、どなたかな、あなたは」

「やれやれ、また話がややこしくなるな。こいつらにも話したが、ケイでいいよ。あ、お前の自己紹介はいらないぞ。嫌というほど知ってるし、男の経験なんざ改まった顔で教えられたくもない」

いかにも面倒くさそうに、騎士が肩をすくめる。

「ケイ？ サー・ケイ？」

「おいおい、お前もサーづけかよ」

うんざりとばかりに、騎士がため息をつく。

それでいて油断なく、手は剣の柄に触れていた。もしもベルサックが敵だと判断すれば、刃は躊躇なく墓守を断つだろう。いや、この騎士の言葉を信用するならば、刃よりも舌先三寸の方が先だろうか？

じろり、とベルサックの視線は、こちらの大鎌へと吸いついた。

「アッドから、ですか」

「おや、さすが付き合いが長いだけに、その程度は知恵が働くか。まあだいたい当たりだよ。こいつが機能を停止する前に、無理やり防衛機構を通じて靈基カラダを与えられてな。おかげで子守をさせられてるって寸法だ」

「…………」

自分は、ただ混乱していた。

骨兵なら来ると思っていたし、村のほかの人間なら覚悟もできていた。しかし、最初に出会うのが、この相手だとは。

固まっている自分を庇うように、師匠が前に出たのだ。

「ベルサックさん。あなたは、私たちの敵ですか？ 味方ですか？」

慎重に、問う。

極度の緊張が、洞窟の空気を軋ませた。

それが頂点に達するより早く、ベルサックは踵きびすを返した。

「……ついてこい」

岩を打つブーツの底が、硬い音をたてる。いつも自分が後ろをついていった音。

反射的についていきそうになる自分に、師匠がすっと手を横に出した。

「質問に答えていただいていません。仮に、敵や味方という単純な分類が不適切なものだとしても、あなたが把握しているだけの事情をお聞かせ願えますか」

「あおよそは想像してるだろう」

「想像と、確認された情報とはまるで異なります。あなたとて、サー・ケイのことは想定外だったでしょう」

「…………つ」

小さくうなりを上げて、ベルサックが口を開く。

「……なるほど、最低限の確認は必要か。今、グレイを教会と村の双方が狙ってる」

「双方？ つまり、教会と村人たちとで、目的は違うわけですか」

「当然そうなる」

と、ベルサックがうなずいた。

「ブラックモアの墓守である、あなたも目的が違う？」

「途中までは、村と一致している」

首筋の裏が、ぞくぞくと粟立った。

この人は自分の敵なのか、味方なのか。

自分が生きてきた年月で、多分最も長く一緒に過ごしてきた墓守。この人も、自分をアーサー王と同じモノへ仕立て上げるために、その人生を費やしてきたのだろうか。

あまりにこんがらがった事態に、自分の頭はどうにかなりそうだ。

「なぜ、村人はグレイを求めるんですか」

「今更、それを訊くのかね。時計塔の君主ロードが」

師匠の言葉に焦れたのか、ベルサックの口調は硬い。

対して、師匠はゆっくりと続きを紡いだ。

「さきほど、サー・ケイからも言われました。あの村はグレイを、アーサー王と同じ身体に仕立て上げるための村だと。ですが、それ自体が目的だとは思えない。同じ身体に仕立てるべき意味がなければ、何十世代もの執念は貫徹できない」

さらに、奥へと。

チェスの駒を進めるみたいにして、積み重なった謎に、ひとつのカタチを与えていく。

「いくつかの想定はあります。アーサー王の伝説にはいくつもの異説、異聞が紛れ込み、時計塔や聖堂教会の思惑も入り交じって、その真実など掘むべくもなくなっていますが……こんな、有名な一節があります」

ちら、と騎士の方を窺うかがってから、師匠はこう続けた。

「かの王の墓碑にはこう刻まれている。すなわち、過去の王にして未来の王、と」

「…………」

「その言葉自体に何らかの意味があったかは分からぬ。普通に考えれば、愛された王であったというだけでしょう。世界各地で見られるように、あれほどの賢王ならばいずれまた現れるに違いない、救ってくれるに違いないという救世主願望。そんな素朴な祈りと考えるのが、最も自然なはずです」

沈黙したままのベルサックに、言葉を連ねる。

騎士の顔もまた、そんな師匠に独特の気配で向いている。表情は霞がかかる分からぬが、一体どんな気持ちだろう。かつて自分が主人と認めた相手を、千年も後の相手からこんな風に話されるのは。アーサー王が伝説通りの英雄だったとしても、そうでなかつたとしても、たまらない気分になるのであるまい。

だって、それはもう二度と出会えない人との語らいみたいだ。

どうやっても取り返しはつかなくて、しかし刻まれた結果だけは痛々しく、自分たちの胸に突き刺さる。あのときどうすればよかつたのか、何を話すべきだったのか、今更どんな正解を思いついても無駄で、ただ立ち尽くすしかない。

あのフェイカーが憤怒していたのも、結局はそういうことじゃないだろうか。

「だからこそ、村人たちは王の帰還を待ち焦がれているのでしょう」

と、師匠が告げる。

「約束された、未来の王の帰還を」

その囁きに、息が詰まった。

未来の王。あまりにも煌きらびやかで、いっそ僕はかないまでの祈りに満ちているのに、今自分を追いつめようとしている言葉。

そして、ここまで材料が揃えば、愚かな自分にも続く材料ぐらいは想像がつく。

ぎゅつ、と胸元を掴み、

「……ベルサックさん」

と、話しかけたのだ。

「拙は……この骨兵たちと一緒にいた、仮面をつけた人を見ました」

「会ったのか」

と、ベルサックが表情を硬くした。彼とともに長い時間を過ごし、風の日も雨の日も墓地を歩いてきたが、それでも見たことのない面もちだった。

「あれは、誰なんですか。この地下には誰が住んでいるんですか。……いえ、彼女もまた、拙と同じように、アーサー王を模したひとりなんですか」

答えは、すぐには返らなかった。

それでも、今だけは引き下がらなかった。

「教えてください、ベルサックさん」

「…………」

沈黙に、歯ぎしりが交じった。

次の瞬間、ベルサックが猛然と振り返ったのだ。

「一その通りだ！」

びゅう、と斧が打ち振られた。

こちらの髪を幾筋か切り飛ばしつつ、中空を飛來した鋼の質量は、自分たちの背後から近づいてきていた骸骨兵の頭蓋を打ち割ったのである。

頭蓋に埋まつたままの斧を回収して、墓守が肩をすくめた。

「これで、俺も追われる身だな」

「それはお気の毒」

ケイが、小さく口笛を鳴らす。

じろり、とベルサックの視線が騎士を射貫いた。

「気づかないあなたでもないでしょう。試しましたね？」

「もちろん。こんなの試すなら早いうちがお得だろ。あとで人間関係が複雑になってから、あれこれと気をもむより、よほど楽だ。いつもこいつも敵だか味方だか分からぬなんて状況を楽しめるのは、正真正銘のマゾか不感症だけだっての」

つまり、骨兵にどうベルサックが対処するか、ケイは観察していくことだろう。

壁に耳を寄せていた騎士は、曖昧にぼやけた顔をあげて、こう続けたのだ。

「とはいへ、話の続きは後だな。さっきの音で見つかったらしい。次々来るぞこりやあ」

すぐに、自分の耳にもその音が届いた。

鎧の部品同士が擦れ、金属が地面を打つ音は、間違いなく新手の骸骨兵たちだろう。

師匠が身を強ばらせ、ベルサックは再び斧を持ち上げる。それから、墓守が騎士へと尋ねた。

「あなたはその剣を使わないのか」

「ははは、子守に呼ばれたが、肉体労働は可能な限り御免被る。だけど、少々は目端が利くつもりだぞ。さっきから、あちらに空気が流れてるよな」

騎士が、ぐるりと振り向く。

その向こう側はぐねぐねと曲がり、分かれ道になっている。

「サー・ケイー？」

「可能なら忘れてしまいたいんだが、ちと存在感がありすぎて忘れられない最悪な宮廷魔術師が言っててな。もしも許されるのなら、一番マシな戦術はさっさと抜け出すことだってさ」

小気味よく身体を回転させて、騎士が走り出したのだ。

あまりにも躊躇ない逃走に、こちらが呆気にとられていると、逃げ出した反対側からたちまち骨兵たちが雪崩れ込んでくる。

「っー！　離れろ！」

ベルサックの斧が、強烈に壁を打つ。

凄まじい威力は不安定な地盤を刺激し、直撃した周囲の土を大きく崩落させた。

最初の三体ほどが土砂に巻き込まれる中、自分たちは一直線にケイの後ろを追った。

*

崩落に躊躇した骨兵たちは、すぐに混乱から回復した。

巻き込まれた者たちの救助は諦め、崩れた通路を再開通すべく、何体かが大鎌を振るい出す。主に命令された以上、彼らに撤退の選択はない。もとより疲れや倦けん怠たいもない以上、ただ彼らには動作あるのみだ。

仲間の身体を巻き込むことさえ厭わず、幾本かの鎌が振るわれる。

一糸乱れぬ揃った動きは、最初からそういう意図でつくられた自動機械に見えた。

しかし、数秒で、その動きが止まったのだ。

「……ちえ」

と、舌打ちが響く。

「せっかく追ってきたのに、地下道ごと崩落させるなんて無茶するものね。もうちょっとで捕まえられそうだったのに」

何も言わず、骨兵たちは振り向いた。

彼らがいかなる力タチで判断能力を有しているかはしれないが、それでも神秘によって形成された機構システムには、困惑の火花が散ったやもしれない。

暗い地下道に、同じく漆黒の尼僧服を纏う女が立っていた。

鼻のあたりの、淡いそばかす。

鳶とび色いろの瞳。禁欲をもってなる尼僧としては、いささか過剰なプロポーション。

地上でシスター・イルミアと呼ばれていた彼女の名を、骨兵たちが知るはずもない。

「ハイ♪」

魅惑的なウィンクも、当然に彼らは無視した。

無造作に、つっかけたひとりが剣を振り落とす。肉厚の刃は、人間の頭ぐらい撫でるだけで切り落とせるだけの重さと鋭さを兼ね備えていた。

しかし、その刃を紙一重で躱かわして、尼僧の身体が宙を舞ったのだ。

暗闇に、三日月が生まれたかにも見えた。

骨だけの延髄を、飛鳥のごとき蹴りが打ち抜いたのである。打撃地点を起点に、尼僧の身体がさらに回転した。ほとんど重力を無視して、月面宙返りムーンサルト。体重すべてを乗せて、踵かかとを別の骨兵へと叩き落とす。さらに着地ざま、思い切りしゃがみこんでから細い足が弧を描き、転倒させた骨兵の胸骨を踏み潰した。

驚くべき強さだった。

しなやかさと敏捷力は肉食獣、卓越したバランス感覚と技術は人ひ間との極み。

いつのまにか、手足には灰色の鎧甲がつけられていた。

その表面から、幾条もの紫電が発している。おそらくは鎧甲に仕込まれた何らかの呪体一隙間から覗く、古い紙片の効果なのだろうが、尋常な打撃ならばものともしないだろう骸骨兵たちが、その鎧甲で打撃されたが最後、復活の兆しさえ見せないのである。

聖堂教会の代行者たちが使う標準装備。

名を、灰かい錠じょう。普段はただの手袋やブーツに擬態しつつ、設定された紙片を滑らせただけで本来の姿を取り戻す概念武装。黒鍵に比べればずっと扱いやすいとされ、多くの代行者たちに選ばれてきた装備だった。無論、扱いやすいからといって、その威力や性能が軽んじられないことは、今の一幕の通りである。

「カモン」

ちょいちょい、と尼僧が人差し指を振った。

すっと背筋を伸ばし、構えたのはボクシングのアップライトスタ

イル。

残った五体の骨兵たちが、今度はまとめて襲いかかった。右と左から二体ずつ、そして頭上から飛び上がった者がさらに一体。相手に対処を惑わせるよう、わずかな時間差とフェイントをつけたのは、熟練の戦士のなせる技であった。

ハミングとともに、尼僧はステップを踏んだ。

稻妻と衝突音は、ちょうど五回響いた。

「あ、ごめんね。やりすぎた」

謝罪を口にした直後、四体の骨兵が胸骨と頭蓋を穿たれて崩れ落ち、最後にアッパーで打ち上げられた骨兵が天井に激突して、粉々になって地面に散らばった。

自分の頭にも少しかかった破片を、うざったそうに払ってから、シスター・イルミアは小さく鼻を鳴らして振り返った。

少し遅れて、背後から、ランタンの光が浮かび上がったのだ。

「遅かったじゃない」

「……ひい、はあ、そんな、ことを、言われ、ても」

ほとんど球体をした司祭が息を荒らげ、壁に手をつきつつ、周囲を見回した。

もはや、そこにあるのは骸骨の破片ばかりだった。

「……君がやったのかね」

「もちろんそうよ。こんな異端の死者ども、存在自体が主を侮辱する輩だもの。灰は灰に、塵は塵に。主の御心にそぐわぬ者の、黄泉還りなど認められるはずもなし」

あっけらかんと、尼僧が言う。

無論、それはひとつの理屈だ。嘗々と紡がれた人の指針が、言語化された結果。彼女は当たり前に正しく、かの普遍的たる教えの中では否定する余地は少ない。

フェルナンド司祭は、ほんの少し目を細めた。

ほんの少しだけ。

「さあ。さっさと追うわよ、フェルナンド様」

ぱしん、と拳と手のひらを打ち鳴らして、シスター・イルミアは頸をしゃくったのであった。



進めば進むほど、地下道は狭きゆう隘あいとなり、獣の顎めいた印象を強くしていった。

湿気が身体にまとわりつき、じんわりと汗が浮き出てくる。酸欠にならざるにすんでいるのだから、一応空気の流れはあるようだが、蒸し暑さはいかんともしがたかった。

（自然にできた、地下道なんだろうか……）

分からぬ。

もともと教会の地下室から入ってきたわけだが、現代ならいざしらず、古い時代の人間がつくれそうな規模ではまったくない。だけど、人の手が何ひとつ入っていないのかと言われると、やはり首を傾げるのだ。

この地下道には、どこか人為的なものを感じる。創造者の意図というか、悪意というかが滲にじんでいる。だからこそ、歩を進めるたびに、誰かの内臓にでも呑まれていくような悪寒に襲われてたまらなかった。

そんな地下道を小走りに行きながら、ベルサックが口を開く。

「……村人たちがお前を祭り上げるのが目的なら、教会はお前を殺すのが目的だ」

「……拙、を」

薄々感じ取ってはいても、こうして断言されると言葉に詰まった。

自分を中心にして、勝手に組み上がっていく組織と世界。蜘蛛の糸にも似て、多数の思惑や利益関係を呑み込んで、どこまでも広がっていく。何ひとつ知らないうちに、こんなにも複雑に絡み合った果ては、もはや誰にも全体が分からぬほどだ。

だけど、今なら、ほんの少しだけ理解できる気がした。

「もともと、教会と村人は監視しあっていたんだ。ずいぶんと昔からな」

と、ベルサックが言う。

「アーサー王とかの宗教の関係については、文献でもさまざまに意見が割れるがね。聖堂教会の中心勢力からすれば異端そのものだ。その復活なんて認められるはずもない。しかし、だからといって、まだ成功してもいい、どのような影響を及ぼすかも分からぬ儀式で、村ごと滅ぼすほど教会が非人道的な組織というわけでもないんだ。

同時に、村人の側としても、自分たちの目的は捨てられないが、かといっていつ達成できるか見当もつかない目的のために、教会と全面戦争するほどの動機はない。結果として、互いに監視し合う状態ができあがり、それは何百年以上も続いた。あまりにも代替わりを経て、互いの警戒心も薄まり、一見すれば平凡な村に見えなくもないぐらいに」

「いかにも、聖堂教会の考え方ではあるな」

師匠が、短くまとめた。

曲がりくねった薄暗い地下道を歩きながら、自分はぼんやりと考えている。

じゃあ、本来の四日目——一周目で、自分を殺したのは教会の人間なんだろうか？

同じ疑問を抱えているのか、師匠の横顔は暗かった。

「じゃあ、あの仮面の少女は？」

その問いに、ベルサックが唇を噛み、しかし今度は数秒ほどでもう一度口を開いた。

「……君主ロードならば、人の三要素を知っているな」

「もちろん」

ベルサックの問いに、師匠がうなずいた。

「肉体と、精神と、魂。いずれも人間を構成する、欠かせない要素だ。タンパク質や脂肪を揃えれば人間になるわけじゃない。これらの要素が密接に関わり合うことでこそ、人は人たりえる」

と、師匠が言った。

同じ内容が、前の授業でも話されていたのを覚えていた。確か、生徒のレポートに対する講評だったろうか。魔術の視点から、人間という存在を解析した結果。

「だったら、説明は省けるな。すでに理解してるだろうが、グレイはアーサー王の肉体を模したものの。千年以上を駆けめして、ようやっとあの村が辿り着いたかけがえのない結晶だ」

当然のことを、ベルサックが話す。

それはそうだろう。今の自分はアーサー王の近似値だ。十年前から、英雄と同じ数字に成り果てた、ただの生いけ贋にえた。

ならば、彼女は—

「仮面の少女は、アーサー王の精神を模倣したものだ」

「精神……?!」

思わず、声が上ずってしまった。そんなことがありえるのか。

自分は確かに身体なのだろう。たとえば一卵性双生児などを考えれば、その意味は明らかだ。同じ顔、同じ唇、同じ手、同じ爪先。形けい而じ下かの表現をすればそんなところだ。無論、これに遺伝子や、下手をすると腸内細菌などといった項目も加わるのだろう。

しかし、精神とは。

「そんなもの、模倣できるのですか？」

「おいおい、ここに実例がいるだろうが」

と、気だるげな声が響いたのだ。

先導していた白銀の騎士が、「おお探索者たちよ。忘れ去ってし

まうとは心ない」と、大げさに肩をすくめたのである。

「サー・ケイの精神モデル」

師匠も呟いた。

アッドの人格の基礎になったという、白銀の騎士。

考えてみれば、その技術は仮面の少女と同質のものではないか。

「古くには、そうした技術があった。肉体や精神を模倣し、分身ともいえる誰かをつくるための技術が。神代の魔術の名残一はたまた、人の触れ得ざる精霊の領域か」

「さすがに、よくご存じで。現代だと著作権だかなんだか言うらしいが、当時はそんなものありやしない。勝手きままにコピーされたもんさ。オレだって適切だから選ばれただけで、もともとのオレの許可なんて取られていないからな」

くく、と陰鬱に騎士が喉を鳴らす。

その言葉に、胸がざわざわしてしまう。

今、自分の手で大鎌となっているアッドの、人格の基礎が彼サー・ケイだった。そこまでは分かる。発言の内容や思考は違うけれど、どこか面影が重なるところはある。同じ花が似るように、この騎士とアッドは同じ種なのだろう。

だけど、どこまで一緒なのか。

サー・ケイの義理の妹こそがアーサー王だったなら、彼は自分についてどう思っているのだろう。……いや、そもそも実際のところ、アッドは自分のことをどう思っていたのだろうか。そう考えるだけで、胸が痛み、恐ろしくてたまらなかった。

「ご説明痛み入ります。サー・ケイ」

と、ベルサックが頭を下げた。

それから、言葉を続ける。

「以上をもって、肉体、精神、魂の三者が揃ったとき、アーサー王

が未来の王となりて復活する。少なくとも、村の者はそう信じている」

「それはおかしいだろう」

と、師匠が呑みついたのだ。

「仮に肉体と精神が揃ったとしても、魂は再現できるようなものじゃない。もしも可能だとしたら、それは大魔術ですらありえない。第三魔法そのものだ」

魔法。

以前、時計塔の講義で師匠が話していたことがある。

魔術は神秘でこそあれ、結局のところ人間の手の及ぶ範囲なのだと。科学の進歩によってこの範囲は大きく拡大させられてきた。いまや人間は自らの知恵で深海へ潜り、彼方の地と遅延なく会話をなしとげ、必要となれば別の天体にすら旅立つことができる。

だが、それでもなお不可能はある。

現代に残った数は、五つ。

その五つをさして、神秘の徒は、魔術ならざる『魔法』と呼ぶのだと。

「ああ、だからそんな条件は揃わないはずだった。教会は信じていなかったし、村人だって実際のところ信じ切っていたものはほとんどいなかつたろう」

ベルサックも、師匠の言葉を認める。

それだけ、魂という存在の模倣は難しいのだろう。この地では肉体と精神を模倣できたというが、それでも魂だけはまず届かない。

改めて、ベルサックは振り返った。

「魂の模倣。その答えは、君なら知ってるんじゃないのか」

数秒、間があった。

そんなものを知るはずがないという空白。しかし、ほんの数秒で

それは変転した。

「まさか……」

と、師匠が呻いたのだ。

「サーヴァント……！」

「俺が直接見聞きしたわけではないが、聖杯戦争におけるサーヴァントとは、座に記録された本体から、魂までも模倣して現界させた存在なのだろう」

淡々と、ベルサックが言う。

「ならば、第五次聖杯戦争が始まり、アーサー王がサーヴァントとして現界したならば、三者が揃う可能性がある」

聖杯戦争。

かつて師匠が参加したはずの戦い。もう一度参加したかったはずの戦い。

英雄の魂までも再現するという、魔術師にとってすら異形の闘争。だが、遙か極東で行われるはずの魔術儀式が、まさか、こんなところでつながってくるとは。

「無論、その可能性は高くない。幾多の英靈からわざわざアーサー王が選ばれる確率など、むしろ極小といつてもいいだろう。だが、その可能性に、聖堂教会は気づいてしまった。なにしろ監督役を派遣してるぐらいだから、聖杯戦争についての情報は時計塔以上に把握している。……だから、ずいぶん前から本部の人員を派遣して、村の様子をつぶさに調べていたわけだ」

「……シスター・イルミアか」

数年前から、教会に派遣された尼僧。

まさか、彼女が聖堂教会の工作員だったのだろうか？

その謎に、あっさりとベルサックはうなずいた。

「ああ、シスター・イルミアはとある枢機卿の隠し子だ」

思いもかけない単語に、息が詰まった。

「枢機卿……表側でもほぼトップだろう?!」

「残念ながら、そんな出身を明らかにするわけにいかず、孤児院育ちということになっているがな。だが、代行者としてもずばぬけた素質を持っている。本来ならばこんな田舎に派遣されるはずはなかったが……それだけ、この村に興味を持っていたということだろう。噂では、自ら志願して、この村にやってきたという情報もあった」

次々に、裏向きだったカードが表に返されていく。

返される速度に、自分の頭がついていけないほどだ。目の前をおびただしい情報が行き来しているけれど、到底その量を受け入れられない。

一体、何が起きているのか。

一体、何が起こっていたのか。

この二周目に至る以前、一周目でも同じく事件は展開していたのか。

「ああ。ついでにいえば、今回の行商にも教会の通信員が交じっていた。どうやら、村人たちの手で捕らえられたようだがな」

落ち着いたベルサックの言葉が、衝撃さめやらぬ脳を、さらに殴りつけるようだった。

「……そん、な」

自分が知らないだけで、あの村には一体どれだけの陰謀が渦巻いていたのか。

もちろん、平凡な村だなどとは思っていなかった。一見はそう思えたとしても、内側にいた自分はこの場所がどういう風に異端なのか、ある程度知っているつもりだった。

だけど、これはあんまりだ。

どれだけのことを、この村は自分から隠してきたのだろう。

人生で一番長く過ごしてきた場所は、いまや一番遠い場所だった。

いつのまにか足も止めてしまっていて、それでやっと気がついた。

「師匠？」

振り向くと、師匠も同じく足を止めていたのだ。

「だから、か」

と言って、師匠がうつむく。

「だから、か……」

もう一度咳いて、顔を撫でたのだ。

「サー・ケイ。そういうことだな」

「まあ、お約束どおりだろ」

肩をすくめた白銀の騎士に向かってひとつうなずき、改めて、師匠は先を行く墓守へと尋ねたのである。

「ベルサック・ブラックモア。あなたの裏にいるのは誰だ？ いや、何だ？」

*

「ちょっとちょっとちょっとちょっと、それってどういうこと！」

けたたましい声が、空間に響いた。

いくつもの水晶球が浮かんだ空間である。最初はひとつだった水晶球が、まるで泡が分裂するみたいに次々と増えて、彼らを取り囲んでいたのだ。

金髪の少年であった。まっとうな不安の上から、好奇心と無邪気

さをバターみたいにたっぷり塗りたくった瞳で、彼は水晶球を覗き込んでいた。

「どうなっちゃってるのこれ！ ベルサックさんはグレイちゃんの味方なんでしょ！ いやいやそもそも、アーサー王の精神ってなんのさ！ ああもう、この水晶球ってば映り悪いんじゃないかな！ 斜め三十度ぐらいで、『強化』した手刀で叩けば直らないかな！」

フラット・エスカルドス。

いうまでもなく、エルメロイ教室にて現役最悪の名をほしいままにする少年だ。

そして、隣にはもうひとり。

「どういうことだ……！」

と、呻きがあがった。

フラットと並ぶ、エルメロイ教室の双璧—スヴィン・グラシュエートの身体からは、薄く稻妻が発している。

魔力の燐光が、少年の怒りに伴って攻撃的性質を帯びているのだ。獸性魔術の必然とはいえ、これほどの出力と攻性を露わにすることは滅多にない。それだけ、少年の感情が自らにも制御しがたい域に達しているという表れでもあった。

「……ふむ。ここまで来た手際は目を見張るものがある。役者の努力はなるだけ報われるべきだろうと、水晶を増やしたんだが、それではお気に召さないかな？」

嘯うそぶくような言葉が、対する青年の返答だった。

青年と形容したが、その年齢は定かではない。時々光の加減に応じて、二十半ばの華やかな面差しにも、五十を過ぎた賢者にも映る。それも上級死徒の特徴なのだろうか。ただ、美しいことと底知れないことだけが確かだった。

アトラス院の院長。

ズエピア・エルトナム・アトラシア。

時計塔では十二人の君主ロードよりも上とされる、幻の地位にある男。

こんなふたりとひとり一もしくはひとつとの対峙が、奇怪な空間で繰り広げられているのだった。

「さきほども話したが、再演には君たちは干渉できない。残念だがその資格がない。なにしろ、当時の村に君たちはいなかったからね。オーディションでの演技は大したものだったが、そもそも条件を満たしていないのでは、バックステージで見守ってもらうぐらいが妥協点だ」

べらべらと喋るズエピアの言葉は、独特の表現もあいまって、正確な意味がとりづらい。

ただ、嘘はついていないのだろうと思われた。

今、エルメロイII世とグレイが、水晶の中で衝撃にうちのめされている。過去世界でせわしなく変化する—あるいは自ら解き明かしてしまった人間関係が、ふたりを追いつめている。

どうして、その場に自分がいないのか。

せめて、このスヴィン・グラシュエートは味方だと、どうして言ってあげられないのか。

苛立ちで今にも魔力が暴走しそうになるのを必死に堪えながら、スヴィンは思考を巡らせている。

(……それに)

とも、頭の隅で思う。

ズエピアが属するアトラス院は、時に『生きた奈落』とさえ呼ばれている。一度その門をくぐった者を、外に出すことがまずないからだ。自らの研究に埋もれ、すべての時間と生命を無尽に捧げる人々。たとえばそれは、冷え切ったサーバルームでずっと稼働しつづけるコンピュータにも似て、もはや生命体と呼ぶことも躊躇ためらわれるなれのはてだ。

その一事をもっても、この院長が外部を放浪していることが異常だと分かる。院長が例外なのか、はたまたこの村の状況がそれだけ

の緊急事態なのは分からぬが、どちらにしても最大限以上の警戒を払わねばなるまい。

(……まず、この場所はなんなんだ？)

瞳だけを動かし、周囲を観察する。

ほんの数メートルの距離が、無限に等しいことを、スヴィンは感じた。

フラットが魔力に対して異常な感受性を持つように、スヴィンは圧倒的に鋭い五感を持っている。その感覚が、この空間ではまともな物理法則が働かないことを激しく訴えていた。その仕組みを解析しなければ、この男と戦うことすらかなうまい。

(……ひとつずつ、だ)

悔しさを噛み殺しながら、スヴィンは思考する。

無様な敗戦は、あの封印指定一蒼崎橙子のときで十分だ。この世界に、獣性魔術だけであらがえない相手がいることはいやというほど理解させられた。ならば、工夫しなければならない。自分の目的をふまえ、勝利条件を設定し、守らねばならないものを確保しなければならない。

まず、この奇妙な仕掛けを、少しでも知らなければ。

「でも、あなたはあのとき村にいたはずだ」

スヴィンは、静かに問うた。

「だったら、先生やグレイさんがいるような、あの世界にいけるんじゃないのか」

「ふむ。その指摘はもっともだが、パラドックスは慎まなければならぬ。くわえて、世界を計算し続ける私が内側に入れば、運営者は私の計算した世界も含めて再計算しなければならなくなるし、私の側もほぼ自動的にその再計算を演算してしまう。これは大いなる矛盾だ。情報量の多い脚本を好む者はいるだろうが、こんな入れ子構造では誰の許容量にもおさまるまい。ああ、私自身、エルメロイII世とあの墓守の少女の奮闘に期待してるのだよ」

言っている意味は半分も分からぬ。

だが、要約すれば、つまりこの状況と深く関与しているはずのズエピア自身でも、あの世界での出来事は自由にならないということだろう。いま見えている光景が本当に過去なのかはともかく、ズエピアの思い通りにならないぐらいには自律しているらしい。

「先生とグレイさんを、この場に戻すのは？」

「残念だが、駄目だ。契約に違反する」

「契約？」

「かつて、アトラス院がこの村の前身と交わしたものでね。私自身が交わしたわけではないが、効力は絶対だ。君たちみたいなイレギュラーがやってきたことも含めて、私は受け容れなければならぬだろう」

（……アトラス院の契約）

そのようなものがある、とは聞いている。アトラス院は特別な契約書を、かつて七枚発行したことがあると。この契約書をもとにした依頼には、必ずや全面的に協力しなければならない……そんな話だったはずだ。

ならば、脱出不能ともいわれるアトラス院から、院長が外に出て放浪しているのも、同じ理由なのだろうか？

「…………」

ひとつずつ、材料を検討する。

宝石を見比べるみたいにして、食べられるものを嗅ぎわけるようにして、スヴィンはとにかく頭脳を回転させる。どれほど地道であろうと、そういうところから始めねばならないのだと、今の少年は痛いほど知っていた。

二度と負けたくないのなら、自分が持っている強みをひとつでも増やさねばならない。どれだけ無様だろうが慘めだろうが、地に這いつくばってでも、あらゆる星の欠片かのうせいを搔き集めなければならない。

(……僕やフラット、それにあの騎士サー・ケイのことを、イレギュラーと言っていたな)

深読みになりすぎぬよう、注意深く精査する。

(……つまり、僕らがここにいることや、先生やグレイたんがどうなるかについては、この相手も計算しきっているわけじゃない)

ここに来る以前、聞いていた話を思い出す。

当時のズエピアは、エルメロイII世やライネスの未来を先回りするような言動をしていたらしい。時計塔とは異なる魔術の果て。無限ではなくても無数の未来を演算して、現実さえも脚本のひとつと豪語するほどの、計算の権化。

そんなズエピアにとってさえ、今の状況がイレギュラーだというのなら？

(……なら)

後ろ手に、指を動かす。

魔力そのものがフラットにだけ読める波長の文字となって、指示を出した。いつもタッグで何かをするときの、やり口だった。

気づかれないように、この魔術を解析しろ、と送ったのだ。

(OK!)

フラットもまた、素早く返事をする。

こちらのコツは、一定の間隔で指をこすりあわせるだけである。指の脂が摩擦されたその臭いが、スヴィンにははっきりと感じられる。それぞれが、魔力と香りという別々の方法で、発信と受信を行う手法。師たるエルメロイII世にも、まだ見つかったことのない伝達方法だ。

目の前の、ズエピアですら気づいた様子はなかった。

フラットなら、おそらくアトラス院の鍊金術にも対応できる。あの森の結界を抜けて、この場に辿り着いたことからも証明済みだ。十分な時間さえあれば、ズエピアに一矢報いるだけの手段を編み出

してくれるだろう。

(問題は、タイミングだ……)

このアトラス院の鍊金術師を、どんなタイミングなら出し抜けるだろうか。

おそらく、自分の企みなど、この鍊金術師は当然に見抜いてる。こうして放置しているのも、傲慢や怠惰ゆえではなく、純粋な評価としてフラットもスヴィンも障害たりえないとの解を出してしまっているからだ。彼の頭脳の中では、すでに何万回も自分たちが敗北しているに違いない。

ならば、必要なのは自分たちだけの努力ではなく、もっと別の要素である。

(たとえば、それは？)

無力さを噛み締めながら、考える。

まるで蝸かた牛つむりの気分。自分が指一本分這いする間に、相手は地球を一周している。それほどの性能差があると分かっていても、なおしがみつくしかない。

(先生が、謎を解決したとき？ あの騎士が何かをやってくれたとき？ それとも、もっと別の何かが起きたとき？)

なんて、他人任せなのだろう。

ぎりぎりと、万力にでも締め付けられたみたいに胸が痛い。

グレイの、憂いを押し隠した表情や声音のひとつひとつが、自分の肺を抉えぐるようだった。ただ見ているだけの行為が、これほどまでに精神と肉体へ負担を強いることを、スヴィンは初めて知った。魔術回路を目覚めさせたときでさえ、こんな苦痛は覚えなかつたというのに。

(……それでも)

たとえ永遠でも待とうと、スヴィンは思った。

こんな自分が、何かひとつでも、彼女の助けになれるかもしれないなら。

◆ 第二章 ◆



「……さてさて、我が兄はどうなってるだろうね」

頬杖をついて、ライネスはふと呟いた。

現ノ代一魔リ術ッ科ジの街一というにはささやかすぎる通りストリート、スラーを見下ろす執務室である。

品のよい紫し檀たんの机には、大量の書類が積まれていた。

内容は、講師からの新たな触媒の買い入れ要求だったり、ほかの科からの教室割譲の申し入れだったり。まあおおよそはくだらない雑務である。

敵味方いはずに拘わらず、君主ロードがいない間に少しでも有利な陳情を通そうという、ある意味こまめな努力の結晶だったりもする。もっとも、実際のところは義兄を通すより、ライネスひとりの方が処理しやすいので、少女にしてみれば渡りに船なのだが。

「ふん、つまらない偽装工作も紛れ込んでるな。あの兄なら騙されるかもしれないが」

手際よく書類を片づけてサインをいれつつ、ライネスはもう一度兄とその内弟子のことに思いを馳せた。

さすがに、あの村には携帯電話もつながらず、兄とグレイの状況は不明のままだったからだ。弟子のフラットとスヴィンを連れていったとはいえ、状況からすると無事とは限るまい。

かつて、グレイが目をそむけて逃げてきた故郷。

おそらくは、その過去の事件と向かい合うことになろうから。

（……まあ、あのふたりが危地に飛び込むのも、いつものことか）

独り合点して、伸びをした。

手元でうっすら湯気を立てている紅茶を一口。ついで、美しく艶めくマカロンをつまみ、唇に差し入れる。

「ん……む、トリムマウ？」

「何でしょうか、お嬢様」

と、控えていた水銀のメイドがうなずいた。

「これ、いつもの店で間違いないな？　味が落ちてないか」

「申し訳ありません、お嬢様。いつも通り毒味の際に成分を確認しましたが、まったく同様かと存じます」

「む、そうか」

唇をへの字にした主人に、メイドはもう一言、付け加えた。

「食事をご一緒できず、申し訳ありません」

「ふん。そんなことで味が変わるか」

「味は変わらなくとも、人の感じ方は変わると、映画で言っていました」

「フラットに教えられた余計な知識はすぐ忘れろ」

「善処いたします」

いつもの取り澄ました表情で言った水銀メイドに、ライネスが小さく鼻を鳴らす。

窓の外では、朽ち葉が舞っていた。

一月も半ば。

もう、まもなく第五次聖杯戦争は始まる。

密かに、聖堂教会へのパイプを持つ情報屋から話を聞いているが、すでに有力な勢力はサーヴァントの召喚を始めているそうだ。時計塔から任命されたという封印指定執行者も、足取りが揺めなくなっているあたりからすると、はや旅立っていておかしくない。時期が迫れば、聖杯は自らマスターを選ぶというし、遅からず残った

枠も埋まるだろう。

仮に、兄が急遽グレイの故郷から戻ってきても、最早間に合うまい。

「ふん、まずい……いや、美味しい。美味しいに決まってる」

もうひとつマカロンを口にして、唇の端を歪める。

片方の目を、皮肉げにつむって、

「ああ、いくら我が兄が奇妙な縁に恵まれてるといっても、時を巻き戻すわけにはいくまいよ。それこそ魔法じゃあるまいし」

なんとなく呟いた台詞が、遠く離れた義兄の現実と奇妙に符合していることなど、さすがの少女も気づくことはなかったのだった。

淀んだ空気が、凝固したかに思えた。

二周目の夏に来て以来、あらゆる感覚が研ぎ澄まされている。極度のストレス下におかれることによって、半ば強引に肉体の機能が引き出されているのだ。ああ、こんなときでも、自分の身体は浅ましく生き残ろうとしている。そのことが少しだけ悔しかったり、頼もしかったりもした。

目の前で、師匠とベルサックが向かい合っている。

どちらも、そのときの自分を助けてくれた人。

「敵ではないと、確かめたのではなかったのか」

ベルサックの言葉に、搖らぎはなかった。

墓守が搖らいでは、死者が眠っていられない。そんな風に言っていたことを思い出した。たとえ時間が経っても立場が変わっても、この人の言葉は胸の奥に刻まれている。交わした言葉は多くなかつたが、そのひとつひとつが息づいている。

「敵ではない。それはサー・ケイが確かめた通りだ」

かすかに目を細め、師匠が口を開いた。

「しかし、純然たる味方だと言ったわけではない。彼が確かめたのはそういうことだろう。でなければ、聖堂教会の細かい事情まで知っているはずもない」

「はは。人の言葉の余計なところまで覚えてやがる。そういうところは、どこぞの陰気な補佐官に似てやがるな」

「お褒めに与あずかったと思っておこう」

「もちろん褒めてないんだがね。まあ適材適所だろうさ」

ふんと鼻を鳴らして、騎士はベルサックを見やつた。

曖昧にぼやけた人差し指をくいくいと振って、言葉を続ける。

「つまりさ、あんたはあんたで、外部の組織の利害関係に組み込まれてるだろう。さしづめこの国の王——じゃない、確かこの時代だと政府とかいうんだっけか」

場違いすぎる単語に、自分も目を見開いてしまった。

「オレが生前にいた国は、どうもややこしくってな。裏切り者や、裏切り者の裏切り者、はたまた面白半分な宮廷魔術師、浮氣者の騎士に優等生な王様と、あますところなく勢ぞろいだったのさ。これにローマやらなんやら外部勢力もいくつも絡み合ったせいでのひたすらややこしかったんだが、おかげで少しばかり鼻が利くようになつた。……あんたの動きはともかく、情報の視点は個人のものじゃない。他人の評価としてもやや違和感がある。特定の誰かじゃなく、ある程度の範囲で全体を網羅する、まるで報告書みたいな評価だ。ああまあ、そういう連絡を見る機会は、愉快なことに多かつたんだよ」

ペラペラと舌を回し、一息おいて、騎士サー・ケイが言う。

「つまるところ、国の視点というやつだ」

「…………」

沈黙が、地下道に落ちた。

不快な湿った空気に、音なき音が染み入るようだった。

「ベルサック、さん？」

名を呼ばれて、老いた墓守は肩をすくめた。

「あなたみたいな相手が、一緒にいるとは思わなかつた。ロード・エルメロイII世は慧眼だが、必ずしも政治的なやりとりにまで長たけているわけではない。ライネスだとか言った娘がいないなら、それで十分と思っていたのだが」

ため息とともに、ベルサックが言う。

「では、認めるのですか？」

「一族の遠縁が、英國政府とつながっている。この村が、聖堂教会との睨み合いになってることから、時々便宜をはかってくれてな」

静かに、ベルサックは述懐した。

「別に、政府の思惑で動いているわけじゃない。だが、向こうもただ情報てくれるわけではない。互いの利益が一致してるのは確かだろう」

「では、今一度問いたい。あなたの目的は？」

「…………」

しばしの沈黙の後、ベルサックが口を開いた。

「アーサー王の復活を、引き延ばしたい」

「止める、じゃないんだな」

「俺はブラックモアの墓守だ。この地に根付いた魔術師でもある」

と、ベルサックは口にした。

「ゆえに、古くよりの管理者として、この土地が静かであることを優先したい。アーサー王の眠りがいずれ醒まされるとしても、その目覚めは祝福されるべきだろうとも」

厳かな口調に、自分は昔のことを思い出していた。

墓守の訓練をしている際、この男ひ性とが話したことがあったのだ。死は畏れるべきものだ。しかし恐れるべきものではない。陰府の闇はすべてを清算し、無へと帰す。だからこそ、新たに生まれる命は必ず祝福されるべきだ。いかなる罪にまみれた誕生でも、それだけは真実であるべきだと。

真実であると言わず、真実であるべきだと言ったことが、なぜか好もしかった。

ブラックモアの墓守の訓練は厳しく、意識を失うことも一度や二度ではなかったが、嫌にならなかつたのはそのためかもしれない。

「今は時期ではない。少なくとも俺はそう考える。だからグレイ、お前を逃がすことでの俺は目的を達成したいと考えていた」

と、ベルサックは結論づけた。

それから、ほんの少しだけ髪を動かして、

「怒らないんだな？」

と、こちらを見やつたのだ。

「あの……怒るより、いろいろ驚いてしまって……」

しどろもどろに、自分は答えた。

それはそうだろう。

ただでさえ、到底受け止めきれないほどの、村の秘密を明かされたばかりだ。あげくに、実はお前を見守っていた墓守は政府とつながっていたのだと聞かされても、反応しようがない。

ただ、ひとつだけ思った。

「ベルサックさんは……拙が死ぬべきだとは……思わなかつたんですね……」

「当たり前だろう」

墓守は、こちらを見なかつた。

なぜか、それがこの人の誠意なのだろうと思った。だから自分も礼は言わなかつた。

「受け入れましょう」

と、師匠がうなずいた。

「では、側道を使う。村の者も知らないルートだ。脱出するだけならば、さほどの手間はかかるないだろう」

「……いいえ」

今度は、師匠が首を横に振つたのだ。

「あなたの目的は受け入れますが、手段を受け入れるわけにはいかない。かつて、私たちはそれを受け入れたのだから」

「？」

言葉の意味が分かるはずがない。

私たちが未来から来たなどと、そんなことが理解できるはずもない。少しだけ考えてから、師匠は改めて口を開いた。

「ひとまず、私に未来視でもできると思っていただきたい」

「君がかね？ ロード・エルメロイII世の能力については耳にしている。もちろん、魔眼以外にも未来をはかる方法はいくつもあるだろうが……」

「申し訳ないが、私個人の能力はこの際外して考えていただきたい。たまたま、そういう結果を知るに至っただけだ」

穏やかに受けているように見えて、声音にやや険が残ってしまったのは、気にしてるところをつかれたのだろう。政府とつながってるというベルサックの情報網は、師匠の能力についても調査しているらしい。

数秒、師匠とベルサックの間に沈黙が落ちた。

その静寂へ割り込むように、騎士がこちらへ話しかけたのである。

「お前はさ、どうしたいんだ？」

「え……」

と、一瞬口ごもってしまった。

「拙、ですか？」

「ああ、お前だよ」

ぶっきらぼうに、騎士が言った。

さきほどベルサックを問いつめたときも、どこかふざけている様子は変わらなかったのに、今の騎士はひどく真摯に見つめているよ

うな気がした。ろくに表情も分からないほどに曖昧な靈基カタチなのに、そんな気持ちだけが伝わった。

なぜだか、誰かに似ている気がしていた。

いつも匣の中に入っていた一昔はたったひとりだった、自分の友達。

彼が、訊く。

お前はどうしたいのか、と。

「……拙は」

喉が詰まる。

言ってしまえば、もう引き返せないと分かっていた。いつもとは違う。普段なら自分が勝手に師匠の危険につきあうだけだ。そんなことは当然だし、考える余地もない。だけどこれは逆だ。一度口から出してしまえば、自分の危険に師匠をつきあわせてしまう。師匠の考え方ならば、きっと自分を止めたりしないだろう。

それでも、言った。

「……拙は、もうひとりの拙と、精神のアーサー王と会いたい、です」

ずっと。

多分、ずっとそう言いたかった。

少し前、初めて彼女と出会い、別れる前からずっと。

「彼女が実際のところ、何を考えているのか、拙のことをどう思っているのか、それをきちんと知りたいです。精神のアーサー王だとか、昔からの因縁だとか、そんな『事実』じゃなくて、拙と同様に彼女が抱えているはずの『真実』を知りたいです」

うまく言えないけれど、つかえつかえ、自分の内側を打ち明ける。

「彼女こそ、ついに拙が向かい合えなかつた、この村の秘密そのも

のだと、思います。彼女と向き合えなかったからこそ、拙の一周目はしんどかったんだと、思います。会うべき相手と向き合わず、ただ逃げてきて、生き延びてしまったから」

「一周目？」

「こちらのことです」

怪訝そうに眉を寄せたベルサックに、師匠が咳払いした。

そして、騎士サー・ケイがもう一度口を開く。

「ふん。お題目は結構だが、殺されるかもしれないぞ。一応言っておくが、オレをあてにするなよ。戦場をひとりでひっくりかえすような、どこぞの脳味噌まで筋肉でできてる騎士どもとはわけが違う。それこそ、その墓守が言ってたように、とっととこの村から逃げ出すのが一番の安全策だろう」

「……はい。きっとそうだと思います。それでも、拙は会いたいのです」

「向こうは拒絶するかもしれない。そもそもが一度会ったのに、向こうから離れたんだろう。あの骨兵どもにとっつかまって、村人たちとろくでもない儀式に使われるのがお望みってなら、そりゃ止めないが」

「……はい。そうなるかもしれません。それでも、拙が会いたいのです」

「は、強情なこった」

肩をすくめて、騎士がくるりと振り返った。

「だそうだが、あんたはいいのか？ ベルサック・ブラックモア」

「……仕方あるまい」

と、老いた墓守もため息をついた。

皺の浮いた手を持ち上げて、こちらを指したのだ。

「グレイ、アッドを目の前に持て」

「え、でもアッドは眠ったままで……」

「問題ない。必要なのはアッドの人格じゃなくて、礼装としての機能だ。お前に移植された魔術刻印は、それと同期するために調整されている。いつものように、鎌に自分を委ねればいい」

「……は、はい」

昔の訓練みたいに、ベルサックの言うがまま、自分は大鎌を持ち上げた。

身体の中心に鎌の重心を寄り添わせて、意識をそこに持つて行く。自分と鎌との境界を取り外して、可能な限りの「空から」を満たしていく。

「集中しろ。極限まで自らを小さくすることは、極限まで自らを広げることと同一だ。ほんの一点まで自分自身を圧縮しろ。同時に領域を拡張し、すべての世界を意識じぶんで満たせ」

つい、微笑してしまった。

師匠が講義で言っていることとよく似ていたからだ。時計塔の講義について、自分は参加しながらも、ほとんどの内容を取りこぼしている。それは黄金を前にしながら価値が分からず、持つて帰ることすらかなわない愚者のようなものだと思っていたけれど……だけど、こんな風に得られたものもあったのだ。

自分にはもったいなさすぎる、贈り物。

「…………」

意識を、凝らす。

いまだ眠っているアッドの、さらに奥へ。

こつん、と大鎌の柄へ額をあてる。ひんやりとした感覚が額を痺れさせ、その淡い感覚はたちまち体中の皮膚を伝わって、ぼんやりと自分の内側に染み渡っていった。

脳裏に、光が瞬く。

たちまちそれは結びつき、輝きをいくつも連鎖させて、自分の頭

上と足下へ銀河みたいに広がった。

「……道が、見えます」

意識せぬ言葉で、自分は咳いた。

「驚いたな」

と、ベルサックの声が聞こえた。

「できなければ、帰るよう言うつもりだったが……まさか一回で成功するとは。たった半日で何があった？」

ベルサックには半日。自分には半年。その違い。

だけど、きっとそれだけじゃない違い。

「ここから、どうすればいいですか？」

「光の道に、行きたい場所を問え。この地下の全貌は俺も知らん。村人も教会も、おそらく精神のアーサー王ですら知ち悉しつしているわけではあるまい。だが、そいつは別だ。生きてはいない封印礼装だからこそ、この墓地のすべてを知る資格があった」

師匠が言っていた。

墓地とは、極小の死の世界なのだと。

おそらく、この地下も同様なのだろう。ブラックモアの墓地として、ここは生者が踏みいってはならない聖地だ。アッドは—アッドを形成する封印礼装は、その聖地と同調するようにつくられている。

ブラックモアの墓守とは自分やベルサックのことであり、同時にこの礼装自体でもあるのだと意識しつつ、自分の意識は光の群れへと集中する。光の意味をすべて把握するには量が多すぎる。だから、こちらから働きかけて、必要な情報だけを取り出す。

たちまち、多くの光がいくつかの道を指し示した。

「大丈夫か」

「は、はい師匠」

師匠という単語に、ベルサックが一瞬眉をひそめた。いけない。自分たちが未来からやってきたなどと説明しはじめたら、さすがに時間が足りないし、困惑させるだけだろう。

「なんでも、ありません。道が分かりましたから、行きましょう」

もつれる足を騙しつつ、急いで先に行く。

同調したせいか、まだ鋭くなったままの聴覚が、

「……ありがとう。サー・ケイ」

との、師匠の囁きを捉えた。

「は？ なんだそりゃ」

「私の言うべきことを言ってくれたからだ」

「勘違いだね。くだらないやりとりで時間を無駄に消費するぐらいなら、さっさと決めてもらった方がマシだろうと思っただけだ」

師匠と騎士の言葉に、少しだけ切なくなってしまった。

どれだけ自分は助けてもらってるのだろうと、情けなさと心強さが揺よう曳えいする。

そんな感傷をふりはらうように、自分たちは地下の新たな闇へと踏み込んでいった。

シスター・イルミアは、小走りに地下を進んでいた。

かの村の地底に張り巡らされた道は、複雑に絡み合っている。そのすべては彼女たちも把握できていないのだが、グレイの行つただろう道を先回りするべく、知りうるルートを駆使している最中だった。

その途中で、ひいひいと喘ぎながら、ランタンを持つフェルナンド司祭が口を開いた。

「はあ……ぜえ……はあ……じゃあ、やはりグレイはあの魔術師と一緒に、この地下道に入つてると？」

「そうです。司祭様」

おどけた風に、イルミアは片目をつむった。

「どうにも……私には……判断がつかない。彼女は十分村人に協力的だったんじゃないのか？　それはまともに事情を説明されてなかつたろうが、されたところで、自分の命ぐらいは平然と差し出すような娘だったんじゃ？　いや、そう育てられていたんでは？」

「何か、心変わりするきっかけがあったのかも」

と、イルミアはほんの少しだけ歩調をゆるめる。

フェルナンド司祭は、胡散臭そうな顔で、太い首を傾げた。

「たとえば、あの時計塔の君主ロードかね？」

「汚らわしい魔術師！」

唾棄すべきとばかりに、イルミアの表情が歪む。

「でも、あのエルメロイの姫を帰せただけマシです。せっかく長居しないようにすすめたんですもの」

「君の、妙な偏愛フェチズムはどうかと思わなくもないがね」

「どうせ異端者なのですから、せめてこちらの心を潤すだけの見目は重要でしょう？ どの道、主の正しき教えに仕えない方々など、信用できるはずもありません」

汗を拭きつつ、司祭が眉をひそめると、イルミアはつんと澄ました顔でのたまわった。

「……君はそういう人だったな」

「司祭様は、いささか無駄に異端者への情が過ぎるかと。あんなものどもに斟しん酌しゃくの必要などありません」

「どうかね。私のような地元の司祭には、君みたいな中心部の考えは理解しかねる」

「隠し子ですけどね」

にんまりと唇の端を吊り上げた尼僧に、ハンカチで頬を拭きながら、司祭が追従する。

グラマラスな尼僧と、ほとんど球体じみた司祭のミスマッチさもあいまって、地下道を行くふたりの姿は古いホラー映画か何かのようだった。

すぐに、空間が開けた。

屋敷のひとつもまるまる入りそうな暗がりに、新たな人影が映ったのだ。

「追いついたー！」

しかし、人影のカタチに、イルミアは瞬きした。

一瞬、雰囲気だけはあのグレイと酷似しているながら、それはまったく違う相手だった。

ゆっくりとこちらを見返した姿は、奇怪な仮面と鎧に身を包んでいた。その背中には数人の骨兵が佇んでおり、この異形の地底ですからなお瞠目せざるを得ぬ、凄烈な気配を発散していた。

「……これはこれは」

と、シスターは鳶色の瞳に、闘志と緊張を漲らせた。

「長く同じ村にいたのに、お会いするのは初めてね」

「…………」

仮面は喋らなかった。

ただ、正面から尼僧と司祭を見据えた。

「ずっと話には聞いていたのよ。精神のアーサー王。ブラックモアの墓地の、影なる主として。聖堂教会の代行者とは会話もしたくないかしら」

この尼僧も、仮面の少女の正体を知っていたのか。

はたして、仮面はほんの数秒だけ沈思して、片手を挙げた。

【排除せよ】

鋭い思念が、指令を与えた。

同時に、仮面の少女を守護していた骨兵たちがつっかけたのだ。

両者とも槍を腰だめに構えた突撃チャージを、シスター・イルミアの肘まで覆った鎧甲がこれ以上ないタイミングと角度で弾いた。そのまま余剩の勢いで懐へと入り込み、猛烈なフックを浴びせかける。

たちまち片方の胸骨が抉れ、続けざまのストレートが残る骨兵の顎を碎いた。

「話が早いわね！ そういうのって好み！」

尼僧の灰錠が、紫電を走らせる。

神秘の存在にも打撃を与える概念武装が、猛るイルミアの笑顔を

鮮やかに飾った。異端を擊破する刹那こそ、彼女の存在意義が満たされる時間だった。

「ええ、グレイを潰してもよかったですけど、別にあなたでもいい。この村が、本当にアーサー王を呼び戻すなんて馬鹿げた儀式をやらかそうとしても、あなたかグレイのどっちかを潰せばすむでしょうね？」

宣言とともに、残った骨兵たちを平らげんと、朱唇を舐めあげたときだった。

その足が止まった。

急ブレーキとともに半回転しつつ、背後から襲いかかった骨兵の上腕骨を裏拳で打撃しつつ、しかし目を剥いたのはイルミアの方だった。

「……ちょっと、何よソレ」

つぶやきが、地下空洞を這った。

さきほどイルミアの碎いた部位を一瞬で再生させて、立ち上がった骨兵たちが背後から再び切りかかってきたのである。ばかりか、たった今裏拳で破壊した部位さえも、見る間に修復していく。まるでフィルムの逆回しでも鑑賞している気分だった。

もう一度顎蓋をアッパーで打ち砕きながら、追いつめられぬよう、イルミアが間合いを取った。

「なぜだか、やたらと大マ源ナの薄い地下だってのに、雑魚までどういう魔力量してんの?! とどめを刺さなきや駄目ってこと?」

「シスター・イルミア……これは……地上の……」

狼狽うろたえるフェルナンド司祭が、視線を上下に振って、その原因を示唆する。

(……やっぱり、村人どもからの供給?)

彼女も、同じ理由を予想していた。

たった今、地上の黒い聖母の前で、多くの村人が祈りを捧げてい

ることを。

それが、現代の一般人に比べれば、遙かに精才氣ドで勝る村人たちが、自らの魔力を捧げる行為と同一だということを。

だからこそ、この地下に骨兵たちは生まれ続ける。死者は生者の意思と祈りを受けてこそ、この大地に新たなる足跡を刻む。刃を振るう。

すんでのところでそれを避けつつ、シスター・イルミアは初めて舌打ちした。

「きりがないわね！」

【いいや、あるとも】

その思念が、虚ろに響いた。

戦いを観察していた仮面の少女が、動いたのだ。

「…………っ！」

イルミアが、膝を突く。

体中の力が、突然失われたかのようだった。

尼僧の精才氣ドさえも奪い尽くす勢いで、何かが生まれようとしていた。靈体から顕現するそのカタチは、村人たちからの精才氣ドも薄れた大マ源ナもなにもかも貪り、代わりに周囲の空気を押しのけることで、地下にあるまじき暴風をつくりだしていた。

さきほどから妙に大マ源ナの薄い地底だとは思っていたが、ひょっとしてその理由は……。

「そ、れが在るから……？」

憶測の真偽も分からず、体中の魔力を活発化させながら、イルミアが呻く。

なぜならば、仮面の少女の手には—

*

星に、導かれるみたいだった。

一度脳裏に思い浮かべた光は、こちらの足を直接引っ張るようにして、特定のルートへと連れて行ってくれた。分岐路では自然と身体が動き、暗闇でも迷うことはなかった。師匠と騎士と墓守ベルサックを背後に、自分は夢見るみたいに歩いていく。驚くほど長い道のりは、この地下洞の規模を想起させるに足るものだった。

しばらくすると、広い空間に出た。

中には、何らかの建物もつくられていて……師匠が掲げた魔術の光が、その建築物を照らし出す。

古びてこそいたが、荘厳な石造りは確かに宗教的な神殿だった。

「地下に、神殿が……？」

「もしくは、これこそが墓か」

と、師匠が呟いた。

これが、村の秘密なのだろうか。ブラックモアの墓守—少なくとも自分にはまだ伝えられていなかった、知識の一端。

「どうかな、ベルサック・ブラックモア。何かしら知見は？」

「いいや。このような建築物が地下にあるらしいとは聞いていたが、俺も直接目にするのは初めてだ」

ベルサックがかぶりを振った。

師匠もそれ以上は追及せず、そのまま神殿の内側へと踏み込んだ。

入り口を越えてすぐ、新たな人影が目に入った。

「——っ！」

人ではなかった。

それに酷似した、一体の像が置かれていたのである。

地上の村で、何度となく見てきた姿に、自分は小さく息を止めた。

「……ここにも、黒い聖母が」

神殿の一角に、真っ黒に塗られた聖母の像が鎮座されていたのである。

神殿と同じく、あるいはそれ以上に古いものだろうと、直感的に判断できた。ひょっとすると、地上の聖母はこの像を模倣してつくられたものなのだろうか。

「以前村を訪れたときから、この聖母について仮説を持っていた」

と、聖母を見上げて、師匠が口を開いた。

「黒い聖母は欧州のあちこちに見られるものだが、いくつかのパターンがある。その多くは土地の大地母神と習合したものだ」

「大地母神、ですか？」

「多くの守護聖人もそうだがね。かの一大宗教とそれなりの柔軟性を持っている。新たな地域へと伝道する際には、単に教義を押し付けるだけではなく、その土地の神話や伝説を内側に取り込むだけの余裕バッファも保持していたんだ。黒い聖母はそうした現れのひとつだ」

師匠の落ち着いた言葉は、いつもの講義のように、神殿に響いた。

彼女を讃えるように。

あるいは、彼女を値踏みするように。

「そうした大地母神の派生に、ひとりの魔女がいる。複数の、時代も場所も異なる伝承で語り継がれ、おそらくは何人かの人物が習合

された魔女だ。ああ、モルガン・ル・フェは、あなたが登場するアーサー王伝説でも馴染み深い名前でしょう。サー・ケイ」

「……困った先生だな」

と、騎士は肩をすくめた。

もっとも、実際に困ったというよりは、ちょっと皮肉を言ってみたぐらいの感じだった。

モルガン・ル・フェ。

確か、アーサー王伝説では、アーサー王の姉にあたる人物だったろうか。つまり、アーサー王の義兄であるこの騎士サー・ケイとも、因縁浅からざる相手ということになる。

かまわず、師匠が言う。

「アーサー王伝説を少し離れると、ケルト神話のあちこちに出てくる魔女モルガンは、時に夢魔の女王であり、時に戦女神であり、時に運命の三女神でもありました。そして鴉を連れたり、鴉に変身することを好んでいたとも」

鴉。

またとなけめネバーモア。

おびただしい鴉を従えた、ブラックモアの墓守たち。

「はっ。残念だが、モルガンについて、オレもよく知ってるわけじゃない。なんせ複雑な女だったからな。いや女というのはたいがいそうだが」

と、騎士は遠い日の物語みたいに答えた。

実際のところ、今の彼にとってはどのぐらい昔の出来事なのだろう。ほんの数日前か。自分たちと同じように、千数百年前と思えているのか。それとも、もっと別の何かなのか。

「ただ、確かに、この村とモルガンとはつながりがあったんだろう。この黒い聖母には、どことなく面影がある。ふん、だからこの村を選んだんだろうな」

吐息が苦笑を含む。

「何かをしてくれと望んだわけじゃ、多分ない。あれは王を憎んでいたし、ついにはモードレッドをそそのかして何かと悪さもしてたみたいだが、王が死んだ後までひきずる必要はないからな。……もっとも、オレはもっと先に死んでいたから、確実なことは何も言えないが」

神話の終わり。

アーサー王伝説の最後は、自分も知っている。

いわく、カムランの丘の戦い。叛逆の騎士モードレッドを打ち倒したアーサー王は、しかしそこで致命傷を負ってしまい、信頼のおける騎士ベディヴィエールに聖剣を託したという。英国でも最も有名な伝承だけにさまざまな話が存在するが、中には、その際に現れた三人の妖精のひとりにモルガンがいたとか、そんなパターンもあったはずだ。

師匠が、小さくかぶりを振った。

「当時のモルガンが何を望んだかは分かりません。あなたに分からないなら、私に分かるはずもない。ですが、当時の彼女が望む望まさるにかかわらず、火種は残ってしまった。それは代々受け継がれていき、千年以上も経ってから、とある結果を生むこととなった」

そこで、師匠は一息おいた。

「つまり、グレイではないですか」

「……………つ」

当たり前に、話は自分へと帰結した。

だけど、今度は驚かずに受け止められた。

師匠の視線が、ゆるりと老いた墓守へと移る。

「ベルサック・ブラックモア。あなたはどう思ってますか」

「俺が先代から聞いているのは、あくまでルールについてだけだ。黒い聖母にも関係するルールについては、ブラックモアの墓守に伝

えられてきた」

「四つのルールでしたね」

村で定められた、四つのルール。

- ・ひとつ、最初に聖母像に礼拝すること。
- ・ひとつ、深夜には外に出ないこと。
- ・ひとつ、墓地にひとりでは近づかないこと。
- ・ひとつ、たとえ複数だろうが、沼にはけして近づかないこと。

当たり前だが、自分も課せられていたルールだけに覚えている。

念のため師匠が確認すると、ベルサックは厳めしい顔を上下させた。

「そうだ。いくつのルールが破られたかだけは、墓守に伝わる魔術刻印で分かるようになっていた。グレイにはまだ移植していない部分だが」

「……あ」

自分も、右手を押さえる。

同じく魔術刻印と呼ばれ、同系統の技術が使われているとは聞いているが、ブラックモアの墓守のそれは、魔術師のそれとはかなり異なる。代々新たな魔術を書き加えることもなく、代わりに血のつながらない自分でも拒絶反応はほとんどない。機能としては、さきほどのように、アッドの制御に用いるぐらいだ。

その一部に村のルールの監視機能もあったのだと知らされても、そうだったのか、程度にしか思わなかった。

しかし、

「……師匠？」

「ルールが……四つ……」

そう呟いて、師匠が眉間のあたりを押さえたのだ。

「必ず、最初に黒い聖母に祈らせること。だったら……」

今度は、その指が円を描いた。

なんなくだけど、村のカタチのように思えた。わずかな凹みが地図上の村と一致していて、そんなことを覚えている自分にも、少しだけ驚いた。

「墓地にひとりで行かないことは、つまるところ墓守と一緒にに行けと言ってると変わりないですな？」

「……ああ、そうだろうな」

ベルサックも認める。

「……それは、いつからの……いや、この場合は誰にとっての……」

師匠が沈黙して、うつむいた。

こんな風に考え込んだとき、師匠はほとんど外界の物事に反応しない。いわば精神の宮殿にでも引きこもって、複雑に絡み合った謎を解明せんと、あらゆる叡智を傾けている。魔術の能力で他人に劣ろうと、その知識と思考量ではけしてひけをとらぬ一人によっては虚しい足掻きとせせら笑うだろう、師匠の本領。

だから、自分は何も話しかけず、ベルサックと騎士も黙っていた。

しばらくして、

「……グレイ」

と、師匠から呼びかけられたのだ。

「は、はい」

「君が、精神のアーサー王と会うつもりならば……ひとつ、頼みたいことがある」

続けて話された内容に、自分は何度か瞬きしてしまった。

「それは、できますけど。拙でいいんですか？」

「是非お願ひしたい。私が言うより君が言う方が、効果があるはずだ。おそらく、相当危険な賭けになるが、現状を突破するためには避けて通れない」

危険、と師匠が言い添えたことに、唾を飲み込む。

いつも様々な危地に踏み込んでいる師匠だが、だからこそ、その度合いを感じ取る能力は発達している。その師匠がわざわざ断るのならば、それはいかほどの恐るべき可能性を孕んでいるだろうか。

それでも、

「……分かりました」

と、うなずいた。

いずれにせよ、師匠の願いを拒絶する道理など自分にあるはずがない。意図や危険度が分からなくても、構うところではない。自分にとって許せないのは、この身が師匠の役に立てないことぐらいだ。そう言うと、師匠は困った顔をするかもしれないけど。

密やかに、思い定めたときだった。

刹那、神殿の外で、閃光が走ったのだ。

いや、本当にそれは光だったろうか。目をくらませる輝きは間違いないのに、それは人の概念にはない、黒い光だった。

なのに、自分たちは知っている光であった。

「一あれ、は！」

衝撃に吸い込まれるようにして、あわてて神殿を出る。

駆けつけた自分たちは、信じられないものを見た。

神殿からは、すぐ近くだった。

そこでは、ふたつの勢力が対峙していたのだ。

片方は、もはや言うまでもあるまい。

数十体という骨兵と、仮面をつけた少女。

堅固な鎧を纏う少女は、古代の戦場を支配する将軍さながらだった。おどろおどろしい金属の仮面もありまつて、世界を睥へい睨げいする魔女のごとくにも見えた。

しかし。

問題は、仮面の少女が持つ『槍』であった。

漆黒の壮絶な魔力に纏われ、外装からは牙状の棘を何本も生やしていて、まるで違う見かけになつてはいたが、それが自分の持つ『槍』と酷似する存在だと、否が応でも確信させられたのだ。

つまり、それは……

「……黒い、ロンゴミニアド」

声が、震えた。

まさか、そんなものが目の前に現れるだなんて。

いや、ある意味それは当然の流れではなかつたか。自分が肉体のアーサー王であり、彼女が精神のアーサー王であるというならば、双方に『槍』が委ねられる方が、むしろ自然の理ことわりだ。

師匠が、唾を飲み込むのが分かった。

「……どういうことだ」

「もともと、拙の持っている『槍』は本体の影だと言われています」

大鎌を抱くようにして、口にする。

ほとんど説明になっていない言葉だったが、師匠には伝わったようだった。

「なるほど。影ならば、複数あっても問題ないというわけか。厄介な」

言って、師匠は視線を巡らせる。

構えられた『槍』は、もちろん敵に対してのものだからだ。

仮面の少女と対峙していたのは、そちらもやはり自分の知る相手だった。

聖堂教会である。

数年前にやってきた修道女。枢機卿の隠し子だとか、突然突拍子もない事実を教えられた相手。

「……シスター・イルミア」

「なんだ。逃げられたと思ったら、今度はそっちからやってきてくれるなんて」

艶っぽい唇を歪めて、尼僧が笑った。

その両手と両足に、奇妙な鎧甲が装わっていた。ぐんとその手が打ち振られると、裏拳で骨兵の頭蓋が見事に破壊されたのである。

しかし、それもつかのま。

尼僧がなぎたおす端から、次々と骨兵たちは現れてくる。

むしろ、倒されるほどにその数が増えるようだった。戦いが始まってからずっとその調子なのか、いい加減イルミアの方も嫌気がさしているようで、手のひらで首筋の汗を拭いつつ、わざとらしくため息をついた。

「……ふ、ん。やっぱり魔力の源は地上の村人よね？」

「村人が？」

「たとえ、ここの大マ源ナが薄くても、経パ路スを結んだ地上の村人が次から次へと自分の精オ氣ドを送り込んでくるわけ。ああ、これだから異端というのは罪深い。主のカタチを模して、まるで違う行いを平気でするんだから」

唇を歪めて、イルミアが両手を振るう。

ボクシングの教科書に載せたくなるような、鮮やかなワンツー。

そのたび骨兵の腕が砕け、足が飛び散るが、けして彼らは怯まない。ばかりか、ほぼ数秒ほどですべての部位を修復させつつ、群がってイルミアへと押し寄せてくる。

「ああ、この繰り返しも飽きた！」

疾風のごときステップイン、ダッキングからの左右のフックと、切れのいいステップアウトで骨兵たちをあしらいつつ、イルミアが振り返った。

「司祭様！」

「あ、あい分かった！」

背後に隠れていた、ほとんど球体の司祭が、すうと息を吸った。

胸元の十字架を握りしめ、大声で呼ばわったのである。

「もろもろの民よ、これを聞け。

すべて世に住む者よ、耳を傾けよ。

低きも高きも、富めるも貧しきも、共に耳を傾けよ」

それは、何度も説教で聞いた一節。

まさしくこの司祭の口から聞かされた言葉に、今はただならぬ『力』がこもっていた。

「まことにはだれも自分をあがなうことはできない。

そのいのちの価あたいを支払うことなどできはしない」

滔とう々とうと流れる声は、やがてひとつの式を起動する。

神秘を形成するのは、この土地さえも無縁ではない、力強い流れ。

人類最大の魔術基盤、と時計塔ではいう。

「たとえ彼らがその地を自分の名をもって呼ぼうとも、

墓こそ彼らのとこしえのすまい、世々彼らのすみかである。

人は栄華のうちに永くすまうことはかなわぬ」

その聖句とともに、異変は生じた。

襲いかからんとした骨兵たちが、司祭を中心に動きを止めたのだ。ばかりか、一部は地に伏し、たちまち砂と化して崩れ去っていったのである。

「一滅びさる獸に等しく」

十字を切って、司祭が締めくくると同時に、近距離の骨兵のすべてが崩れ去った。

あたかも、神の威光に膝をつくようでもあった。

「洗礼詠唱か……！」

と、師匠が呻く。

聖堂教会で公的に習得を許された、唯一の魔術。ただひとつでありながら、あるいはそれゆえに万能だとも、以前の講義で師匠が評していた。

「聖堂教会の信仰に基づく人類最大の魔術基盤を利用して、ただ力強く周囲を浄化するんだ。物理的な効果こそ低いが、こと靈魂や呪いに関しては絶大。信仰というルールを押し付ける摂理の鍵そのものだ」

「そんな……！」

なるほど、それは唯一にして万能と呼んでもいいだろう。

たとえパターンは数少なくとも、そのひとつですべてを制せるならば問題ない。実際のところ、聖堂教会では秘蹟という力タチでもっと別の魔術も行使するという話も当時の師匠はしていたし、イルミアの異様な身体能力もそういうことかもしれないが、今はただその魔術基盤の強大さに釘付けとなっていた。

「あの仮面や、騎士サー・ケイの靈基にまでは及ばないらしいが、骸骨兵あたりでは近づけまい。同じく魔術基盤を利用するこちらも減衰せざるを得まいが……」

シスター・イルミアが端たん倪げいすべからざる相手だと聞いていた。異端の王復活を危険視して、聖堂教会が送り込んできた代行者だと。

しかし、それ以前からずっと教会を守ってきたあの司祭も、同じような魔術師だとは。

「……はは、それだけでどうにかなるなんて、思ってない」

洞窟の向こうから、新たな骨兵が現れるのを見ながら、イルミアが小さくうなずいた。

こちらを向いたのである。

「でも、別に精神のアーサー王じゃなくて、あんた肉体を潰しても同じだものね？」

「——っ！」

拳甲を打ち合わせ、獰猛にイルミアが笑う。

白い歯が覗いたと思われた瞬間、その身体がジグザグに跳んだ。洞窟の壁を蹴り、また壁へと飛び移るその機動は、人間どころか獸にすらありえぬ超越速度。

「なんだ、あれは！」

師匠が唸る。

ああ、魔眼蒐集列車レール・ツエッペリンでも見た。

代行者と呼ばれる、聖堂教会の誇る闇の戦力。聖なる刃として研ぎ澄まされたその能力は、けして時計塔の魔術師にも劣るものではない——！

アッドが眠り、今の自分にはまともな『強化』さえ追いつかない。彼女の機動を目で追い続けることさえかなわない。複雑な軌跡を闇に刻み、イルミアは自らを鋭い矢と化して、こちらへと突撃する。

身体が、自然と動いた。

せめて師匠を守らなければ、と。

ああ、幸いにも師匠は反応できるほど反射神経がよくなかったし、今回の相手の狙いは師匠じゃなくて自分の方だった。

「こんな村に生まれなければよかったのにね」

囁きとともに、最後に目に映ったのは、その手甲が迸らせる紫電。

硬い音が鳴った。

その結果に、耳を疑う。

イルミアの手甲が、ベルサックの斧によって阻まれた音だったからだ。

「ん？ てっきりあなたは傍観すると思ってたんだけど」

「俺も、ブラックモアの墓守でな」

手甲と斧を噛み合わせたまま、ベルサックが低い声で囁く。

「後継者と見込んだ娘が、何事かをしようと言う。ならば見届けるのが役目だろう」

「ずいぶん人間らしいことを言うのね」

イルミアが笑った。

笑ったまま、その足が震んだ。

猛烈な速度の踵落としがベルサックの頭上から襲いかかり、すんでのところで頬をかすめて、地面を抉ったのだ。その速度と威力たるや、まるで刃物に触れたごとく、老人の頬が断ち切れたことでも理解できた。

それでも、ベルサックは揺るがなかった。

「行け！」

その声に押されるようにして、自分は駆けた。

薄れた魔力の中、かろうじて可能な最低限の『強化』で大鎌を振るい、骨兵たちを切り払う。まるで、水の中を走っているみたいにもどかしい。それでもただ必死に足を動かし、大鎌を握りしめ、障害を薙ぎ払う。

仮面の少女へと、突き進む。

【なぜ、来た】

思念が、響いた。

ついさきほどと同じ思念は、しかし自分にとって意外なほど違う響きを帶びていた。

あのときは、驚愕と恐怖ばかりだった。自分の故郷にこんな地下

があるとも知らず、ましてや自分と同じように、アーサー王と縁深い相手がいるだなんて知らなかった。

「あなたに、会いに来ました」

と、絞り出すように言った。

【何のために？】

「尋ねる、ためです」

切れ切れに、告げる。

その間も、骨兵たちが止まらない。十全な力が入らず、本来の姿勢で大鎌が振り切れない。骨兵たちを断ち切ることはできず、近寄られない程度に吹き飛ばし、牽制するのがやっと。なんて無様だろうと思う。

それでも、問う。

「あなたは、本当にアーサー王の精神なんですか」

【そうだ。私はかつて存在した王の指向性だ。残骸であり、残像であり、未来に向けて保存された数列だ】

思念が、情報をぶつけてくる。

それだけで怖くなった。まさしく言葉通り、今の思念には彼女の指向性そのものがこもっていたが……それは、あまりにも整然としすぎていたからだ。

理に過ぎる。

それこそ数式の羅列でも見せられたかのようだった。

彼女がアーサー王の精神だというのなら、一体生前のアーサー王はどんな人格だったのだろう。荒れ果てたブリテンをつかのまといえども救い、多くの騎士たちと無数の凱旋をなした傑人。民に慕われ、詩人に謳われ、千数百年を超えた今でもこの島国に冠たる英雄。

だけど。

その精神が彼女だというなら、それは本当に、人の心の在り方だったんだろうか。まるでそれは、人というよりももっと別の、ある種の神靈のような……

(.....違う)

そんなことを考え込むために、ここに来たのではない。

だから、視線をあげた。

訊くべきを、訊く。

「あなたは、ずっとここにいたんですか」

【.....】

響いた思念は、空白だった。

驚愕に似た感情。

よりによって、それを訊くのか、と言われた気分だった。

「.....お前だ」

洞窟が、軋んだように思えた。

いままでずっと強大な思念をぶつけていた仮面が、今度は肉声で喋ったのだ。

「十年前、お前とともに、私はここに目覚めた」

「……拙、と」

一瞬、言葉が出なくなった。

もちろん、十年前のことは覚えている。突然自分の身体が変わり始め、他人と同じそれになりはてたとき。当時の自分は、己の変化を受け入れることもできずにただうずくまっていたが、同じように、この場では彼女が目覚めていたとは。

ならば、十年の間、彼女はずっと地底で過ごしていたのか。

「それ……は、村のみんなは？」

「村では、長の老婆だけが知っていた。お前たちはおばば様とか呼んでいたか。とはいえ、薄々は教会とやらも気づいていたようだが」

「…………」

密やかに、あの村で起きていた戦争。

十年もの間、自分には知らされなかつた真実が、もうひとりの自分とも言うべき相手から暴露される。

「お前が、逃げればいいと思っていたぞ。地の果てまで逃げればいいと」

咳きは重く、足下へわだかまるようだった。

彼女がいかなる心境だとしても、その言葉はきっと真実なのだろうと思われた。そういう重みであった。

「だが、戻ってきた。戻ってきてしまった。そうとなれば、私がやることはひとつしかない。……この場で、拘束させてもらおう」

ゆっくりと、少女の手が振り上げられた。

ぞくり、と悪寒が背中を走る。

黒いロンゴミニアドの一閃を前に、咄とつ嗟さに大鎌を構えた。

凄まじい衝撃が大鎌を捉え、自分の身体ごと吹き飛ばす。受け身など取れるはずもなく、信じられないほど吹き飛ばされたあげく、

背中から地面に激突。強大な魔力が身体中をかき回し、ありとあらゆる神経が引き裂かれるかと思われた。痛みというよりも、ただ灼熱が肉の狭間に燃え上がった。

歯を、食いしばる。

大鎌を支えにして立ち上がったが、膝がガクガク震えるのが分かった。

ばかりか、受け止めた大鎌からして、今にも分解しそうにがたついている。

(耐えられ、ないー！)

おそらくは自分を殺さないように、十分手加減した攻撃だったのに、大鎌のアッドではもう限界だ。

しかし、アッドが眠っている以上、内側のロンゴミニアドを起動するどころか、基礎的な形態変化すら不可能だ。かろうじて、漆黒の槍が垂れ流す魔力を食らうことで、最低限の『強化』だけは維持しているが、それとて一般人よりはマシという程度に過ぎぬ。

唾と、恐れを呑み込む。

顔をあげて、それでも仮面に相対せんとする。

しかし、すぐに新たな攻撃が襲うことではなく、仮面の少女は停止していたのである。

「だからさ、やめとけって」

「……お前は？」

自分と仮面の間で、立ちはだかった騎士が、奇妙な顔になった。

いや、顔は相変わらず曖昧模糊として見えない。だから、そんな風に思えただけだ。

「はは、案の定記憶にないのな。まあそれもそうか。精神だけじゃあ、きちんとした記憶の保持はかなわない。かなったところで読み取りは厳しい。なぜならそいつは肉体うつわの領分だからだ。まあ、でなきや脳みそは何をしてるんだ、見掛け倒しの木偶の坊かっ

て話だよ。同じく精神をモデルにしたオレだって、記憶の保持はあるちっぽけな匣にかかっているからな」

剣を持った手の人差し指だけを立てて、くるくると騎士が回す。

騎士というよりは道化クラウン。だけど、道化じゃなくてやはり騎士。ふざけた仕草のひとつずつに、なぜだか見たこともない宮廷を思った。騒々しくて、ぎこちなくて、どこか儂くて……だけど、それは美しかったんじゃないだろうか。

アーサー王と円卓の騎士たちが統べていたという宮廷。

ゆっくりと、ケイは口を開く。

「だが、お前のそれは見れたものじゃない。オレは薄情だが、そのオレにしても居心地が悪すぎる」

「……黙れ」

低い声音とともに、三み度たび、虚空を断ち切るロンゴミニアド。

騎士サー・ケイは、真っ向から受けようとはしなかった。

紙一重ではなく、漆黒のロンゴミニアドが纏う魔力まで含めて、余裕をもって回避する。一撃のみならず、二撃、三撃とそれは続いた。大きく避けてる分反撃するには至らないのだが、騎士の側はまともにやり返すつもりはなく、時々牽制に剣を振るう程度で、のらりくらりとやりすごしている。

一見は圧倒的に仮面が有利なのに、ケイを追い込むことがかなわない。

骨兵たちを相手取ったときも見た、卓越した技量。けして超人的な早業ではない。天与の才能による見切りでもない。しかし、多くの戦場を経た達人というべき手腕を、この騎士は確かに備えていた。

三歩、下がって、騎士が軽く剣の横腹を叩く。

「ああ、剣筋だろうが槍捌きだろうが、綺麗すぎるのは気持ち悪い。吐きたくなる。それでも泥仕合は苦手でもない。もう少しばか

り、嫌がらせしてやろうか」

「余計なことを」

仮面の声に乱れや焦りはない。

ただ、それでも騎士から目をはなせないことは確かだった。ふたりの間に、不可視の引力でも働いているかのようだった。続く連撃をさらに騎士は凌ぎ、仮面の少女の黒い『槍』を、綱渡りみたいに回避し続けている。剣技というよりは軽業に近い所業。

自分も、進もうとする。

一步でも、足を踏み出そうとする。

「グレイ」

と、呼びかけられた。

その細い手が、自分を支えてくれたのだった。

「……師匠」

三つ巴の闘争の中にあって、やはり師匠は一番の弱者だ。骸骨兵たちへの対処能力を持つフェルナンド司祭と比べても、それは明らかだろう。いつもそうであるように、師匠は戦いを決定づける力なんて持っていない。

だけど、けして無力じゃない。

「彼女に会いに来たんだろう」

「……はい」

その言葉は、なんて自分を力づけてくれるのだろう。

詰まっていた喉に、空気が流れ込んだ。こんな地底の淀んだ空気であっても、それだけで戦えると思った。

「拙は、グレイです！」

と、叫んでいた。

「あなたの、名は？」

「名などない。私は王の精神。お前が王の肉体であるのと変わらない」

息ひとつ切らせず、仮面の少女は『槍』を振るう。

戦いなど、彼女にとては日常そのものだというように。かつての王は数々の戦役をかほどにたやすくこなしたのだと主張するようだ。

実際、その戦に巻を並べていたはずの騎士サー・ケイですら、彼女にまともに汗を浮かばせることすらかなわない。ほとんどイカサマめいた技術で仮面の『槍』を凌いでいるが、彼女が冷静さを取り戻していくとともに、その戦況が悪化していくのも見てとれた。

「お前の固有名にも意味などない。私もお前も、結局はひとつになるためのものだ」

やはり、と思った。

きっと、そう言われると、自分も考えていた。

「ああ。それだと不便だと言うのならば、骸がい王おうとでも呼べばいい。三分の一に過ぎぬ私は、かつての王と比べるべくもないが、少なくとも彼らの王であることは違いない」

周囲の骨兵を見やり、仮面の少女が言う。

いいや、死者の王—骸王が。

「では、骸王」

と、改めて、自分は呼んだ。

「拙は、あなたに訊きに来たんです。拙があの村にいて、あなたがここにいたというのなら、訊かなければいけないと思ったんです」

ひとつ、息を吸う。

力を込めて、尋ねる。

「あなたは—あなた自身は、本当にアーサー王を復活させたいんで

すか」

*

——一方。

ベルサックとイルミアの間では、幾度となく火花が散っていた。

墓守と尼僧。

地上の村においては、助け合ってきたふたりでもあった。

単に、死人が出たり、追悼を行うときだけではない。小さな村だけに関わり合う範囲は広く、ちょっとした力仕事が、墓守のベルサックに依頼されることは多かった。そのお礼でベルサックがイルミアの焼いた菓子を食べることもあり、イルミアがベルサックの持ってきた薪で暖をとることもあった。

ふたりとも、いずれはこうなると思っていたのだろうか。

いつか殺し合うと予期しながら、穏やかな村の生活を送っていたのか。

間合いを取り、ステップを踏みながら、イルミアが口を開く。

「意外だったわ。あなた、あグのレ娘イのことは単に資質で選んだだけだと思ってた。こんなタイミングで助けにはいるような情があるなんて」

「……墓守には墓守の流儀があつてな」

短く、ベルサックが答えた。

何度も激突した結果として、その上着の一部が黒ずんでいた。彼女の灰錠が紫電を散らし、この墓守を打撃したのだった。

「ふうん。それって、あなたがこの国とつながってること？ あ

あ、この場合ウェールズじゃなくて英国の方ね」

「……知ってたのか」

「当たり前でしょ。聖堂教会をなんだと思ってるの？」

軽口めいた会話を交わしながら、イルミアの身体は一瞬も止まらない。

再び、稻妻のごときステップイン。ワンツーから肝臓を狙うフックをまじえ、ぐるりと回した身体から側頭部へのハイキック。すべてに概念武装たる灰錠の紫電が乗り、周囲から迫り来る骨兵たちさえも、もののついでとばかりに粉碎する。

ならば、それを受け流すベルサックも尋常ではない。

巨大な斧の柄の半ばを持ち、尼僧の攻撃でも急所を抉るものは的確に防御。わずかな間合いの変化に気を配り、イルミアが有利な位置にはけして持ち込ませない。動きの量で言えば尼僧の半分にも満たないが、効率化された立ち回りはその差を埋めてあまりある。

よって、ふたりの闘いは膠着する—

—いや、違う。

必然として、次の段階へと進む。

「こういう手もある」

と、ベルサックが斧を持った手を、横に掲げた。

斧がぐるんと回転する。

「Quoth the raven大鴉は囁く」

何らかの『力』がこもった呪句とともに、斧の上空に何かが生じたのだ。

鴉であった。

実体ではない、とイルミアは見抜いた。

おそらくは、時計塔の召喚術にも似た、低級靈の喚起。しかし、

この場でブラックモアの墓守が行う召喚術ならば、どのような意味を持ちうるか。

「■■■■■■■■■□□！」

鴉が、鳴いたのだ。

人の耳にはその響きを聞き取りきれず、しかし炸裂した魔力の波は、横合いから殺到しようとした骨兵を打ちのめした。

たちまち、脆くも崩れ去る骨兵を見ながら、

「一ちいっ！」

イルミアは、すでに大きく飛び退いている。

灰錠から迸った紫電が、つかのま地下洞の闇を引き裂いた。そちらが彼女の奥の手だったろうか。鴉が放った衝撃波が、紫電の盾の前に相殺されたのである。

それでも、尼僧の片手の灰錠は、大きく引き裂けていた。

ベルサックの呼んだ鴉の鳴き声が、それだけの威力を誇っていたのである。

「口伝の魔術、ってわけ」

「君たちの理解なら、そういうことになるか」

表情ひとつ動かさず、ベルサックが答えた。

靈体の鴉が彼の肩につかり、次なる展開に備えている。

一瞬たりとも、墓守は、後継者たる少女を見やることはなかつた。

*

「ひいっ！」

当然だが、一度の洗礼詠唱で無力化できる骨兵はごく一部である。魔術基盤もあいまって、司祭の洗礼詠唱はかなりの強度を誇っているが、それでもなお一小節ワンカウントで効果を発する域には達していない。いやこんな数え方自体、唾棄すべき魔術協会のものなのだが、とにかくそれゆえに司祭は逃げ回っているのだ。

何度も蹴躡き、時には振りかざされる刃をすんで躱して、まるまっちい足と魔力だけをひたすら回転させる。シスター・イルミアも墓守の相手に集中してしまったため、命が助かったのは僥ぎょう倖こうとしか思われない。

何度もかの洗礼詠唱を終えたところで、初めて、その足が止まったのだ。

逃げ続けた司祭は、いつのまにか地下空洞の壁面付近まで追い詰められていた。

幸い、追っていた骨兵はほとんど退散ターンせしめたのだが、それとは別の現象に、太ましい司祭の首が傾げられたのである。

「……あれは？」

壁から、妙な音がしていることに、フェルナンド司祭は気づいたのだった。

「あなたは—あなた自身は、本当にアーサー王を復活させたいんですか」

ひどく、重いものを吐き出した気分だった。

その問いに、躊躇はなかった。

「決まっている」

と、仮面の少女—骸王は囁いたのだ。

「私は、そのために再現され、保存された。かつての王の精神を正しく数値化し、正しくカタチを与えられたものだ」

サー・ケイと同じ、精神モデル。

骸王もまた、そのようにしてつくられた存在なのか。

ひどく冷たいものが、胸に差し込むのを感じた。自分と同じようにつくられて、自分が変わり始めるのと同時に、目覚めた彼女。それだけに、彼女の言葉はかつての自分から発せられるように思われたのだ。

「お前は己の意思に価値があると考えたらしい。だが、その価値觀を私にあてはめるな」

とりつくしまもなく、骸王は言い切った。

言い切りながら、斜め横から突き出された剣を、軽く払う。

「一ちえ、隙のないこった」

舌打ちした騎士が、肩をそびやかす。

「同胞の意見ぐらい、もう少し聞いてやれよ。王様の精神だってなら民の言葉に耳を傾けるのも器の内だろ？」

「それは情報収集と民の慰撫が、時間消費より意味があると判断すればの話だ」

「やっぱり似てないな、骸王」

曖昧な騎士の顔が、歪んだように思えた。

それが怒りか悲しみか、もっと別の感情かは分からなかったけど。

「だったらまだマシだった。心底よほど良かった。金とか力とか影響とかを天秤にかけて、利害と打算でやりあった方が人間らしい。どこぞの補佐官はそんな数字ばかり喚いてたし、なんだかんだでいいつの案の採択率が一番高かった。ああ、それだけで良かったさ。理想の王なんぞ薄ら寒すぎて、笑い話にもなりやしない」

「戯言を！」

骸王の『槍』が、ひときわ鋭く虚空を穿った。

今度こそ、騎士の腕を掠めたのだ。

血は出なかった。確固とした血肉をつくるほど、騎士サー・ケイの靈基が安定していないからだ。しかし、人間であれば重傷といえるだけのダメージであることは感じられた。

「サー・ケイ！」

「……駄目だ、グレイ」

飛び出しかけた自分を、師匠の言葉が止めた。

その間も、骨兵たちは群がろうとしている。多くはさっきのフェルナンド司祭が囮おとりになってくれたようだが、残った数でも自分たちを圧倒するには十分足りる。師匠も弱々しい魔弾を放ったり対抗はしているが、その程度では前進を阻むこともかなわなかつた。

それで、意を決した。

先立って、師匠は自分にひとつ依頼していた。危険かもしれないが、師匠からの言葉を無視するようであれば、こちらから話してほ

しいと。

だから、ここから先は、師匠に言わされたこと。

危険かもしれない、と告げられていたこと。

「聞いて、ください！」

と、前置きする。

「あなたに言っても理解できないかもしれないですが……拙は、外の世界を見てきました。何ヶ月もこの身体で経験してきました」

胸を、押さえる。

この数ヶ月、自分の中に入りきらないほど、恵まれた物事をぶつけるように。

「ずっと……そんなものには適応できないと思ってました。物語では楽しめても、きっと拙はそんなものと折り合えないって。拙に近づいた相手もみんな気味悪がるだけだろうって。でも……楽しかったんです」

「何のことだ？」

当然に、骸王の声音には困惑の様子があった。こちらが何を言っているか分からぬのだろう。自分だって、突然戦いの最中そんなことを言われば、戸惑うと思う。それでも、今は続ける必要があった。

唾を飲み込む。

師匠から刻まれていた言葉を、あえてゆっくりと紡ぐ。

「次の朝、拙と同じ顔をした相手が、死体で発見されます」

「一、死体っ？」

「本當です。今回そななるかは分からぬですが、そなったんです」

その言葉は、意外な反応をもたらした。

「何、を？　いや、お前は……すでに数ヶ月外を経験したなら……」

いままでよどみなく戦闘を行っていた仮面が、一瞬硬直したのだ。

初めて、彼女の振るっていた『槍』の軌跡が揺らぎ、あわや追いつめられていた騎士サー・ケイも飛びすさったのである。

これが師匠の狙った効果だったのだろうか。

自らの仮面を片手で押さえ、『槍』を握った骸王はしばらく唸っていた。仮面もあいまって、獣のごとく思えたその直後、

「……ズエピアか……！」

と、呻いたのだ。

あのアトラスの鍊金術師とも、彼女は関係していたのか。

主人が思考に没頭しているためか、周囲の骨兵たちもしばし動きを止めていた。洞窟の闇を拉ひしぐように、呻きは連続した。

「ならば、これは……いや……今は……」

絶望と憎悪とを混じらせて、響きわたる。

「今のこれは……再演か……！」

「——っ！」

師匠が、息を呑むのが分かった。

それはたちまち、周囲へと伝播した。仮面が発した言葉の意味を察したのではない。その全身から噴き上がった激怒のゆえだった。熾烈な戦闘を繰り広げていたベルサックとイルミアでさえ振り向かざるを得ない、あまりに凄絶な感情の発露だった。

「ああ……そうか。そういうことか。あまりに滑稽だ。あまりにも無様だ。私もお前もこれでは道化ですらない。ただただ哀れな写し絵じゃないか。幾度劇が同じ筋をなぞろうが、こんな現実に何の意味がある」

最初は思念のみで喋ることさえしなかった骸王が、そんなことは忘れたかのように、饒舌に語り続ける。

「あなたは……」

「ならば……こんな茶番は意味がない」

断言すると同時に、骸王が手をあげた。

『槍』が、掲げられたのだ。

その切っ先を中心として、凄絶な魔力が渦巻き始めた。

さきほど、おそらくは漆黒の『槍』が顕現したときに数倍する、漆黒の奔流。

「……聖槍、抜錨」

たったふたつの単語が、どれだけ恐ろしく思えたか。

(一駄目だー！)

途轍もない魔力に、心と身体が凍りつく。

あれは耐えられない。

自分だけのことではない。この場の誰ひとり、あれに対抗しうるものはいない。ベルサックもイルミアも特筆すべき戦闘能力の持ち主であったし、フェルナンド司祭やサー・ケイだって自分には想像しがたい奥の手を持っているかもしれない。しかし、そんな小細工の遙か外に、かの『槍』は位置している。

だって、それは宝具だ。

英靈が英靈たる所以。人類史に刻まれたる超越幻想。その中でさえ、なお特筆すべき位置に輝く、最果ての一

ああ、そのことを自分は知っている。

誰より知っているのに、自分がその最果てへ対抗できたはずなのに。

(一アッドー)

大鎌を握りしめた。

内側で眠っている匣は、やはり反応しない。かすかな魔力が伝わるばかりだ。

「裏目に出たか……！」

と、師匠の呻きも聞こえた。

危険な賭けと言っていた。その結果。

ルーレットを回る玉が、狙いの外に落ちるところを幻視する。自分たちが賭けたコインは文字通り命そのもの。ごっそりとコインを持っていくとともに、髑どく髑ろ顔がおのディーラーが高笑いする。その正体は死神か悪魔か。

「喰らえ、十三の牙！」

黒い魔力の渦が、もはや地底の嵐と化した。

規模こそ極小でありながら、その内奥に藏された威力は本物の暴風となんら変わりない。地底の天井を削りながら、今度はゆっくりとその魔力を反転させ、『槍』の内側へ収しゅう斂れんさせていく。

もはや、何の手段も間に合わない。

仮面の内側から、真名解放の靈句が囁かれてしまう。

「最果てにて輝ロンゴー」

宝具の持つ、本来の魔力が解き放たれようとした、その瞬間だった。

びきっ、と小さな音が聞こえたのだ。

自分たちではない。背後で戦っていたベルサックやシスター・イルミア、はたまた幾多の骨兵たちですらなかった。

地底の壁面の、とある一ヶ所である。

今にも解放されなんとしている宝具とは、妙に不似合いなその音で、自分も仮面の少女もほんの一瞬意識を惹きつけられた。

そこに、フェルナンド司祭がいた。

呆然と見上げた壁面の一点に、ひびが入っていたのだ。

すぐさま、それは深さと面積を増して、奇怪に唸るような音とともに、予想だにしない現象を引き連れてきた。

怒濤のごとき量の水が、そこから流れ込んできたのである。

「鉄砲、水——！」

「ははは、そらすぐ近くが沼だからな！　『槍』を顯現させたときの魔力でガタついてたのに、いまのがとどめになったか！」

快笑とともに、異音は連なった。

一ヶ所きりではない。

破壊が内側で連鎖していたためなのか。複数箇所から、鉄砲水が一気に地下空洞へとなだれ込んだのだ。たちまち骨兵も司祭も押し流され、その勢いを前に、ぐい、と横合いから騎士の手がこちらを掴み上げたのだ。

「サー・ケイ?!」

「掴まってろ！　剣はともかく、こいつはいささか自信があつてな！　ああまあ、逃げざまなら円卓きっての自信があるぞオレは！　とりわけ水際とあってはな！　おい、そこのうらなり魔術師もさっさと来い！」

つかのま宝具解放が滞った隙に、騎士は力強く掴んだまま、水の中へと躍り込む。凄まじい勢いに呑まれて、上下すら分からなくなりながら、ただ自分は騎士の手だけを離さずにいた。

ぐいん、とその身体が異様なほどにうねくった。

人間の肉体が成すものとは到底思われない、異様なグラインド。

—『イッヒヒヒ！ だからお前は手がかかるよな、愚図グレイ』

水の冷たさに意識が途切れる寸前、最後に聞いた気がしたのは、そんな幻聴だった。

声音からも、人柄は汲み取れるという。

温かさ、柔らかさ、はたまた冷たさ、厳かさ。多くの要素が密接に絡み合い、人間性は形成される。声の響きも同じくだ。

だとすれば。

「……これは、さすがに」

と、たったいまこぼれた呴きは、その例外であったやもしれない。

言葉面こそ驚いた風だが、声音からは何の感情も感じ取れない。長く醸造されすぎたワインのように、あまりにも複雑な色彩が、かえって単色の黒に舞い戻ったと言わんばかりの無感情。

ズエピアである。

ゆるり、とその首が振り向いた。

「いま、再演のパラメータをいじったかね」

相手は、無論ふたりの少年だった。

フラットとスヴィン。

エルメロイ教室の双璧。金髪碧眼のペア。

不可思議な空間で、ふたりはズエピアとともに、過去の再演を観察しているままだったからだ。いくつも浮いている水晶玉の中で、たった今、突然の鉄砲水にグレイたちが呑まれたのである。

「一はは、バレました？」

その片方、フラットが無邪気に笑顔をつくる。

「だって、あの村ってすぐ近くに沼があるんですよね。だったら水源もある。たまたまこんなタイミングで、戦闘の衝撃に岩盤とかが耐えかねて、鉄砲水が噴き出してくる……そんな偶然があつてもおかしくないはずです。なんか構造的に不自然なところがありましたし……ええと、つまりこの過去っぽい場所ってそんな風には介入できるんですよね？」

「……確かに」

と、ズエピアも認めた。

「だが、それにはロゴスリアクトが認識している座標や時間を特定しなければならない。いくら君がアトラス院の技術にさえ干渉ハッキングするほどの異能者だったとしても、そんなパラメータまでたやすく検索・演算できるはずはない。その用途のための術具はここになく、現状の私は自分の頭脳のみを使って演算しているからだ」

すう、とズエピアが視線を移した。

その周囲に、いくつもの水晶球が浮いている。

「この場の水晶球はすべてあの舞台へとつながっているが、この瞬間瞬間にもそのつながりかたは変異し、因果と時間とはパラメータを関連させながら、無限に拡散しつづけている。君が言ったような干渉を行うには、きっかけとなる時間と因果を掴み、正しくアクセスする必要があるが、それは広大な砂漠からたった一粒の宝石を探しあるにも等しい」

無数の鍵穴があると思えばいい。

空間に、いくつもの鍵穴が浮かんでは消えてを繰り返している状態だ。フラットならばその鍵穴を騙すだけの鍵は偽装できるが、そもそも正しい鍵穴はひとつしかない。そして、鍵穴を特定するための手際は、フラットの異能だけで説明できることではないと、ズエピアは詰問しているのだった。

「なのに、どうやって、そんな真似をした？」

「においが、するんです」

これは、すぐ隣のスヴィンが挑戦的な声で答えた。

どうせ察せられてしまったのならば、いちいち隠していても仕方ない。

さきほどから、ふたりですっと仕組んでいた術式だからだ。ズエピアがその気になれば、そんな隠し事はあっさりと看破されることだろう。だったら堂々と胸を張って、少しでも相手から情報を引きずり出した方がまだマシだろう。

「計算しなければならないとあなたは言いましたが、僕の鼻はたとえ因果の綻びだろうが嗅ぎつける。それは本来嗅覚によって感じ取るものではないかもしれないけれど、僕の家系がずっと育ててきたのはそういう魔術で、僕はそういう魔術の結晶です」

正直に言えば。

そんな自分を、スヴィンは好きではなかった。

フラットとの初対面を、少しだけ思い出す。心地よいものではなかった。互いに、同じ欠陥品だと一目で悟ってしまったからだ。

—『先生、先生！　こいつ、すごくとっちらかった臭いがするよ！　僕が壊していいですか！』

開口一番、スヴィンの方が言ってしまった台詞である。

この相手は先生であるエルメロイII世に害なすものだろうと、教室に馴染んできたばかりの自分は考えた。それぐらいならさっさと壊そうという思考に至ったのも、時計塔に移ってきたばかりであれば無理がない。むしろ、いかにも合理的で魔術師らしいだろう。その点でいえば、自分ははなはだしく劣化したのではないか。

ああ、実のところ、今も当時の判断が間違えているとは思っていないのだ。フラット・エスカルドスはエルメロイ教室においてすら傑出したトラブルメイカーであり、卓越した才能も並外れた人格も、けして他者が御せるようなものではない。

実際に、これまでいくつの事件で問題を引き起こしたことか。

先生はもちろんのこと、ほかの生徒やスヴィンだって、そのサポートでどれだけ骨を折ったか知れたものではない。……もちろん、たまには自分が先生に迷惑をかけることだってあったのだけど。

一でも。

だから、とスヴィンは思う。

「……つまり、君たちふたりが協力したということかね？」

ズエピアが、ゆっくりと確認する。

「ええ。勘所は僕が探して」

「干渉は俺がやりました！　はは、スヴィンくんってばすごいでしょう！　サー・ケイには何日も水の中に潜っていられたとかの逸話もあるって、スヴィンくんが教えてくれたんだし！」

元気よく手をあげてから、フラットは級友スヴィンの肩を叩く。

まるで、至極健全なスポーツで、互いの健闘を称え合っているような言葉。死線を前にした一あるいは踏み越えている最中の人にとはとても思われない。いくら魔術師が非日常に身を委ねているとはいえ、あるいはだからこそ、自分の命には敏感なものだろう。

かつて、スヴィンが判断したように、フラットはひどく歪だ。

一見では、極めて脳天気な相手に映る。

もともとが逸脱してる魔術師としては、むしろ平和主義や穏健主義と評せるかもしれない。しかし、明らかにそんな穏やかな表現だけに収まる少年ではない。歴史だけで言えば、フラットが属するエスカルドス家は千八百年を数えるという。下手な君主ロードを超えるその歴史が、ただのお気楽な子供を生むはずもない。

それほどに深く、致命的な欠落は、エルメロイ教室で長く学び、多くの人々と触れ合ったからといって拭い去れるものではない。

一だけど。

だから、ふたりは思う。

そんな少年たちを見やって、

「……君たちは不思議だな」

と、ズエピアは漏らした。

「正直に言って、それぞれはいまだ色位には遠い。時計塔の君主ロードはおろか、私の足下を見るのも難しいだろう」

けして、それは見くびった評価ではない。

アトラス院の院長の言葉は、あくまで精密にふたりの能力を測定したものだ。いかなるエルメロイ教室の天才たちであろうと、そもそも魔術協会自体が、何世代もかけて非人道的に優良種のみを配合され、選ばれた天才たちだけの群れ集う場所なのだ。単に信じがたい才能や効率的な教育を受けたというだけでは、真に上に立つ君主ロードや三大貴族のトップクラスにはかなわない。

「だが、ふたり揃うとまるで変わる。足し算やかけ算といった話ではない。在り方そのものが変異するようだ」

ズエピアの指が、ゆるりと組み合わされる。

閉ざされた瞼まぶたの前で、それは蝶の羽のごとく折りたたまれ、改めて少年たちを值踏みするかのように静止する。

フラットが、隣のクラスメイトをつんと肘でつついて、鼻を鳴らした。

「だって、俺はもう」

「僕たちはもう、冠位グランドの人形師にだって、負けるつもりはありませんから」

きっぱりと、スヴィンは言った。

それは、ひどく傲慢で、しかし確かな自信に裏付けられた言葉だった。

実際に、あの双貌塔で冠位の魔術師と戦ったからこそ、完膚なきまでに敗北したからこそ、今の自分たちはその先に立っている。たとえ大言壯語だとしても、この程度言い切れずに、超人たる魔術師として学ぶ甲斐があるうか。

—そして

だからこそ、ズエピアは考える。

「大きく出たな」

うっすらと、死徒の唇が感情を浮き立たせたのだ。

「なるほど、これは勘違いしていた。過去が舞台、彼らが役者、自分は劇の出来を見届けるだけの脚本家だなどと気取っていたが、ああそうだとも。劇団の脚本家はひとりとは限らないのが常だ。互いの切磋琢磨こそが、ひとりでは辿りつけない領域へと物語を飛翔させる。情けないことに、そんな常識をすっかり忘れていた」

ゆっくりと、ある種の色がズエピアの顔に広がっていく。

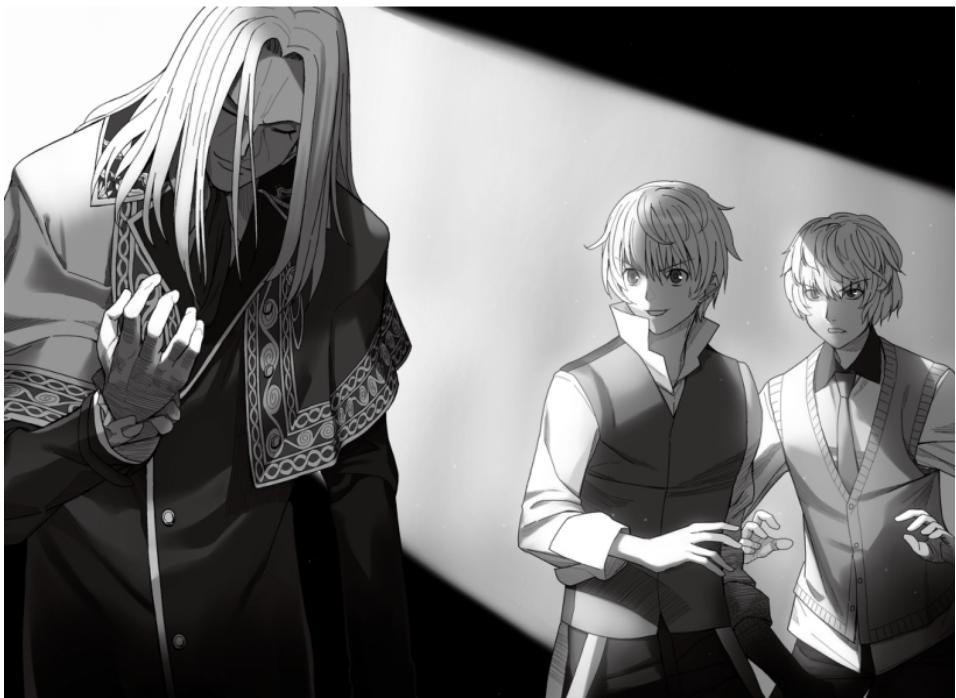
何年ぶりか、何十年ぶりか。あるいは何百年の時を経て、自らのもとに戻ってきた色を、ゆっくりと噛みしめるようにして、ズエピアは少年たちへ視線を戻した。

居住まいをただす。

ほんの数手ほどを指したチェス盤を前に、どうやら相手が素人ではないと知った王者グランドマスターのごとく。

「誰がこの物語を指揮するのか、試してみようじゃないか。私の敵たちよ」

敵と宣言された少年たちは、ともにごくりと唾を飲み込んだのだった。



◆ 第三章 ◆



—夢には、よく香りがつきまとう。

ほくほくと、茹ゆでて漬されたジャガイモの匂いで、いつの頃かは分かった。

十年前より、さらに以前。

我が家家の食卓にはマッシュされたジャガイモが並ぶことが多く、飽き飽きな自分はよく文句を言っていた。当時は父の方がよく料理していて、こちらは母よりもずいぶん自分に甘かったからなおさらだ。意外と凝ることも多くて、行商に特別に頼んで中華や日本の日持ちする食材を用意してもらい、中古本のレシピ片手に、ふたりで料理するなんてこともあった。

あまりに辛すぎて、父と一緒に家を走り回り、さんざん母に笑われたことも。

自分がアーサー王の肉体になりはて、村人たちに崇められ、食事や睡眠まで逐一管理されるようになるのは、もっと後になる。

(……ああ、そうだ)

だから、自分が悪いのだと、ずっとと思っていた。

両親や村に崇められるような、こんな身体になったことこそが、悪なのだと。

だから、ベルサックに見出されて墓守となり、墓地を歩くようになってからは、可能な限り、その仕事に没頭した。

死者はあんなにも怖いのに、それでも生者に崇められるよりはマシだった。定期的に出現する靈に心底怯えながら、自分はどこかで安堵していた。死ぬ程度なら今よりよほどいいと。たとえ自分もま

た死者となり、彼らの一員になったとしても、今この村で生きているよりはよほどいいに決まってる。

そんな風に思いながら……結局死ぬこともできなかった。

矛盾だらけだ。

ロンドンに至って、師匠の内弟子となって、当時からは信じられないほどの交友関係に目を回すようになって、驚くほど美味しい紅茶と甘いお菓子を振る舞われるようになっても、やはり自分の底には当時の想いがへばりついていた気がする。

(……だから)

だから、骸王に会ったことが、何より重大だった。

彼女は己の存在について、どんな風に思っているのか、知りたかった。その結果が、あれほど迷いのない答えであったことに、言い知れない衝撃を受けたのだ。

だったら、自分はどうすればいいのだろう。

素直に、この肉体を彼女に譲り渡すべきなのだろうか。いいやそ
うは思えない。かつての自分ならば、あっさりその選択肢に飛びつ
いたかもしれないが、きっと……今、そうすると悲しむ人たちがい
る。

だったら。

だったら……

地表の教会に、小さな呻きが生まれた。

碎けたステンドグラスの下で、

「……いかがなさいました？」

と、老婆の声が戸惑い、うわずったのだ。

村の者たちでさえ、そのような老婆の声音を聞くのが初めてだつたのか、淡い動搖が周囲へと広がった。

「いかがなさいました、精神の王よ」

手を広げ、祭壇から老婆が訴える。

しかし、応えはなかったのか、がっくりとその手が落ちた。我が神エリ、我が神エリ、なぜわたしをお見捨てになつたのですから
マ・サバクタニ。二千年も昔に、そんな叫びを発した殉教者のようにも見えた。

「おばば様、何が」

と、村人のひとりが問いかけた。

彼らもまた、かなりの数がうずくまつたまま立ち上がらなかつた。

地底の骸王へと捧げた精オ氣ドのゆえである。解放されなかつたとはいえ、仮にも宝具を顕現させた代償は大きい。おおよそ村人の四人にひとりほどは身動きがとれなくなつてゐた。

「……精神の王と、連絡が途絶えた」

「王と」

「グレイと接触された後、激昂されて、宝具を振るおうとしていた

ようだが……」

老婆は、けして正式な魔術師というわけではない。口伝の魔術によって、骸王と感應することはできるが、現場の様子が細かく窺えているわけではなかった。だから、彼らの会話のすべては聞こえていない。

「いや、精神の王はよい。連絡が途絶えたとはいえ、鉄砲水などどうなるお方でもない。くわえて、あそこで鉄砲水が起きたのなら、おそらくもうひとつの懸念も解決する」

奇妙な台詞を発してから、老婆が枯れ枝のごとき指を握りこんだ。

「……だが、グレイが逃げた。こればかりはどうあっても見過ごせん」

「捕まえればよいでしょう」

そんな老婆に、当然とばかりの言葉が返されたのだ。

「王はいまだ三分の一なのですから、惑うのも当然です。その分は私たちが補わねば」

「マグダレナか」

グレイの母だった。

長い髪を指で撫でつつ、胡乱な瞳にえもいわれぬ光を宿して、母親は薄く笑っていた。

「私におまかせください。アーサー王の肉体と、最も長い時間を過ごしてまいりました」

と、女は囁く。

「ええ、誰より知っています。……どれほどに追い詰められても、きっと最後の最後に、あの娘は逃げることを選ばないでしょう」

母親の言葉を見定めるように、おばばの目が細められ、皺に埋もれた。

「分かった。ならば、指示はお前に任せよう」

「ありがとうございます」

頭を下げたグレイの母親に、

「山狩りだ」

と、老婆は命じた。

「沼に近づくことも許可する。あの水からすれば、おそらく今頃は結界も解けているはず」

「分かりました」

「聖堂教会が完全に敵に回った以上、時間はかけていられない」

ごとり、と老婆が懐からとある品を取り出したのだ。

刃を湾曲させた、短剣だった。

よほど古い品であるらしく、金属の意匠は擦り切れている。しかし手入れのゆえか、もっと別の理由か、いまだに切れ味は失っていないと、黄金に煌めく光が誇っていた。

「これが……そうですね」

「侵刃黄金イロウシェン」

と、老婆が短剣の名を呼んだ。

「こればかりは、聖堂教会もブラックモアの墓守たるベルサックも知らぬ。我らがかつて黒い聖母その人よりいただき、アーサー王が戻ってくるそのときまで、密やかに伝えてきた礼装なれば」

恍こう惚こつと、老婆はその短剣を見つめた。

このときのために生まれ、このときのために長らえてきたのだ、と言わんばかりだった。

彼女の言葉どおりであれば、それほどの昔から、この村ではふたつの陣営に分かれ、暗い秘密を抱えてきたということになる。

かたやブラックモアの一族。

紀元前より連綿とベルサックまでつながる、魂を運び、墓を守つてきた魔術師たち。

かたや、アーサー王復活を祈願する者たち。

老婆がこの短剣を伝えてきたように、アーサー王と黒い聖母を信仰する者たち。

おそらく、大部分の村人はどちらでもなかったに違いない。今でこそ村人たちはアーサー王の復活になびいているが、定期的に墓守に選ばれる者もいて、同時に黒い聖母への熱烈な信者もいたはずだ。墓守の使命とアーサー王の復活が必ずしも矛盾しない以上、互いの秘密や事情も慮りつつ、一定の距離をおいたままこれまで共存してきたのだろう。

そして、ある時点から聖堂教会も加わり、黒い聖母を自らの宗教の聖母と同一だとおためごかしつつ、根を張るに至る。

表面上は穏やかに、しかしその裏で、彼らは互いに監視し続けていたのだ。

たかだか百人ほどの村であることも考えにいれれば、これはあまりにも狭すぎて、そしてあまりにも長すぎて、ある種の徒労感さえ覚える歴史だ。

短剣を見つめ、老婆が言う。

「ヤドリギを絶つためにつくられた刃は、単なる現し身ではなく、肉体と精神と魂、その狭間に滑り込むという。はたまた生贊を捧げるとき、その内臓を解体するとき、この刃は我らが聖母の手にて振るわれてきたという。伝説により、鎌だったり剣だったりと姿は変わるがな」

老婆の、喉が震えた。

「グレイを拘束し、この刃を突き立てればよい。さすれば、彼女の卑賤な精神と魂は一時的に肉体から剥がれ落ちる。あとは、なるべくして王の精神が肉体へと宿ろう。残る魂は、聖杯戦争とやらを待つしかないが、我らはなんとしても生き延びる。ああ、幾多英靈がいようとも、肉体と精神がここに揃うならば、必ずや王の魂が召喚

されようさ！ 其の程度の幸運、我らの王が備えぬはずもない！」

長く、長く、老婆は笑っていた。

グレイの母もまた陶酔したような微笑とともに短剣を見つめ、村人たちはただ畏れ多いとばかりに平伏していた。

そして、黒い聖母の像だけが、変わらぬ表情で、彼らを見下ろしていた。

*

けほっ、と水を吐き出した。

ひどく寒いが、それが体温だけのことだというのは、頬を撫でる風で分かった。

鬱蒼とした、森の中だ。

枝葉の隙間から、暗い空が見える。

いまだ太陽は出ていないが、ほんのりと淡い光を湛えてもいた。ずいぶん長い間、地底に潜っていたように思えた。外に出たのだという感慨を受け入れるには、もう数分ほどの時間が必要だった。

(.....夢を)

夢を、見ていた気がする。

もうどんな夢かは思い出せないが、古い夢だった気がした。

そんなことを考えていると、

「よお、起きたか」

と、声がかかったのだ。

不自然にぼやけた顔が、こちらを見下ろしていた。靈基カラダができあがっていないとか言ってたっけ、と連想して、ぱちぱちと瞬

きました。

「……サー・ケイ」

「ああ、こっちの名前も分かるなら上等。結構水を飲んでたからな。経験上、あんまり息を吹き返さないと、認識がおかしくなる。あー、この時代の知識だと、脳にダメージがどうこうとか言うんだっけか？」

今さら鎧が汚れるのもかまわず、地面に座り込み、彼はくくっと喉を鳴らした。

黎れい明めいとあいまって、その姿はひどく神秘的に映った。いいや神秘的も何も、遙かな時代から再現された騎士は、文字通りの神秘そのものなのだが、そんな風に実感したのは初めてだった。

けほけほと咳き込む内に、意識がはっきり醒めて、あわてて上半身をもたげる。

「……師匠、は？ 師匠は、どこですか?!」

「あっちだよ」

顎がしゃくられて、そちらに師匠が横たわっていることに気づいた。

濡れそぼった髪が、地面で広がっていた。ただでさえ悪い顔色は真っ青で、スーツの裾からはぼたぼたと水滴が滴っていた。

「師匠！」

「ありやお前より体力ねえな。まあ深く気絶してる分、水も飲まなかつたみたいだが」

もどかしく四つん這いのまま、その横顔に手を伸ばす。

唇からの吐息が指先に触れたことで、心の底が抜けたような気分になって、その場に倒れ伏しそうになってしまった。……おかしなことだと、自分でも思う。ロンドンについて間もない頃は、いけすかない相手だぐらいに考えていたのに、どうしてだろう。

ほんやりした頭でも、その答えはすぐに分かった。

変わってしまった自分が、ああ、少し嬉しいからだ。

この顔は他人のものだとしても、まるで立ち止まらず、どんどんと変わっていくこの精神こころこそは、間違いなく自分のものだと思えるから。この世界に永遠なんかないとしても、変わり続けるというその事実こそは変わらない。だったら、変化とともに積み重なった時間こそが自分なのだと、いつか、周りに誰もいないところで、ほんの少しだけ胸を張れそうだから。

この人は、そんな自分を教えてくれた人だから。

小さく、息をついていると、

「気が済んだか。一ほれ」

と、騎士が大鎌を差し出してくれた。どうやら、それも回収していくくれたらしい。

「……あ、ありがとうございます」

「一応、今のオレの本体なんでな。大切にさせていただきたい」

「サー・ケイが、助けてくれたんですか」

「さすがにふたりも担いで泳ぐのはしんどかったがね。せいぜい感謝してくれ。なんとかかんとか泳ぎ切ったら、その裏手の洞窟につながってた寸法だ。鉄砲水でガタガタになってたのか、出てすぐ崩れやがったけどな」

曖昧な靈基の騎士が、うんざりといった感じで、濡れた髪をばさばさと煽った。

鎧を着たまま泳いだのだろうか。本来が靈体である以上、鎧がそのままの重さだとは限らないが、いずれにせよ、ふたりも人間を担いだままあんな鉄砲水を泳ぎきれるかというと、そんなのはまず物理的に不可能だろう。ましてや、大鎌まで回収しているのは、どんな風に保持していたのかすら想像できない。英靈だからどうという問題とすら思えないのに、不思議と納得している自分がいた。

意識を失う寸前、こちらの身体を掬いあげてくれた腕。

水をかき分ける腕と身体の動きが、ほとんど異次元じみでいて、

いっそイルカか何かに抱きついている気分さえした。

「昔から泳ぐのだけは得意でな。といつても、こんなのは騎士の名誉とやらにはびたいち関係がない。おかげで同僚どもからは変態的だとか、ろくでもない評価ばかり受けてたが」

確かに、騎士の名誉とは関係なさそうだ。

なのに、この精神モデルひとにはとてもふさわしいように思えた。剣の技量よりも、魔術の腕よりも、よほど似つかわしくて、なぜだかほっとする気がしたからだ。

「ただ、あのおっさんだけは別の地下道へ泳いでいっちまったぜ」

「ベルサック、さんが」

この場にいない相手の名を、自分は舌に乗せた。

それから、もうひとつ尋ねた。

「……あの、骸王は」

「さて。いずれにせよ、あんな水流ごときでどうにかなる相手じゃあるまいよ」

それはそうだ。自分にしても、きちんと『強化』が機能していれば、脱出だけならばなんとかなっただろう。

そこまで考えて、ようやく周囲と状況を確認するだけの余裕ができた。

周囲は樹木に埋もれており、うっすらと霧が出ていたが、さすがに住み慣れた場所だけあって、ある程度は位置に見当がつく。

「村から、もっと山を登ったあたりですね。多分、沼よりさらに向こう側です」

「へえ、そうするとあの地下はずいぶんいろんなところに繋がってたんだな」

「多分……そういうことですよね。あれだけの規模の地下空洞ですから」

思い返せば、あの黒いロンゴミニアドが振るわれかけたことで、地盤崩壊が起こらなかっただけでも幸運だったのかもしれない。ぞっとするような想像とともに、つい身震いしてしまった。恐怖のためか、それとも体温のためか。

考え込んでしまっていると、濡れたフードに不意の感触が訪れた。

えっと顔をあげようとする、その手は半ば力任せに、ぐしゃぐしゃと搔き回したのだ。

「あ、頭をくしゃくしゃするのやめてください！」

「ははっ」

おかしそうに笑って、騎士が手を引いた。

「あいつにはやっぱり似てないが……ああ、ガレスだったら相性良かったんじゃないかな。まああっちも血がつながってるっちゃそうだが」

その名前に、なんとなく不思議な印象があった。

「確か、その方も円卓で……」

「お前が知る必要はないさ」

そらっとぼけて、騎士は視線を移した。

ちょうどそのタイミングで、小さく呻きがこぼれたのだ。

横たわっていた師匠が弱々しくこちらを見つめてくるのに、さつと体温が上がるのを感じた。一度か二度、本当に熱くなったと思う。喉からこみあげたものを吐き出すみたいに、自分は呼びかけてしまっていた。

「師匠！」

「……グレイ、か？」

「はい！　はい！」

師匠の瞳がこちらを見上げていることに、泣きそうになってしま

まったく。

なんて涙もろくなつたんだろう。手を握りしめて、すぐそばでうつむいてしまう。フードがあつてよかったです。こんなところで泣かれても困るのは師匠の方だ。それは分かっているのだけれど、どうしても喉の奥が熱くなつてしまうのだけは止められなかつた。

「師匠……つ」

「……なんだ、今更、妙な顔をするな」

握りしめた指先に、師匠が微苦笑した。

それから濡れた髪を搔き上げて、上半身をもたげる。とりあえずびしょ濡れになつたスーツだけを脱いで、心配そうに懷からシガーケースを取り出した。

慎重に表面の水滴を拭き取つてから開くと、どうやら密閉されいたらしく、中身は乾いたままだつた。あるいは何らかの魔術を使つていたのかもしれない。

葉巻の一本を取り出して、ナイフを握る。

体温が低下していたためか師匠の指がかじかんでいたから、自分がそつと受け取つて、先端を切り落とした。マッチはさすがに湿氣ていたので、フィンガースナップとともに師匠が小さな火をつくりだして、ゆっくりと炙あぶりつけてから、口に咥くわえた。

師匠の唇を、濃い煙が撫でていく。

「…………」

なんだか、ずいぶんひさしぶりに、その香りを嗅いだ気がした。

ロンドンに来た頃はあまり好みじゃなかつた。今でも他人が同じ葉巻を吸つていたら、不快ではないにせよ、ふうんとしか思わないだろう。だけど、師匠が咥えたときだけ、まるでお気に入りの毛布でもかぶつているような気分になつた。

「なるほど、沼の近くまで流されたのーいや泳ぎきつたのか」

「そこは感謝してくれていいんだぜ」

ちょっぴり得意気に、騎士が言う。

それから、

「で、あんたはどうする気なんだ」

と、持ちかけたのだ。

「どうする気、とは？」

「もちろんこの先だ。かろうじて命は助かった。僕偉というやつだろうよ。偶然に偶然が重なって、たまさか命を拾ったというレベルだ。同じことをやれば、百回やって百回死ぬだろう」

平然と、死ぬという言葉を騎士は使った。

そんなことは慣れているのだけどという前提の言葉は、古い戦場の香りを漂わせていた。このブリテンで数々の戦いをくぐりぬけた、本物の猛者ゆえの台詞。

「なんたって、命あっての物種だ。このまま街を出る手だってあるだろうさ」

「……出られれば、だろう」

と、師匠が言葉を添えた。

「私は、やはりここが過去そのものとは思えない。だとすれば、この村に分かりやすい『外』が存在すると思うか？」

「この村に外があるとは限らないだって？ 絵本みたいな話だな」

「何より、今回に限っては、それを決めるのは私じゃないからだ」

そう言って、ゆっくりと煙を吐き出し、師匠の瞳はこちらへと向けられたのだ。

「え？」

「グレイは、どう思う」

と、問い合わせられたのである。

「先も同じことを訊いたがね。これは、まず君の事件だろう」

「…………」

自分の、事件。

そう言わされたのは、初めてのことだった。師匠とともにいくつかの事件に関わってきたが、いつも自分は師匠の内弟子であり、それ以外の立場を持たなかつた。

だけど、そうだ。

今回は違う。故郷の村の出来事であり、最初の事件の続きである。

自分が村を離れたきっかけであり、改めて向かい合つた真実だ。

村の皆が隠していたこと。

地底の神殿。もうひとつの黒い聖母。アーサー王の復活。

何より、精神のアーサー王—骸王。

あるいは、もうひとりの自分。

「拙の言葉は、届きませんでした」

静かに、認める。

足りなかつた。自分の言葉も、自分の経験も、彼女の内面には至れなかつた。

真実を知るためにも、自分の在り方を定めるためにも、彼女との対話は不可欠だと思いながら、自分の言葉はどこまでも上滑ってしまい、骸王の本質を突くことができなかつた。

結局、未熟だからだ。

自分の不足を、どうしようもなく噛みしめる。そのために、どれだけまわりに危険を招いてしまつたかも。

「だけど、師匠が許してくれるなら、もう一度向き合つてみたいです」

「……なら、師としては助力するしかないだろう。内弟子の頼みを断っては、エルメロイの名に恥じるというものだ」

「……はい！」

できるだけ、強くうなずいた。

エルメロイの名に恥じるなんていうのが単なる言い訳だとは分かっていても、むしろ分かっているからこそ、師匠が後押ししてくれているのは十分伝わったから。

「それに、届かなかったのは君だけじゃない。私が余計な言葉を言わせなければ、骸王が宝具を振るおうとすることはなかっただろう」

「あれは……」

師匠の言葉で、骸王が激昂したのを思い出した。

あの瞬間まで、彼女はむしろ手加減していたように感じられた。こちらを拘束しようとはしていても、それ以上の行為に打って出る気はなかったんじゃなかろうか。

ならば、彼女が耐えられなかったのは、師匠の言葉のどこにだつたのだろう。

「……なぜだか分かりませんが、骸王は、再演という意味を知っていました」

ぽつり、と口にする。

「だったら、もう一周目と同じような行動は取らないのでは？」

もともと、自分たちは過去の事件の真実を暴くことを、当面の目的にしていた。

ズエピアが言っていたからだ。

—『君が解くべき虚構の謎を追い求めよ』

それが、この二周目から脱出するための手段になると、少なくとも手がかりにはなるだろうと、自分たちは考えていた。しかし、今回のことでの、それは大きくズレてしまったのではなかろうか。

しかし、

「彼女の反応が、おそらく鍵だ」

と、師匠は囁いた。

「鍵？」

「私にも、はっきりとは分からぬ。だけど、確かにずっと違和感があるんだ。あの質問はその違和感をなんとか言葉にしたものだったが、ああいう反応があるとは思ってなかつた。自分の拙さに恥じ入るしかない。……もう少しで、確かに届きそうなんだが」

またうつむいて、考え始めてしまう。

こうなると長いのは、よく知っている。論文を書き始めた師匠が、食事も忘れて丸一日没頭し続けたあげく、ほうほうのていで扉から這いずり出てきたこともあったぐらいだ。

しかし、今回はその思考に沈み切る前に、

「一ちょっといいか」

と、声がかかったのだ。

「どうした？」

「いやな。さっきから気になってたんだが、あのへん、なんかおかしくないか」

と、騎士が指さしたのだ。

森の一点。獸道らしく、細く土が露出したあたりだった。どこでもありそうな、そんな地面の表面に、自分も淡く違和感を覚えたのである。

「……これは」

と、自分も手を伸ばす。

その先で、湿った地面がかすかに抉れていた。

師匠も同じものに気づいて、眉をひそめる。

「ひょっとして、獸じゃなくて、人の足跡か？」

「……多分、そうです」

姿勢を低くして、斜めから自分は地面を見やった。

昔、ベルサックに教わった狩りの技だ。地面をうがった足跡は普通に立っている視線からは判別しにくい。腰を落として、方向や状況をひとつずつ確認していく。

大きさからすると、おそらく男のものだろうと思った。村の人間とは違って、きちんとした革靴を履いている。あまり山歩きは慣れていないので、歩幅はあまり一定していなかった。

「ここは、沼の近くだったな。ルール通りなら、まず村の人間は近づかないはずだ」

師匠の言葉に、小さくうなずく。

本来、人の足跡のつくような場所ではない。そんな場所に、村の人間とは異なる足跡が残っているとしたら、それは一体どのような意味を秘めているのか。

「……探ってみましょう」

自然と口に出しつつ、不思議な予感があった。

もしも、運命の糸などというものがあるならば、いま天空から垂らされたそれが自分たちに結び付けられているかのようだ。

けして操り人形というわけではなくても、自分たちの行く先がたったいま、その糸によって定められたかのような、不思議な確信であった。

どこかで、声がした。

「——一度偶然を利用したならば、当然次の偶然も連鎖する。運を偏らせてしまったのだから、確率が収束するまでは何らかの反動が発生する。ああこれは幸運には不運がつきものだなんという陳腐な話ではない。振り子に力を加えてしまったのだから、自然と揺れが落ち着くまでは極端な事象が発生しやすいという話だ」

まるで講義のように、落ち着いた声音が状況を紐解いていく。

彼らは、この状況を俯瞰かんしている。エルメロイII世やグレイが森に分け入り、不意に見つけた足跡を追っていく、その景色を逐一観察している。

「えっと……それってば因果の話ですか？ 東洋だと重要な概念なんですよね？ たとえば、朝に鶴を助けたら、夜には恩返しでネットゲームのアイテムを貰えるみたいなの！」

年若い少年の声があがった。

はたして、どこまで理解しているのか、少年の表情には極めて危機感が薄い。そんなところに、隣に座った同級生は苦虫を噛み潰したような顔をしつつ、今のところは諦めて付き合っているようだった。

「フラット、先生の授業じゃないぞ」

「いやだってル・シアンくん、訊けることは訊いておきたいでしょ！ パンにバターかジャムかって大事じゃない！ 重要じゃない！」

「それはいくらなんでも違うだろ！」

獣が噛み付くみたいに言いつつ、しかし同級生の側もかすかな困惑を湛えていた。

「いやでも、沼の近くは地中からなら問題がない？ それとも、あそこは結界の外ということなのか……？」

彼らは、その結界と遭遇して、なおも探索した結果として、この空間に紛れ込むこととなったのだから。

対して、

「見ていたまえ」

と、最初の声の主は穏やかに指摘した。

「君たちの介入が、渦にいかなる変化を及ぼしたのかを。その変化の果てに、彼らが何を見出すかを」

足跡を追って、ほんの十分ほど経つだろうか。

木陰に埋まるかのような、小屋が見つかったのだ。

「は。こんなところに、よくもまあ」

と、騎士が呆れたように感想を漏らす。

ベルサックの住居よりは幾分かマシという程度の、粗末な小屋であった。もっとも森のただなかにあるためか、外側の木材は半ば腐っており、崩れ去ってしまっていながら不思議なくらいだ。

そっとその外壁へと触れて、師匠が指先を動かしてから、口を開いた。

「古いものを、魔術かなにかで補強したようだな」

「魔術で？」

「……見つけるべくして見つけたのかもしれない」

呟いて、こちらへうなずく。

用心深く扉を開き、内側へと入り込んだ。

朽ちた木の床をそっと踏みながら、師匠はゆっくりと視線を巡らせた。それこそ前の骨兵みたいな相手に突然襲われないよう、気を配っている。自分も同じように、感覚を研ぎ澄ませながら、師匠の隣から離れなかった。

最初の部屋は変哲もないテーブルと椅子が置かれているだけ。

しかし、もう少し奥に入り込んだところで、目を剥くこととなつたのだ。

「おいおい、なんだこら？」

と、背後の騎士が声をあげた。

壁の一面を使って、多くのメモや写真が貼り付けられていたのである。

それらのメモや写真は、それぞれが異なる色の紐によって結び付けられており、あたかも魔術の紋様のごとく思われた。

何度か瞬きしつつ、師匠がその名を口にした。

「ウェビング、だな」

「ウェビング？」

「ああ、刑事ドラマなんかでよく使われるやつだがね。漠然としたアイディアや思いつき、複雑な事件などの全貌について、メモや写真にして、それぞれの関連性をつないだり視覚化することで、思考を整理するためのツールだ」

言われてみれば、見たことがある気もする。比較的新しくつくられたようなのは、写真の端や紐に埃など積もっていないことからも分かった。

思考を整理するツールと言ったが、確かに他人の脳を覗き見しての気分にさせられる。

たとえば、何枚か貼られた写真は、あの村をいろんな角度から撮影したものだった。黒い聖母も墓地の遠景もあり、それぞれに何らかの考察を記したと思しいメモが貼り付けられている。それぞれを結びつけた紐は、考察に関連があるということだろう。

師匠の視線が、そうしたメモの一ヶ所で止まった。

「どうした？」

「……いや」

と、メモの端に描かれた紋様へ、師匠が目をとめた。

「どうやら、このウェビングを作った人間は、人の三要素に注目していたらしいな」

「それって……肉体と精神と魂の……」

自分や、仮面の少女の正体。おおもと。

なんのために自分たちがつくられたのかという、その理由。

「私がここまで考えてきた仮説を、ほぼ踏襲している。……いや、精度でいえば私よりずっと上だ。グレイがアーサー王の肉体であり、地下に精神のアーサー王が存在する可能性を見抜いて、考察を先に進めている」

紐に沿って、師匠も指を動かす。

師匠の脳が、ウェビングをつくりあげた相手を、トレースしていくようだった。

なぜだか、妙に胸騒ぎがした。このウェビングとやらが自分につながっているからというだけではなくて、その作者と師匠が思考を共有しつつあることに、言いしれぬ恐怖を覚えてもいたのだ。

そう、恐怖だ。

自分は、その一面の図が恐ろしかった。

許されるならば、叫び声をあげてうずくまりたいほどの恐怖に襲われていた。故郷の村をさまざまな角度から撮影し、ずっと暮らしていた自分だって気づかなかったところへメスをいれて、次々と切り裂いていく手際。

自分の知識ではろくに読み解けないのに、その手際に奇怪な印象を抱いていたのだ。

まるで一解剖というよりも、解体のようだ、と。

「そんな御大層な考察が、ずいぶん無防備にさらされていたもんだなおい」

おどけて騎士が言うと、師匠はいいや、とかぶりを振った。

「そもそも隠すつもりはなかったんだろう。あの村のルール上、沼より向こう側に来る人間はまずいないし、必要に応じて結界を張っていたかもしれない。私たちはあの鉄砲水に押し流されて、突然地

中から現れた異分子だ」

「なるほど、理屈はあってるか」

うなずいた騎士の隣で、師匠がさらに言葉を続ける。

「もうひとつの可能性としては、隠す余裕がなかった……かもしれないな」

「余裕がなかった？」

「そこのキッチンだ」

と、振り向かずに、指をあげた。

「挽いた珈琲豆が残っている。帰ったら飲むつもりだったんだろう。飲む直前に挽かないあたりからすると、少々風味が落ちるよりも、まとめて挽いた方が楽と考える程度には合理主義ということだろうな。つまり、すぐに帰るつもりがそうできなかった、のだと思う」

「魔術師というよりは探偵らしい口振りだな」

「魔術師の技術だけではやっていけなかつたのでね」

自嘲気味に言って、師匠の視線がもう一度ウェビングへと移る。

重ねて貼られたいくつかの書類をめくりながら、数分ほどで師匠が硬直した。

「どうか、しましたか？」

「…………」

すぐには、返事しなかった。

「……そうか。ああ、そうか。くそファック！」

たまにこぼれるスラングとともに、師匠が拳を壁に叩きつけたのだ。けして拳を痛めるような勢いではなかったが、その行動に目を丸くしてしまった。

「し、師匠？」

「当時の私とライネスは気づかなかったが、ここにはもうひとり、現在の私たちの知っている人物がいたんだ。残念ながら、私たちが再演に巻き込まれるより前に立ち去ったようだがな」

「私たちが知っている、もうひとり？」

もう一度慎重に、最初から書類をめくりなおす。おそらく、頭の中ではいくつもの術式が演算されていたのだろう。書類の表面を舐め尽くすように、何度も視線が表面を行き来して、やがてひとつの結論を口にしたのだ。

「ハートレスだ」

「え？」

つい、訊き返してしまった。

だから、師匠はもう一度、はっきりとその名を告げた。

「このウェビングをつくったのは、現ノ代一魔リ術ッ科ジの前学部長ドクター・ハートレスだ」

そうだ。

もともと、この村に戻ってきたのは、ハートレスの手がかりを探るためだった。あまりにも荒唐無稽な出来事に遭遇しつづけたため、完全に脳裏から失せてしまっていた。無人になった村に驚愕し、二周目という名の過去へと飛ばされ、まさか最初の目的へ立ち返ってくるとは。

ならば、これは……

「……ああ、なるほどな。ズエピアはハートレスと取り引きしたと言っていたが、村人たちはハートレスらしき人間のことは口にしなかった。そもそもハートレスが村自体には近づかなかったのならば、それは簡単だ。しかも、ずいぶんと長くこの村を観察していたらしい」

「ま、待ってください。ハートレスが拙の村について、そんなに長く調べていたなんて、どんな理由があったんですか。さっき肉体と精神と魂の話をしてましたけど、一体、ここには何が書いてるんですか？」

「……どうやら、おおよそは論文と、魔術の術式らしい」

改めて、師匠の視線がウェビングへと移る。

その行為がどうしても空恐ろしかった。さきほど、ウェビングを師匠が辿っていたときから不安に襲われていたが、その作り手がハートレスだと知った今となっては、なおさらに恐怖が増幅されてしまった。自分がどうやっても守れないところで、師匠が宿敵と対峙してゐるみたいで。喉がひきつりそうなほどに怯え続けている。

そして。

ウェビングを読み進めるほどに、師匠の目つきは険しくなっていったのだ。

「……師匠？」

「この村の一ーアーサー王にまつわる術式に、ハートレスは干渉しようと試みている」

また、到底聞き逃せない言葉がこぼれてた。

「それは、フラットみたいなのですか？」

いかにもたやすく、あの少年が他人の魔術へ触れるのを、自分は思い出していた。

時計塔の秘密会議にすら複数回潜入したというが、その経緯に触れるたび、師匠が眉間の皺を深くして胃のあたりを撫でるため、詳しいことは聞けていない。

「いいや、フラットのそれはあくまで才能と感性に任せた盗聴タッピングや反転カウンターが基本だが、もっとずっと入念に、丹念に、時間をかけて……」

そこまで言って、しばらくウェビングに触れたまま、視線を彷徨まよわせていたが、やがて小さな唸りとともにうなだれたのであ

る。

「……駄目だ。私では読み解けない」

「師匠が、無理なんですか」

ひどく、驚いてしまった。

そんな風に師匠が弱音を吐くのを見るのが、初めてのことだったからだ。

魔術の技量そのものならともかく、ほとんど呼吸するように他人の魔術を暴いていき、それゆえに危難に陥ることさえあった師匠が、他人の魔術を読み解けないだなんて。

「おおよその方向性は見て取れる。元の術式がケルトと黒魔術ウィッチクラフトによるもので、干渉している術式の基本が現代魔術と黒魔術ウィッチクラフト、さらにアトラス院の鍊金術の混成なのも理解できる。しかし、それで具体的に何をしようとしてるかを知るには、あまりに絡み合い方が纖細すぎる。幾千にも亘る数字ひとつ、髪の毛の先ほどの紋様の違いを読み間違えただけで、まったく別のものに化けてしまう」

ウェビングにかかった、精緻な紋様のメモを指して、師匠が言う。

ひとつやふたつではない。そこに重ねられた紙は何十枚とあり、そのすべてにまったく違った紋様や走り書きがなされていた。あるいは天使のごとき翼であり、あるいは古めかしい王冠であり、あるいは五芒星や六芒星、十一芒星、十二芒星、はたまた多くの図形を複合させた異様なカタチ。

「風景画に最低限だけ描き加えて、異国の景色へ仕立ててしまうようなものだ。技法も絵の具も統一性がなくて、本来は成立しそうもないのに、恐るべき執念と水際だった手際で、強引に成立させている。ああ、これこそ君主ロードなき現ノ代一魔リ術ツ科ジを支え続けたドクター・ハートレスの真骨頂というべきだろうよ」

師匠以前の、現代魔術科学部長。

その能力の一端を、まざまざと思い知らされる。

「それでも方向性まで分かってる以上、ズエピアのような頭脳や、あのルヴィアゼリッタのような一流の魔術回路があれば近づけるだろう。だが、私の脳でも魔術回路でもそれだけの計算はかなわない」

その言葉は、あまりにも苦かった。

何度直面しても、諦められるものではないだろう。まして、この分野なら自分もマシなのではないか、などと少しでも思っていたならば。

うつむいた唇から、低く言葉が漏れた。

「せめて、この場に月靈髓液ヴォールメン・ハイドラグラムがあれば……」

「お呼びになりましたか」

突然、扉のそばに人影がそそりたったのだ。

「一うおっ！」

用心深く周囲を警戒していたはずの騎士サー・ケイですらその存在に気づかなかったのか、声をあげて身をのけぞらせた。

それも当然で、小屋の扉の下から滲み出た液体が、突然人の姿を取ったのである。

楚々とした銀色の姿に、自分は思わず目を剥いていた。

「トリムマウ！」

「君の瞳に乾杯Here's looking at you, kid」

無表情に、何かしらの映画らしき台詞を発する水銀メイドに、つい自分は何度も瞬きしてしまった。

「……どうして、あなたが？」

「昨日ライネス様に言われて、ロンドンへの帰路の途中で、この村に引き返しておりました。可能な限り、義兄には見つからぬよう位置どりつつ、危険があれば精一杯もったいぶってから助けてやつ

て、たっぷりねっちり最大限恩に着せろとのご命令です。ですが、あなたが見つからなかつたので、待機していたところ、ようやくさきほど反応をつかまえてやってまいりました」

「…………」

思わず、絶句する。

それは師匠も同様で、茫然と手のひらで顔を覆つたのである。

「……はははは」

そのまま、今回ばかりは愉快そうに、師匠が笑つた。

「つまり、一周目からあいつ、そんなことをしてたのか」

呆れたようでいて、どこか爽快な声音だった。

おそらく、一周目におけるトリムマウは、あの村での師匠を遠巻きに観察していたのだろう。そして、最終的に危険が及ばなかつたと確認すると、師匠が自分と一緒に村を出る際、密やかに同道していたに違ひない。

「ライネスさん、らしいですね」

彼女の残していた心遣いが、すうと胸の真ん中にしみる気がした。そんな風に話すと、あの少女は不貞腐れた顔をするかもしれないけれど。

帰りたい、と思った。

あの少女が待つテーブルに。

一緒にお菓子を食べて、お茶を飲んで、師匠の些細な悪口でも言い合いたいと。自分は口ベタだからすぐに会話が途切れるけれど、それでもきっと楽しい時間になるだろう。

「でも……トリムマウがいたら、何が？」

「もともと、月靈髓液ヴォールメン・ハイドラグラムは、我が師ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが自らつくりだした魔術礼装だ」

たまにこぼれる名前に、どきりとした。

第四次聖杯戦争で、その人が命を落とした遠因には師匠が関係していたという。

今は、そんな感慨も遠く、師匠がすうと指を振り上げた。オーケストラの指揮者めいた仕草とともに、瞼を閉じたままのトリムマウが、同様に右手をあげたのである。

「我が師が二十代にしてつくりだした魔術礼装が、十二家のひとつエルメロイの至上礼装とまでうたわれたのは、単に戦闘用礼装としてのみ優れていたからではない」

師匠の言葉を受けて、たちまちトリムマウの右手が蒸発していく。

毒性を懸念して一瞬口元を押されたが、水銀はそのまま蒸散することではなく、改めて中空で液化して、空中にいくつもの数字盤を浮き上がらせたのだ。

「これって……」

「月靈髓液ウォールメン・ハイドラグラムは、エルメロイ派で有数の演算機でもある。もっとも、私の制御ではそのごく一部しか解放できないがね」

そんな機能が、トリムマウに隠されていたとは。

浮き上がった数字と記号が、目まぐるしく変わっていく。

師匠の言う術式にとって、その数字や記号がどう関与しているのかは、自分には到底分からぬ領域だ。しかし、読み解かんとする師匠の瞳はこれ以上なく真剣で、数字が変転するたびに、内側の感情がいくつもの色合いを覗かせた。

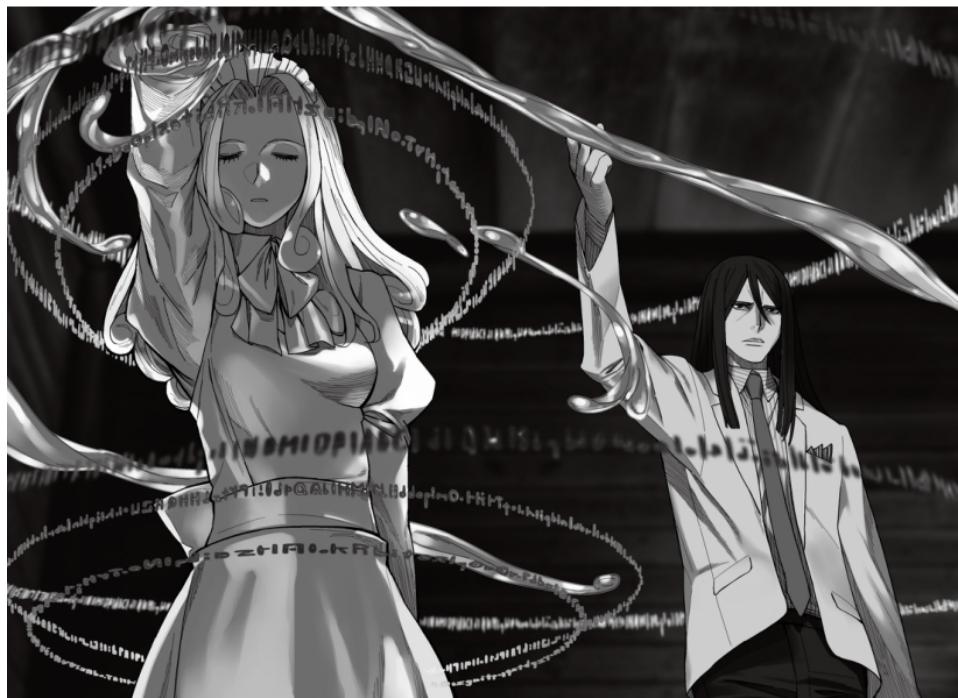
たとえば、焦り。

たとえば、嫉妬。

たとえば、憧れ。

たとえば、怒り。

あるいは、それらのすべてがないまぜになった何か。



ハートレスから師匠ではなく、師匠からハートレスへ何らかの感情が生まれる、そういう瞬間を見てしまった。

「ああ、そうか。その術式が……ここに接続するのか。彼が注目しているのは肉体と精神と魂のいずれでもなく、むしろその保存と変質だ」

呟きながら、師匠はウェビングと数字盤を交互に見つつ、さらに指を振る。

今度は、数字盤はメモに描かれた紋様や五芒星などへ、たてづけに変化し、続いてそのカタチを変換させていった。天秤、魚、山羊、星、太陽、月。順番や大きさもとりどりに移り変わり、魔術師にとってのそれは、科学者にとっての数式に似たものなのだろうとは推測できた。

同時に、数多くの象徴シンボルに埋もれた師匠は、物憂げな哲学者のようだった。

やがて、変換が停止する。

何らかの結論に、水銀の文字盤は達したらしかった。

数秒、師匠は硬直していた。

「師匠、何が」

「……おそらく、答えには届いた。だが、これは……」

「……師匠？」

沈黙の直後、猛然と師匠が振り返った。

「トリムマウ、日の出まではあと何分だ！」

「完全に太陽が出るまでと定義するならば、三十七分から四十三分と推測します」

「すぐに、ここを出る！」

空中に浮かばせていた水銀の盤を、すぐさまトリムマウの右手へと還元させ、師匠がジャケットを翻したのだ。

あわててその背中を追って、尋ねる。

「どういうことです、師匠！」

「沼に行く。すまないが、細かく説明してる時間がない。走りながらになるぞ」

「おいおい。そっちが先に倒れるんじゃないか？」

ふざけた口調の騎士が、小屋の扉を出てすぐに、表情を硬くした。

「一おおっと、こいつは剣呑だ」

「なにかな、サー・ケイ」

「ああまあ、村の様子からして、来るとは思ってたんだがね。ご苦労なこった」

なんとも面倒といった感じに、投げやりな返事がきた。

傾斜した森の麓側一つまり、沼を挟んで、村の方角だった。そこから、徐々にどよもしてくる人の声を、ようやっと自分の耳も聞き取った。

「様子がおかしいと踏んで、村人たちが山狩りを始めたみたいだなこりや。はは、このコースだと、沼に行くってなら正面衝突することになるぞ。逃げるんじゃなきや、見知った相手と殺しあうこと、今のうちに腹を決めておくんだな」

と、いつもの軽い調子で、騎士が呟いたのだった。

*

「はあっ……はあっ……はあっ……」

山の中腹で、貼りつくようにして、ひとりの男が坂を上っていた。

フェルナンド司祭である。

ずぶ濡れになった司祭服が、いまだにぼとぼと水を滴らせている。

彼もまた、ついさきほど鉄砲水に押し流されて、別の穴から這い出てきたのだ。よくも生き残ったものだ、と自分でも思っている。案外脂肪で浮きやすかったのもあるかもしれない。シスター・イルミアとは離れ離れになってしまったが、それは問題ない。

なにしろ、こうして必死に坂を上がっているのも、無事だったイルミアから念話を受けてなのだ。

聖堂教会では、司祭の使うような洗礼詠唱以外は習得を禁じられているが、それは表向きのことだ。彼女のような代行者には、強化や念話をはじめとした実用的な多くの魔術を—ああ、秘蹟などと外聞のいい名前を与えられてはいるが—習得させている。それこそ聖堂教会が圧倒的な権力によって長年収集してきた、知識の一端でもあった。

「ひい……ひい……」

滴る汗とずぶぬれになった司祭服を引きずりながら、フェルナンドは懸命に坂を上っていた。道なき道を進む一歩ごとに姿勢が崩れ、何度も転げそうになりつつ、恨み言を喘いでいるのであった。

「今すぐ沼に来いだと……危うく溺れ死にかけたというのに……シスター・イルミアはどれだけ労働させるつもりで……」

今にも息絶えそうな顔で、しゃにむに足を動かす。

その途中で、声がかかったのだ。

「ご無事でしたか、フェルナンド司祭」

木陰から現れた人影に、司祭がびくりと硬直した。

数秒ほどで、その正体を悟って、恐れを無理矢理に呑み込んで名を呼んだのだ。

「ベルサック……ブラックモア……」

すなわち、ブラックモアの墓守だった。

「……べ、べべべ、ベルサックくん。わ、私を、どうするつもりかね」

「今は、害意はありません」

と、墓守はかぶりを振った。

片手には、巨大な斧を持ったままだ。この斧を持ったまま、あの鉄砲水を泳ぎきったのだとすれば、この墓守の身体能力も凄まじい。対する司祭の側はイルミアと違い、洗礼詠唱以外の能はない。彼がその気になれば、司祭の体など日課の薪割よりもたやすく両断されるだろう。

しかし、ベルサックは常と変わらぬ落ち着いた声で、続けた。

「ただ、あなたの見解をお伺いしたかった」

「……ブラックモアの墓守としてかね」

「そうかもしれません」

あくまで懇懃な態度を、墓守は崩さなかった。

あの村で何度となく交流し、言葉少なながらに敬意を払い続けたのと同じ態度。必ずしもブラックモアの墓守と、聖堂教会では行動方針は一致しなかったが、かといって無闇に反発することもなかった。

互いにいつか対立するかもと思いながら、それでも維持されていた、不思議な関係性。

「聖堂教会とて、けして一枚岩というわけではないでしょう。少なくとも、俺はそう思っていない」

と、墓守は低い声で囁いた。

「以前から、疑問に思っていました。あなたもシスター・イルミアも、何くれとなくグレイに声をかけることが多かった。シスターはおそらくグレイを監視するためだったでしょうが、あなたのそれに違う何かを感じることがありました。それは、どういう理由だっ

たのでしょうか」

「……気のせい、というわけにはいかないかね」

太った臆病なネズミみたいに、きょろきょろと司祭が周囲を見やる。

そんな仕草を前にして、そっとベルサックは付け加えた。

「シスター・イルミアはここにはいない。念話で連絡を取り合ってはかもしれないが、だからといってあなたの行動まで監視できるわけではないでしょう」

「……う」

「司祭様、あなた個人の見解を聞かせていただけないだろうか」

「う、う、うむ」

ごほんと咳払いして、上目遣いに司祭がベルサックの表情を探る。無論、墓守は一ミリたりとも表情筋を動かさぬままだった。

それで、相手の思惑を窺うことは諦めたのか、ほとんど球形の頸がぶるんと震えて、やがて厚ぼったい唇が答えを返した。

「……無論、聖堂教会としてアーサー王は異端だ。我らと同じ宗教に属すると考えるには、その在り方には土俗の信仰が深く混じりすぎている」

司祭の見解は、聖堂教会として極めて妥当なものだ。

アーサー王の数ある伝承にはかの一大宗教もまた色濃く影を落としているが、それは現代に通じるものではない。登場する宮廷魔術師にしろ魔女にしろ、そもそも王家にしろ、土俗の宗教を抜きにしては語れないからだ。

しかし。

かすかに、墓守の片眉が動いた。

しばらくの間をおいてから、

「だが、そんなもの、あの娘とは本質的には関係ないだろう」

と、司祭が吐き捨てるようになつたからである。

夏の夜風を受けながら、墓守がゆっくりと尋ねた。

「関係ないと、そう仰いますか？」

「あるはずないだろう。だいたい、昔の慣習を未来の世代にまで押しつけて、犠牲を強いるのが間違つてなくてなんだ」

きっぱりと言い切つた司祭の横顔は、ひどく爽やかだった。長い長い道を歩いて、やつと重い荷物を下ろした旅人のようでもあつた。

すぐに、暗い影が落ちた。

「ただ、私にこんな話をする資格はあるまい」

「どうしてですか」

「……十年前だよ」

と、いささか苦しげな声で、司祭が口にした。

「グレイの顔が突然変わつていつたことについて、聖堂教会へ報告したのが私だからだ」

「…………」

ベルサックは、何も言わなかつた。

知つていたとも、知らなかつたとも、そんな感想は付け加えなかつた。

「当時はね、そこまで深刻なことと思っていなかつたよ。確かに、ひとりの少女の姿が変わっていくというのは恐ろしい心持ちがしたが、もともとの彼女の印象から大きく外れるものでもなかつたから、まあ成長期にはそんなこともあるのではないかぐらいに捉えていた。それでも村人たちが熱病に浮かされるように、彼女へ信仰を捧げ始めたのは報告しないわけには行くまいと思はされた。とりわけ、あの母親はね」

司祭の唇に、苦笑が浮かぶ。

あの母親がどれだけ娘に傾倒していたか、村の者ならば皆知っている。一千年以上もかけて薄められてきたアーサー王信仰が再び燃え盛ったのは、明らかにあの母親と村長の老婆によるものだ。

「だから、念のため定期連絡の報告書には書いておいた。私がやったことといえば、それぐらいのことだ」

疲れをこらえるためか、近くの樹木に身をもたせかけて、フェルナンド司祭が続ける。

「そして、その結果として、しばらくして、あのシスター・イルミアが派遣されることとなった。彼女は、本物の聖堂教会の構成員だ。聖堂騎士団での訓練を受けて、魔術師や人外も駆逐できるほどの能力を獲得した、若き逸材だ。私のような、少々才能があったからといって無理やり選ばれたような、僻地の監視員とは違う」

汗を拭いながら、司祭が苦く笑う。

「彼女にはね、何度も言われた。教会に害をなすものが生まれようとしているならば、その芽を摘むのも主の教えだと。ああ、きっとそれが正しいんだ。彼女と私では、厳密に言えば宗派も異なるからね。一昔前なら、それこそ異端だって彼女に狩られる側だろう」

それは、かの宗教の歴史である。

ある意味で、まったく違う宗教よりも、根幹では同じ部分を持つ異端に対してこそ、彼らは苛烈だった。価値観で重なる部分があるからこそ、わずかな違いがどうしても受け容れられない……それは人間の性さがかもしれない。

「だから、私に、そんなことを言う資格はない」

と、司祭は呟いた。

「無論、当時の行動は、職務として正しいことだったと確信している。しているが、それが聖務だと言い切れることだったかは、この数年ずっと考えていた。……なんだ、妙な顔をして。おかしなことを言ったかね」

「……ああいえ」

と、ベルサックはかぶりを振った。

少し間をおいて、墓守がこう続けたのである。

「ただ、あの村で起きたすべてが嘘でなかったということを、俺は俺の信じるものに対して感謝したのです。少なくとも、あなたは俺と同じものを、あの村で見ていたように思ったから」

「……ふん」

視線をそらした司祭が、今度は神妙な感じで口を開いた。

「君は、どちらにつくつもりかね」

「どちら、ですか」

「私たち聖堂教会側か、村人側か、だよ」

森のただ中で、フェル NANDO の声音は熱っぽく響いた。

「君がこの国の政府とつながりがあるのはとうに知っている。シスター・イルミアはこの手のことに敏感だったからな。だが、別に政府のスパイというわけではないだろう。ブラックモアの墓守自体は、アーサー王以前からの歴史を持つはずだ。ならば、村人みたいにアーサー王を盲信しているわけでもあるまい。別に、私たちの側についたからといって、信念を曲げたことにはならないのではないか？」

演説する司祭に、墓守は意外そうに片眉を動かした。

それから、

「あなたが監視員として聖堂教会に選ばれたのも、分かる気はします。平時であれば、ゆっくりと異端を馴化させるのに、あなたほど適性のある相手はなかなかいないでしょう」

「褒めてるのかね、それは」

「そのつもりです」

と言って、ベルサックはこう付け足した。

「俺は墓守の後継者として、あの娘を守るつもりです」

「だったら、私たちと……」

「あなた方、聖堂教会がグレイを手中に収めたとしたら、やはり無事とはいかないでしょう。無論、あなた方の宗教は赦しを訴えてはいるが、それは俺たちの世界まで適用されるものではない。赦しはあくまで人のためのもの、人外をあてはめる必要はないでしょう」

「む。……それはそうだが」

「ご配慮、痛み入ります」

真摯に、ベルサックは頭を下げた。

それから、不意に腕を組んで、フェルナンド司祭同様に樹木へもたれかかってから、目をつむったのである。

「この場では、俺は何も見なかった。誰とも会わなかった。少々疲れたので、数分ほど休憩してのうちに、誰かがいなくなることもあるでしょう」

「……言いたいことはあるが、甘えておこう」

可能な限り尊大に、ぶるんと司祭服の胸をそびやかして、フェルナンドが再び坂の上へと歩きだす。

その背中に、声がかけられた。

「今度は……互いの命を奪い合うことになるでしょうね」

「いやいやいやいや、勘弁してくれ」

情けない声で言って、へっぴり腰で、司祭が坂をあがっていく。ぜえぜえと息も切れて、たっぷりと搔いた汗で、水浸しの司祭服をさらに汚しながら、それでも足を止めることはなかった。

その司祭服が霧に霞んでから、ベルサックはゆっくりと目を開いた。

疲れなど微塵も感じさせない足取りで、彼もまた坂を上り出す。その先は沼へとつながっている。おそらくはそこが決着地点になるのだろうと、墓守も予感していた。ずっとあの村で行われていた、穏やかな嘘の終わり。

ひょっとしたら、誰もがもう少し続けたかったかもしれない時間

の、結末。

「一ああっ！」

不意に、叫びが森を切り裂いた。

その相手を悟って、ベルサックが突き飛ばされるように走り出した。凄まじい速度で、声の地点へと走り抜けて、大きく目を剥いた。

「フェルナンド司祭……！」

そこに、司祭が倒れていたのだ。

前のめりに倒れたまま、背中に赤い血が広がっていた。

あわてて駆け寄ったベルサックが、その首元に手を触れて、身を強張らせる。

「死んでる……」

だが、ベルサックが目を離したのはわずか数分だ。

そのたった数分の間に、ここで何が起きたというのか。

赤く染まった背中に触れて、ベルサックは低く呟いた。

「背中から、ナイフか何かで一突き？」

もちろん、フェルナンド司祭は戦闘訓練など受けていない。村の誰かがであっても、不意をつければ殺すぐらいは簡単だろう。だが、一体誰が？ こんなタイミングであれば当然フェルナンドも用心するだろう。安心して接触しそうなのはシスター・イルミアぐらいだが、彼女が司祭を殺す意味があるとは思えない。

もうひとつ、不思議な点に、ベルサックは気がついた。

「身体が……乾いている……？」

師匠とともに、自分たちは山を下りていった。

沼まで、もう少しだ。

鬱蒼と茂った草を、トリムマウが搔き分けている。疲れを知らないことを考えれば、適切な配置だろう。いつも最初に顎を出す師匠も、今回ばかりはぐっと堪えたまま、厳しい坂を歩み続けていた。

しんがりは騎士サー・ケイが睨みを利かせ、自分は師匠のすぐ隣だった。

手元のアッドは大鎌のまま、いまだ目覚める様子はない。

その事実にぎゅっと唇を引き締めていると、師匠が不意に口を開いた。

「村のみんなと、向かい合うのはいいんだな」

「……はい」

「君の母親も、いるかもしれない」

「……はい。分かってます」

二度、自分はうなずいた。

山狩りと聞いて、衝撃はあったが一時のものだ。あの母とも向かい合わねばならないのだと、村が敵に回ったときから分かってはいたのだから。

「それより、さっきの話はどういうことですか。ハートレスはここで、何をしていたんですか」

「ウェビングはある程度読み解けたが、何をしていたかについてには、まだ仮説段階だ。しかし、事件直前の行動については推測が立っている」

「直前の行動？」

「一周目のことだがね。ベルサックは、複数のルールに反した者が一日目にいたと言っていた」

ライネスの話を思い出す。

師匠とふたりでズエピアに出会った後のことだ。ベルサックがこんな風に言って、師匠たちに何か知らないかと問い合わせていたはずだ。

—『子供が出歩いたりとかで、ままルールがひとつ破られることはある。……だが、今回はふたつ、ルールが破られていた』

「あれは夜に、ハートレスがこの村に近づいたんだ。おそらくは最後に仕掛けを見届けるか何かをして、黒い聖母に祈りを捧げることもなく、そのまま出て行った」

「出て、行った……」

確かに、それでもルールはふたつ破られる。

夜に出歩くことと、黒い聖母に祈りを捧げないことの、ふたつ。

「でも、来るときは」

「あの小屋は沼よりも向こう側に建てられていた。おそらく、村の魔術的な警報の、外側ということだろう。それでも、ひっかかることはあったかもしれないが、ベルサック自身たまにひとつ破られる事はあると話していた。夜に出歩くことでもルールにはひっかかる。だから、さして彼も気にしなかっただろう」

理にはかなっている。

だが、だとしたら、どれぐらい長いこと、ハートレスはこの村の近くに潜んでいたのか。魔術警報の外に座しつつ、どれだけの期間、自分や村のことを監視していたのか。

「…………」

ぞくぞくと、嫌なものが胃の底にわだかまっていた。

村が抱えていた秘密を知ったときとはまた別の、生理的な嫌悪感。

人というよりももっと別の、虫のような冷徹な観察を想起してしまったのだ。あの魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで一度会ったきりだが、それでもある種の非人間性を存分に感じさせたあの男が、長期間自分を見張っていたというならば、一体どんな結論を得たのだろうか。

「ハートレスという魔術師は、基本的に事件に直接関与しない」

分析を、師匠が語る。

「あの双貌塔イゼルマでの資金投資以外でも、間接的には多くの事件に関わっているはずだが、そのほとんどは闇から闇に消えるように処理されてしまっている。そういう事件を、ハートレスは選んできたんだろう。でなければ、いつどんな不確定分子に目をつけられるか分からんからな」

ここまで言って、一旦口を閉ざす。

「私が、たまたまそれを破ってしまった」

「ほう」

相槌を、今度は騎士が打った。

「なるほどなるほど。あのウェビングとやらが途中で放置されていたのはそういうわけか。納得はできるな。つまり、今回の事件のきっかけになったのは」

「ああ、この事件のきっかけは私だ」

どこか愉しげな騎士の言葉に、渋面の師匠がうなずいたのだ。

「師匠がきっかけってどういう意味ですか」

「聖堂教会が、どうしてこの時点で動いたかだ。時計塔の君主ロー

ドが乗り込んできたならば、もはや聖堂教会は座して見ていられない。少なくとも、ハートレスはそう判断して、早急にあの場を立ち去ったんだ」

「…………つ」

つい、拳を握りしめてしまった。

そんなのは当たり前だ。師匠は仮にも時計塔に十二人しか存在しない君主ロードであり、その一拳手一投足までがほかの勢力にとつて注視されるべき存在だ。アーサー王が復活するかもしれないという第五次聖杯戦争のタイミングを前にして、かの君主がずっと監視していた村へやってきたとなれば、それが偶然と思われるはずもない。

当たり前なのに、つい見過ごしてしまった。

「ハートレスにしてみても、この段階で私が村に乗り込んでくるのは想像の外だったに違いない。ああ、十二の君主のひとりが直接やってくるなんて無軌道は、計算の外だったんだろう。すべての黒幕なんてわけではないにせよ、この事件でもまた、彼はなんらかの役回りを持っている」

「みなさま、もうすぐです」

先を行く水銀メイドが、そっと囁いた。

その言葉通り、すぐ森が開けた。

早朝の柔らかな光が、優しく目を刺激する。

もう目と鼻の先に、沼が見えた。

タブーであるがゆえ、自分もほとんど近づいたことのない場所だったが、こうして目の前にすると、沼というにはいささか大きかった。泥混じりではあったが、昔はもう少し透き通っていたかもしれない。

徐々に、地平線から射す光はその支配地を広げていく。

山脈の傾斜にゆっくりと光の世界が訪れてくるのは、多くの人の胸を打つだろう美しい光景だったが、どうしてもそんな気分にはな

れなかった。

暁。

つまり、それは—

「君が、死ぬ時間だ。いや、死んだことになった時間だ」

師匠が、答えを口にする。

本当に、この人は遠慮がない。真実を前にしてしまえば、ほとんど自動的に喋ることが義務だとでも思ってるみたいだ。だから、この人を嫌う魔術師も多いだろう。真実を覆い隠すヴェールこそが、魔術を守るのに欠かせない防壁なのだから。

師匠の視線は沼へと釘付けになっていて、唇からこんな台詞を滑り出させた。

「だから、きっとこの時間から外れられない」

一はたして。

予言のごとくに、異変は生じた。

沼の内側から、泥水をかきわけて、巨大な何かが浮き上がってきただのだ。

人影どころではない。

見た覚えのある建築物が、まるまるひとつ浮き上がってきたのだ。

否、見た覚えどころではない。だってそれはほんの数時間前のことだ。とりわけ忘れられないのは、入り口からすぐ、光に照らし出された石像だった。浮き上がった神殿の一部は、沼の端と重なり合い、まるで橋がかかったようでもあった。

そんな景色は夢想だにしなかったため、茫然と自分は呟いていた。

「あの神殿が……水に浮かんだ……？」

ああ。

まだ朝陽も朧おぼろな霧の中、洋々と浮かび上がったのは、骸王と戦う寸前に見つけた地底の神殿だったのだ。

もちろん、物理法則で言えば、石造りの神殿やそれを支える地盤が沼に浮かぶはずもない。あれは間違いなく神秘だ。それも現代の魔術師では到底及ばぬだろうほどの、絶大な規模の。

ただ、あまりの出来事に茫然と見守っていた自分の隣で、

「……ああ、くそ。そういう見立てかよ。神秘なんぞに絡むヤツは、ろくでもないことばかり懇切丁寧にやってやがるな」

騎士サー・ケイが、低く呻いた。

ふざけた口調もなりを潜め、かの円卓に席を並べていた騎士は歯噛みしてから、こんな台詞を舌に乗せたのだ。

「あれは……アヴァロンだ……！」

*

「な、なになにこれ！　どういうこと！　なんで神殿が浮かぶわけ?!」

動搖と言うよりは、新しいおもちゃの仕掛けに興奮するような声が、空間に響いた。

「構造に不自然なところがあった……と自分で言ってただろう」

ズエピアが、落ち着いた声で言った。

再演のパラメータをいじって、鉄砲水を現出させたときのことだ。まさにパラメータをいじったフラットがそんなことを口にしていたのである。

—『なんか構造的に不自然なところがありましたし……ええと、つまりこの過去っぽい場所ってそんな風には介入できるんですね？』

フラットが比較的介入しやすかった理由。

成功したことに、一応とはいえズエピアが納得した理由。

そのふたつは同じところに起因していた。つまり、フラットが鉄砲水を誘い出すことに成功したのは、もともとそういう機構があの地下に仕組まれていたからだ。

「正式に浮かばせるための順序もあったんだが、その過程を飛ばして稼働させるのに、いささか苦労した。神殿の浮上と同時に、結界が解除される仕組みの方は動いたようだが」

ズエピアの言葉に、フラットが顔をあげた。

「……それって、つまり、俺の打った手を打ち返したことですか？　俺が干渉ハッキングしたから、それを利用した？」

「ふむ」

と呴き、ズエピアの睫まつ毛げが淡く揺れた。

「君の教師は専門ではなかろうし、そこは教えられなかったのだろうがね。魔術による干渉ハッキングにもさまざまな流儀や技術がある。正常に動いている回路を不正利用するだけが能ではない。滅多にあることではないが、魔術師のハッカー同士が巡り会ったときだけ通用する戦術もある」

アトラス院の鍊金術師の指が、見えないピアノの鍵盤でも触れるように動く。

そのひとつひとつが、エルメロイII世たちの過去めいた世界を操作する、魔的な響きを奏でているようにも思えた。人間の耳には届かない音色は、だからこそ世界そのものを震わせるのか。

「私自身、すっかり忘れていた能力を披露できる、またとない機会だった」

ズエピアの言葉からは、並々ならぬ自信と、それを裏打ちする時間の厚みが窺えた。

「あはは！ それってすっごくいい！ 魔術ってそんな使い方まであるんだ！ アトラス院って何十年もかかったＴＣＧぐらいに奥が深いね！」

「いいから落ち着け、お前」

クラスメイトをたしなめつつ、スヴィンもまた水晶球を睨みつける。

彼らが誇る時計塔の講師は、いま水晶球の中で、浮上した神殿と向かい合っていた。

「さあ」

と、ズエピアもまた、水晶球へ視線を向ける。

「君の解くべき謎に届くか、ロード・エルメロイII世？」

「アヴァロン……って」

もちろん、その名前は自分も知っていた。

死せるアーサー王が運ばれた地。

そして、いつかの蘇りを約束されたという場所。このブリテンにおいて最も神聖だといっても過言ではない、そんな一

「水の向こうの、あの神殿が……？」

「アヴァロンそのものではなく、アヴァロンの伝説にちなんでつくりあげたものだろう。サー・ケイが口にしたとおりの見立てが、魔術には重要だ」

「はっ。よくもまあ、あれこれ揃えたもんだ」

感心したように、騎士が呟いた。

ただ、その言葉からは單なる感想だけではなく、もっと別のものも滲んでいる気がした。その心持ちが分かるなどとはとても言えないけれど。

「あのウェビング通りなら、あの神殿で、肉体と精神と魂の合一が達成される」

師匠も、震えを堪えた声で言う。

自分という肉体が捧げられるべき聖地。

ならば、当然、精神たる骸王もまた、あの神殿で待ち構えているのか。

「あの橋っぽいところを使って、村のやつらも神殿へと入っていったな。もともと仕掛けを知ってたのかどうかは分からんが、あの仮面の王様と一緒に、手に手を取って仲良くお待ちかねってわけだ」

うんざりといった感じに、騎士がため息をつく。

「だけどな、まっすぐ行っても、二の舞いだぞ。またぞろあの黒い聖槍を振りかざされれば、オレたちどころか、山ごとえぐられておじゃんだ。そらまあ痛みも何も感じずにすんと気楽かもしれないが、なかなか馬鹿らしい結果だと思うぞ」

「いいや」

と否定した声に、騎士も自分も振り返った。

「おそらく、そうはならない」

師匠の口調は、静かな確信を湛えていた。

はたして、その意味は一この二周目の『結末』は、すぐに知れたのだ。

◆ 第四章 ◆



神殿へは、数本の橋がかかっていた。

きっと、それも含めての仕組みとなっているのだろう。いまだ水浸しの床も、徐々に排水されていっているようだった。

ただ、水で洗われた神殿は、地底で見たときとはうってかわった莊厳さを湛えていた。

あるいは、本来の姿だったかもしれない。黴かびの生えた地底で幾星霜を過ごしていた神殿が、地表に現れるにあたって神聖なる在り方を取り戻したのは、いくつかの伝承を思い出させた。古い神話において死んだ神々は、地底の冥府から連れ出されることで、しばしば息を吹き返すのだった。

その神殿の入り口で、人影がいくつかにまとまって、蠢うごめいでいる。

ひとつは、村人たちだった。

おおよそ十数人。手に手に、古めかしい斧や鎌を持って、こちらを睨みつけている。ほかは動けなかったり、年齢の問題だったりするのだろう。

「アーサー王の……！」

「アーサー王の……肉体が……」

ぼんやりと呴かれる声に、つい目を伏せてしまった。

誰も、もうグレイとは呼ばないのだろうか。

その奥に、もうふたり、代表となる女性と老婆が佇んでいる。

「母さん、おばば様」

「おぬしは……」

と、老婆の側が、低く声をあげた。

母は、何も言わなかった。ガラスのような瞳が、無感情にこちらを映すきりだった。この期に及んでも、彼女が示す表情は何ひとつ変わらなかった。

もうひとつは、シスター・イルミアだった。

尼僧服のまま、ゆるりと力を抜いて、単身村人たちと向かい合っている。

たったひとりで、村人たち全員を相手取って何の問題もないと豪語するようでもあった。いいや、実際にそうなのだろう。彼女が地底で示した戦闘力は、平凡な村人たちなど鎧袖一触してあまりあるものだった。

実際、腰が引けているのは村人たちのほうだ。いかな狂信をもつてしても、ろくな訓練を受けていない者たちを戦士と変えるのは難しい。

そして、両者と等距離にいるのが骨兵たち。

当然だが、こちらは何の言葉も発さずに、双方を監視していた。

しかし、三つ巴のにらみ合いは、意外なほどの虚脱感を伴っていたのである。

誰もが予想だにしない『結末』が、そこに訪れていたからだ。

「……遅かったわね」

と、シスター・イルミアが口にした。

「戦っては、いなかったのですか」

「ええ、これじゃあ戦いになるはずもないでしょう。沼の仕掛けに気づいて、一番乗りしたつもりだったけど、私がついたときにはこうだったもの。……ああ、これだと私が第一発見者ということになつて、信用がないかしらね」

呆れたように、尼僧は顎をしゃくった。

その言葉に嘘はないだろう。周囲に争いの跡がないからだ。いくらシスター・イルミアとはいえ、あれと戦って無傷で済むとも思えない。

しかし、

「どうして……こんな……」

ぱつりと、緊張の糸が切れた声で、老婆が言った。

あれだけ信仰に燃えていたおばあ様ですら、今はその熱を失っていた。

そう、止める必要もない。あるはずもない。彼らが命をかけて戦うべき最大の理由は、すでに奪われていたのだから。

「……おいおいおい……なんで、こんなことになってやがる」

と、騎士サー・ケイも、さすがに茫然とした声で呟いた。

彼らの視線が集中しているのは、骨兵たちよりさらに向こう側—神殿内部に配置された、黒い聖母の足元だ。

聖壇となったその場所に、もたれかかった人影があった。

ああ、自分はその光景を知っている。とっくに忘れているけれど、忘れていたはずなのだけど、その場面を目の当たりにすれば、嫌でも思い出してしまう。

ひどい頭痛に、襲われた。

一瞬、真っ白に視界が染まるほどの痛みは、いっそ内側の記憶をさらに暴き出す効果ももたらした。

最初に思い出したのは、嗅覚だ。

もつれて腐った草と水の臭い。

吸い込んだこちらの喉までも爛れてしまいそうな瘴気。

今の沼よりも、あのときはもっと濁っていたのだろうか。長くいれば病んでしまいそうなほどの臭気が、鼻の粘膜にこびりついていた。

そして、声だ。

何十とも何百とも思える、けたたましい鴉の鳴き声。

そのすぐ近くで、自分に向けられた、あの叫び。

—『お前は……私に……』

ああ。

その結末が、今ここで明らかになっている。

「骸王が……死んで……る……？」

他人の言葉みたいに、自分の呴きが聞こえた。

並み居る骨兵たちの向こう側で、黒い聖母に見守られ、倒れた仮面の少女が首元を血の色に染めていたのだった。

致命傷なのは、明らかだった。

祭壇にもたれかかったまま、少女はぴくりとも動かない。流れ出た大量の血は、とっくに広がりきっていて、端の方は徐々に固まりつつあった。

そこにいるものは、すでにモノだ。

命を失った肉塊に過ぎない。

「なん、で……」

自分の呟きが、まるで他人の言葉みたいに聞こえた。

いいや。

まるで予想しなかったわけではない。

あの一周目で自分が生きのびて、かつ同じ顔をした相手が死んだとなれば、その相手はひとりしかいない。だから、ひょっとしたらこの二周目でも同じことが起きるのではないかと、そんな予測は心のどこかにあった。

しかし、だとしても、それは必然としてつながるのだろうと考えていた。よもや、こんな突然に、一切の流れを断ち切るみたいにして、あの骸王が死に至るなんてことがあろうとは。

あまりのことに衝撃を受けていると、もうひとつ、村側の橋から人影が現れた。

「……これは、どういうことだ？」

「ベルサック」

ブラックモアの墓守。自分に生き方と戦い方を仕込んでくれた、もうひとりの先生。

骸王の死体を見やり、彼は厳しい面持ちを崩さなかった。

ばかりか、こんな発言を残したのだ。

「ここに来る途中、フェルナンド司祭も死んでいた。誰かと争った形跡があったが……言っておくが、俺じゃないぞ」

「は?!」

シスター・イルミアが美しい眉をつりあげて、ぐるりと振り向く。

「あんた、司祭に手をかけたわけ！」

「俺じゃないと言っている」

改めて口にしたベルサックを前に、自分は再び目を丸くしていった。

「……そんな……！」

まるで、連續殺人事件だ。

一周目でもそんな事件が起きていたのだろうか。

フェルナンド司祭と骸王。ここまで極まった局面で、極大の爆弾でも落とすかのようなふたつの死。あまりにも唐突過ぎて、到底受け入れられない。一体何がどうなって、こんな事態が起きているのか。

おさまらない頭痛に片手でこめかみを押さえると、ジジ……ジジ……と、妙な音が聞こえた。

（……何？）

フィルムが焼けるような、書物の端が炙られるような音。

それに気を奪われていると、師匠が口を開いた。

「やはり、そうなったか」

「あんたは、これが分かっていたのか、エルメロイII世」

と、騎士サー・ケイが問う。

確かに、師匠はそう言っていた。おそらく、この場で骸王と戦うことにはならないと。それは骸王がすでに死んでいると悟っていたからなのか。

「一周目のベルサックは、黒い聖母のもとでグレイの死体が出ているから、追われることはないと言った。だから当時は教会が現場だと思っていたが、何のことはない。単に黒い聖母がもうひとつあつただけだ。もちろん、当時のベルサックがいちいちそんな説明をしている暇はなかったがね。……だったら、ここが過去でない以上、必ずこのタイミングで帳尻を合わせてくるだろうと思っていた」

少しだけ抑えた声で、師匠が言う。

過去がどうだとか言うのを、まわりに聞かせないための配慮だろう。自分たちにとって、この世界が二周目であることなど、それこそ言葉を尽くしても理解させられまい。

「過去じゃない？」

「だったら何なのか、をずっと考えていた。単なるシミュレーションなら、私たちを特定タイミングに送り込む必要もないだろう。重要なのは何のための再演であり、いかなる意味をもっているかだ」

そこまで囁いてから、今度はついと視線を動かした。

「マグダレナ」

と、呼んだのだ。

一瞬自分でさえ、それが誰の名前か迷ってしまった。

母親の名前だというのに、この村では誰もそれを呼ぶことはなかったからだ。

「あなたの、名前でしたね。以前、グレイから聞いたことがあります」

そうだったろうか。思い出せない。ロンドンに着いてからあれこれのことを話した中には、そんな内容もあったかもしれない。

「これは、おそらく、あなたにしか意味の分からない結果だ」

「何のことですか」

母は、表情を変えない。

いや、それはわずか数秒のことだった。まるでずっと固まっていた石膏か何かが剥がれ落ちるみたいにして、今度こそ、大きく顔を歪めたのである。

「そんな……」

と、喉が震えた。

母の狼狽など、この目で見るのは、一体どれぐらい久しぶりだったろうか。

「そんな、まさか、あなたは……！」

続けた呻きとともに、よろけるように走り寄ったのだ。

水浸しの神殿に淡い波紋を広げながら、無防備に、骨兵たちの方へ！

「母さん！」

「っ一トリムマウ！」

牽制すべく魔弾を撃ちながら、師匠が援護を水銀メイドへと頼んだ。

すぐさまメイドの腕が溶けて、今度は鋭い刃へと変じた。骸王を守るべく襲ってきた骨兵たちを切り裂き、母までの道を開いた。

「ちーっ！ 面倒ごとばかりだな！」

舌打ちした騎士サー・ケイも、応じて剣を抜き放った。

襲い掛かってきた骨兵たちを、トリムマウと騎士サー・ケイ、そして自分の三人で打ち払う。突然のことで、老婆を含む村人たちは何の反応もできなかった。

そうした村人にも骨兵たちが刃を振るおうとして、隣から割り込

んた相手が、その頭蓋を巨大な斧で叩き割った。

「ベルサックさん」

「対立も覚悟していたが、かつての同胞が怪物に殺されるのはさすがに見かねる」

墓守が手を掲げれば、その手に靈体の鴉が召喚される。

たちまち靈体の鴉たちが骨兵を啄み、残った者はベルサックが斧を振るって叩き潰していく。いまだ骨兵たちの数は多いが、さりとてかの墓守を突破できるほどではない。それほどの思い入れはないのか、シスター・イルミアは傍観するきりだったが、矛を向ける骨兵は、面倒そうに片手で打ち払っていた。

その中で、慎重に歩み寄って、師匠が手を伸ばした。

「レディ、ご無事ですか」

母を助け起こして、声をかけたのだ。

何が起きているのか、分からぬ。

どうして、母が突然骨兵たちの方へと走り寄ったのか。どうして師匠が身を挺してまでそれを救おうとしたのか。ああいや、もっと意外なのは自分がほっとしていることだ。母が自分に対して持っている感情は、単なる信仰対象へのものだと身にしみている。それでも母が助かったことについて、こんなにも自分は安堵してしまっていた。

なんて、馬鹿らしい。

それでも、手放し難い想い。

「私、は……」

低く呟いた母に、師匠は小さくうなずいた。

「グレイ、トリムマウ。支えられるか？」

「だ、大丈夫です！」

さすがに、骸王がいなければ、自分とベルサックと騎士サー・ケ

イとで、十分骨兵たちは食い止められる。

その中で、すくと立ち上がった師匠は、

「一では、講義を続けよう」

と、声をあげたのだ。

ゆっくりと村人たちと振り返り、質問する。

「そもそも、あなたたちは骸王の正体を見たことがあったのか」

師匠の問いに、しばし老婆が口をつぐみ、皺だらけの首を横に振った。

「……そんな必要はない」

「その通りだ。信仰とはそういうものだからだ。信じればゆえの神であり、神の正体を探ることはタブーではなくても心理的な抵抗がかかる。いいや、責められたものじゃない。私もそう思い込んでいたからだ。距離をおいて、鎧をつけていれば、少々の体格差は見分けられないからな」

わざとらしく、師匠がかぶりを振った。

「……お前は、何を」

「ただの、確認ですとも」

やや硬い顔でうなずき、師匠が続ける。

「あなたがたは知り得ない事実ですが、一周目の脱出時、グレイは心神喪失状態だった。村が大騒ぎになったという情報も、あくまで騒々しい様子だったことから私が伝えたことにすぎない。そもそも、村人の多くが出払っていなければ、私が早朝に村を脱出することもできなかつた。ああ、だから一周目においては、誰も彼女の正体を確かめようとはせず、グレイが死んだと思い込んだんだ。」

それはそうだ。

だけど、師匠は何を言っているのか。

師匠は一体、何を言おうとしているのか。

骨兵を食い止めていた間に、またジジジ……ジジジ……と、奇怪な音が聞こえた。徐々に速く、連鎖していく音は、この神殿を包囲しているかにも思えた。

それだけじゃない。

いまや音だけに飽き足らず、神殿を取り巻く沼のあちこちにまで、細かくひびが入っている。明らかに自然現象と異なるのは、水面に走ったひびが、一向に閉じようとはしないことだ。

まるで、世界に走るノイズ。

「……師匠。沼が、ひびわれて」

背中を守るべく近寄り、耳打ちした言葉に、師匠もうなずいた。

「ああ。しかし、私たちとサー・ケイ以外は気づいてないようだな」

明らかにおかしい。

世界がもはや保てないとでも言わんばかりに、異常な情景が頻発しているというのに、村人もイルミアもベルサックもまるで反応しないのだ。

「私たちに共通するのは、この世界の外部から来たということだろう。つまり、世界の内部のものには、世界の修正は認識できないんじゃないかな」

「修正？」

「時間には修正力があるなんて、S Fではよく使われる言葉だがね。実際、魔術の論理においても、時間にはある種の方向性が働くんだ。ここが過去そのものでなくとも、似たような概念は導入されているんだろう」

師匠の言葉に、瞬きする。

修正力。

だとすれば、骸王の死とはやはり一周目と同じなのではないか。

「舞台の上映時間は決まっている。いかに盛大で精緻な劇であろうとも、幾度再演しようとも、むしろそれゆえにこそ、いつか終わりがやってくる。強引で、理不尽で、どうしようもない結末デウスエクスマキナが」

いつかも、その用語は聞いた気がする。

古いギリシャの劇では、行き詰った展開を打破する際、機械仕掛けから突如として現れた神が対立を仲裁し、判決を下して、物語を解決に導いたという。ゆえに、機械仕掛けの神デウスエクスマキナ。

古い劇ならばいいだろう。

もっと後の時代でも、「時よ止まれ、汝は美しい」とついに悪魔の契約を破った学者が、唐突に天使たちに救われることだって、万雷の拍手で迎えられることもある。

しかし、今ここでは、その概念はいかなる意味を持つのか。

舞台の終わりとは、どんなカタチを取るのか。

何より、この場合の神とは。

「じゃあ、師匠がここまで急いでいたのは」

「ああ、このタイミングまでしか、この舞台はない。ここでハネるんだ。だから、どうしても間に合わせる必要があった。おそらく、その瞬間を迎えた者たちだけが、この舞台で固定されているから」

骨兵たちが群がる中央へと、師匠が視線をあげた。

骸王の死体を見つめ、静かに言う。

「グレイ。骸王までの道をつくってくれ」

「はい！」

その言葉を受けて、大鎌を振り回す。地底ではないせいか、『強化』も幾分か機能を取り戻していた。トリムマウとともに、師匠の行く道を切り開く。

師匠も母を連れたまま、魔弾で牽制しつつ、ついに骸王の死体へと辿り着いた。

しばしその無残な姿を見つめ、すっと手を伸ばす。

「……何を、なさるんですか。エルメロイII世」

「見ての通りだ」

母の言葉に、師匠は毅然と言い放つ。

「一これが、彼女の正体だ！」



仮面が、取り外された。

からんからん、と石床に転がる音は、思ったよりも軽かった。しかし、そんな音に気を奪われた者は、誰ひとりとしていなかつただろう。

その内側に、自分も同様に絶句していた。

……ああ。

もちろん、自分だって思い込んでいたからだ。彼女は間違いなく精神のアーサー王だ。黒いロンゴミニアドを見ずとも、その存在 자체が自分と共鳴している。だからこそ、その内側は自分と同じ顔に間違いないと。

なのに、それは—

「母さん……」

咳きが、仮面と同様に石床に落ちた。

仮面の内側の顔は—ああ、いくらか年若くなっているようにも思えたが、見間違えるはずもない—自分の母親のものであった。

「この通りだよ」

と、師匠が言葉を添えた。

「あなたが被害者で、あなたが犯人だ。マグダレナ」

立ち尽くした母親へ、師匠は宣告したのだ。

*

……知らない。

こんな記憶は、残っていない。

だけど、心が覚えている。表層的な記憶からは消え去っていても、深く刻み込まれた情報は自分の中で息づいている。ここにいるのだと、深い水底から訴えている。あぶくのような記憶は、それでも消え去ってはいない。

もつれて腐った草と水の臭い。

けたたましいほどの、鴉の鳴き声。

あれは。

あれは。

あれは。

……誰かが、倒れている。

……自分ではない。だけど、自分によく似ている、似ていた誰か。

【どうしてだ？】

と、声が聞こえた。

【どうして……お前は……私になろうとした？】

多分、それは言葉にはなっていない思念だ。

自分のすぐそばで、自分に近しい誰かが、交わしていた思念。

多分、本来は外に漏れるようなものではない。自分がその会話を聞いていたのは、意識をほとんど失った、ある種のトランス状態だったからだろうか。だとすれば、自分が声音だと思っているものは、きっと相手の思念の特性から脳が解釈した結果なのだろう。

【ごめんなさい】

ああ、こちらは、自分が知っている声。

ずっと昔から知っている響き。

【あなたが奪うべき肉体は、あの子ですよね。そのために待ってくれたんですよね。……だけど、ごめんなさい。それだけはどうしてもできませんでした】

その穏やかな口調を、知っている。

穏やかだから怖かった。きっと自分はこの人に逆らえないと思っていたから。きっと自分はこの人の言うがままに生きていくのだと、ずっと信じていたから。

交わされた思念はそれだけ。それきり。

実際の時間にすれば、一分もなかっただろう。

そして、

「お前は……私に……」

骸王の思念のそれだけが、現実の声として零れたのだと、ようやっと自分は知った。

*

「母さん……！」

あまりにも衝撃的な現象と遭遇したとき、人の脳は外部からの情報遮断するという。

今ある情報を噛み砕くために、リソースのほとんどを使ってしまうからだ。足りなくなった領域を確保するために、感覚器官は一時的に接続を停止され、世界はフィルムの壊れた映画みたいに停止す

る。

今が、そうだった。

戦闘の最中だというのに、ほとんど自動的に骨兵の攻撃を逸らす以外のことは何もできなかった。

それでも、師匠が言葉を続ける。

「あなたが犯人だ、は正確じゃないな。かといって犯人だったと言うのも、少し違う。本来の時間において、あなたはあなたが思った通りに犯人になったというべきか」

「……私、は」

低く、母が呻いた。

仮面を剥がれたもうひとりの己を見やって、すぐに師匠へと向き直る。

「私は、じゃあ……」

「ご安心を」

師匠の声音は、なぜか優しく、柔らかかった。

「あなたは、あなたの目指したことをやってのけた。あなたの過ごしてきた年月は、その一日たりともけして無駄にはならなかった」

「…………」

師匠を見つめ返して、母は微笑した。

そんな表情もいつ以来だったか、分からぬ。

「よかった……そうなのね……そうだったのね……」

納得したように口元を押されて—そして、消えた。

綺麗さっぱり、最初からそんな人はいなかったように、母親は消えていた。

ただひとつ、古めかしい湾曲した短剣が、その代わりとばかりに

落ちて、師匠の足元に転がった。

「母さん！」

自分の叫びが、ひどく遠く聞こえた。

恐怖とも絶望とも形容し難い何かが、いまだに自分の脳のほとんどを占めていた。泣きじゃくる子供みたいな気持ちになって、自分は消滅した母の跡にしゃがみこんでいた。

「母さんは、どこに！」

「そんなの、決まっているだろう」

と、師匠が指差した。

骸王の死体を。

「こちらが彼女の体だ。どちらが本物か確定するまでは両方が存在できても、確定してしまえば、シミュレーション上で偽物が消えるしかない。ドッペルゲンガーと同じようなものだな。ああ、フェルナンド司祭が死んでいたというのも、偶然自分の死体を見つけてしまったんだろう」

どういうことだろう。

師匠の言葉は、まるで分からない。

なのに、動悸だけがひどい。あの仮面が剥がれたときからずっと、この心臓が何かを訴えている。

「エルメロイII世！」

その叫びは、村人たちの間一長である老婆から発せられたものだった。

「一体、お前は何をした！」

叫びは、詰問というよりも哀願に近かった。

目の前で起きたことを受け容れきれないのは、自分と同じ。しかし、老婆の場合はそれに千年以上の重みが加わっていた。

対して、師匠は懐からシガーケースを取り出した。

「まだ戦闘が終わってはいないが、フィンガースナップでその先端に火をつけて、唇にくわえたのである。

けして、余裕ゆえではない。きっとそれは師匠にとってのスイッチなのだろうと、麻痺したままの頭で、ぼんやりと思った。本来の性質を覆い隠し、時計塔の君主ロードたる『ロード・エルメロイII世』としての機能を起動するためのスイッチ。

「残念ながら、私は何もしていない。何もできていない。ただ、残されていた手がかりから予測しただけだ」

煙とともに師匠が吐き出した言葉に、つい自分も振り向いてしまった。

老婆もまた、そんな言葉で納得できるはずもなく、鸚鵡返しに尋ねたのである。

「予想が、ついていただと？」

「あなた方はグレイをアーサー王の肉体だと言ったな。つまり、骸王が精神のアーサー王であるのは承知していて、まだ魂が足りないことも分かった上で、この場でそのふたつを融合させるつもりだったんだろう。しかし、その儀式はすでにねじまげられていた」

誰もが、打ちのめされていた。

衝撃を受けていない—少なくともそのように見えるのは、そんな機能を持たないトリムマウと骨兵、そして表情を読みようがない騎士ぐらいだろうか。

そのほかは、探偵の推理に聞き入る被疑者たちのごとく、指一本たりとも動かせなかった。それだけの意味が、師匠の言葉と、骸王の仮面の内側にはあった。

「儀式を……ねじまげただと……」

老婆の声は、あまりにも切実だった。

彼女の人生はこのために捧げられていたのかもしれない。彼女だけではない。彼女に連なる多くの人々の人生が、この一点のために

注がれていた。その執念、その情熱、その憧れ、その歴史、その伝統、どれだけの命が自らの夢よりも、この儀式を優先したのだろう。

そのすべてが潰えた結果を、今、自分たちは聞いている。

「本来、サー・ケイと同じく、骸王には貌かおはなかったんだろう。精神しか持たない骸王は、サー・ケイ同様に不完全だ」

曖昧な顔の騎士は、それはそれで必然であったのか。

師匠の言葉に、否定も肯定も返さず、騎士は黙って話を聞いている。

「だから、この村にはそれらを融合させるための儀式も残っていたはずだ。とりわけ、グレイのように本来の精神と魂を持つ肉体から、それらを引き剥がすための礼装や術式が」

足元に残った短剣を、師匠が拾い上げる。

その短剣が、あるいは礼装だったのだろうか。

目を細めて、しばし観察してから、師匠は言葉を続けた。

「だが、そこに、誰かが割り込んだ。ひとまず、『彼』と定義しようか。『彼』は以前からこの村に目をつけていた。肉体と精神と魂の三要素を詳しく知る魔術師だ」

誰のことかなど、問うまでもない。

ドクター・ハートレス。現ノ代一魔リ術ッ科ジの前学部長であれば、その知識は折り紙つきだろう。

「おそらく、『彼』は村人のひとりをそそのかした」

ジジ、ジジ、と空間にまた異常なノイズが走った。

明らかに、頻度と範囲が拡大している。それでいて、自分たち以外に気づいた様子はない。この異常事態はどこまで勢いを増していくのか。いいや、限度などないのではないか。世界すべてを覆い尽くすまで、

「……師匠……ノイズが、広がっていきます」

「答えはこの先だ」

と、やや緊張を孕んだ声が聞こえた。

つう、とそのこめかみに汗が流れた。けして師匠も安穩とした状況と考えてはいない。むしろその逆で、このタイミングにすべてをベットしているのだと感じられた。

—『真実ならぬ虚構を探すがいい。君が解くべき虚構の謎を追い求めよ。それこそ、君が辿り着くための唯一の手段だ、ロード・エルメロイII世』

ズエピアの残した謎かけ。

この謎解きに、今師匠は挑んでいるのだと、なぜだか確信できた。

「このとき、『彼』には村側の協力者を得る必要があった。もとよりあの村には、いくつも魔術的な警報が設置されている。『彼』にしたところで、そのすべてを誤ご魔ま化かして、情報を得るのは困難だったのだろう。協力者を求めるのは自然な結果といえる」

ハートレスは、いつも闇から闇に事件を葬るように動いていると、師匠は言った。そうした彼にしてみれば、密やかに協力者を見つけるのも慣れた行動だったかもしれない。

「それによって、彼はこの村の術式についてのヒントを得た。そして、情報の提供者は彼から、アーサー王復活の術式に介入するための手段を受け取った」

師匠の言葉に、老婆が眉間の皺をなおさらに深くする。

「ならば、情報の提供者が、マグダレナだというのか」

「ほかにいまい」

師匠の断言に、老婆のこめかみへ青筋が立った。

「だが、マグダレナは魔術師でもなんでもない。グレイと違い、アーサー王の肉体にもなりきれなかつたできそこないだ！ そんな人間が少々外部の魔術師の力を借りた程度で、どうやって儀式の術式に介入などできるというのだ！」

「彼女はもともと、儀式の中核人物への、重大な介入手段を持っていた」

「……グレイのことか？」

眉をひそめた老婆から、師匠がこちらへと視線を移す。

「……グレイ。ただ魔力を練り、術式を駆動する行為だけではなく、食事や睡眠、時には排便なども加味した生活のひとつひとつが魔術などの神秘につながると、君のいる場で話したことはなかったかな」

思い出した。

双貌塔のときのことだ。

自分だって、一度は思い起こしていたじゃないか。

一父が亡くなった後の母はなおさらこちらへの生活管理に熱心になり、睡眠や礼拝はもちろんのこと、自分がものを食べる順番や衣服の着方にまで気を遣うようになっていたので、周囲も自然とそれに影響されていったのだ、と。

こうした生活はある種の魔術儀式だと、かつての師匠は言ってなかつたか。

生活という小宇宙ミクロ・コスモスから、実際に世界を変革する大宇宙マクロ・コスモスへの照応。それこそが、真なる魔術のひとつなのだと。ちっぽけな人間の内側に、地脈の流れや惑星の運行までも取り入れることが、大いなる神秘を可能にするのだと。

「もともと、君の母にはアーサー王に近い因子があった。君の母であり、この村が育んできた因子なのだから当然だろう。ああ、つまりこの村 자체がそうした因子を活発化させるための、術式の影響下にあるはずだ。

だから、彼が教えた術式への介入は、方法自体は単純だ。初めての成功作であり、最も村の術式と親和性の高い君の波長と、母親の波長を同調させることで、術式に直接介入するだけの経パ路スをつくりあげたんだ」

「拙……に、同調……？」

「そうだ。母親は君の食事、君の睡眠、君の生活すべてに関わることで、巧みに自分の波長と同調させ、同時にその波長を用いて、この村の術式へと介入していった」

フラットがやっていることと、多分それは近い。

魔術への介入。技術面といえば、もっと高度なものなのだろうか。

「方法自体は単純と言ったが、もちろん実践はたやすくない。むしろ、本当の魔術師ですら音を上げるほどに、困難で根気の必要な行為だろう。すでに変異している娘と自分で波長を合わせるためにには、わずかな失敗も許されない。食事ならば、数グラムの変化でも術式の精度に響くだろうし、咀嚼する時間や回数までも細かく管理する必要があるだろう。しかも、それが毎日続く。相手に事情を話しての協力も願えないとなれば、これは空恐ろしいほどの精神力を必要とするに違いない」

「…………」

身体が、小刻みに震えていた。

師匠の言っていることは耳を素通りして、自分の頭ではろくに理解できない。なのに、どうしようもなく真実だと分かってしまう。いままで母に対して抱いてきた思いが、皮膚をめくりあげられるような痛みとともに裏返っていく。

「だが、彼女は成功した。成功してしまった。あとはハートレスのウェビングに書かれていた術式通りだ。こちらは極めて複雑な術式だが、母親による同調さえ成功していれば、実行自体は難しくな

い。

結果として、不安定な精神のアーサー王にはふたつのパラメータが組み込まれることになった。精神のアーサー王としてのパラメータ、そして君の母親のパラメータ。もちろん表面に出てているのはアーサー王の方だろうが、その裏には近似である君の母親のパラメータも潜ませていた。おそらくは骸王自身ギリギリまで気づかなかっただろうがね」

最後にハートレスが村に接近したのは、その術式を実行するためだったのだろうか。

さきほど拾った、古めかしい短剣を持ち上げて、師匠は老婆へと尋ねた。

「この短剣は、儀式のための礼装ですか？」

「……そのとおりだ。肉体から魂と精神を剥ぎ落とす礼装、侵刃黄金イロウシェン」

「ならば、答えは簡単です。一周目におけるマグダレナはこの場に先んじて、娘の代わりに自分の身体を刺した。精神と魂が剥がれた肉体が残った結果、不安定なアーサー王の精神はその肉体へと引っ張られる。……ただし、マグダレナはその直前に、普通のナイフで自分の胸をついていたのでしょう。いかなるアーサー王といえど、引っ張られた肉体がすでに死んでいてはいかんともしがたい。そのまま死ぬしかないでしょう」

「……な」

それきりで、老婆が絶句する。周囲の村人たちはどこまで話を理解しているのか、ただ老婆とともに動搖するきりだ。一周目や二周目といった概念を、彼らが理解できるはずもないのだから、当然のことではある。

いいや、実のところ、彼らの表情が、もう自分にはよく認識できない。

ジジジ、ジジジ……と、世界が焼ける音は、もはや騒音のごときレベルに達していたからだ。ばかりか、沼や神殿に走っていたひびは、いまや何人かの村人たちの身体にも走っていた。

「グレイ。このノイズ、君にも見えているんだったな？」

「……は、はい」

密やかに師匠が囁いた問いに、うなずく。

「アトラス院の院長なら、この舞台が矛盾に気づいたとか言うところか。矛盾に耐えられなくなれば、もはや演算も意味をなさない。土台が崩れてるのだから、一からやりなおすしかない。だから、崩壊より先にここに来る必要があった。

ああ、この再演は実によくできていた。私でさえ過去そのものなのではないかと、何度か考えてしまったほどだ。しかし、やはり違う。過去そのものでない以上、誤魔化しのきかない部分がある。この場合、それが死であったということだ」

「……死が、誤魔化せない……」

一周目で、フェルナンド司祭が死んだこと。

一周目で、骸王が—あるいはそれに肉体を与えた自分の母が、死んだこと。

その時間と事実だけは、いかにこれが再演であっても誤魔化せないということか。だから、唐突にフェルナンド司祭の死体が現れ、骸王は自分の母の肉体を得た上で死んでしまった。あるいは死の直前、誰もが自分のドッペルゲンガーを見たのかもしれない。

「では、結論に入ろう」

と、師匠がやや語気を強くする。

「さきほども話したが、そもそもの話として、現実世界において精神はそれだけで長く原型を保つことができない。サー・ケイがカタチを保っていられるのは、本体のアッドがあってこそで、それだって普通に考えれば丸一日も保つようなものじゃない。……なのに、骸王は自分が目覚めたのは、グレイがアーサー王と同じ肉体に変化し始めたのと同じ、十年前からだと話していた」

そこで言葉を区切って、師匠は瞳を横に滑らせた。

「ならば、あなたはどうやって存在を維持していたのか」

「…………」

「……おい、どういうこったそれは」

新たな人物に、騎士サー・ケイが声をあげた。

いつのまにか、骸王の死体—死体だったはずのモノが、立ち上がっていたのだ。

だが、それは本当に、以前と同じ骸王だったろうか。

静かにうつむいた姿は、一切の生気を感じさせない。母親と同じ顔をしていたはずなのに、そのつくりは何ひとつ変わっていないのに、もはや同じものとは思われない。

殺されたはずの被害者が生きていた……といえば、よくある推理小説の一幕にも思えたが、そんなものとはまったく異なることは明らかだった。

「骸王一いや、もはやこの名はふさわしくあるまい。再起動したあなたはマグダレナでもなく、精神のアーサー王でもなく、地下の大マ源ナを大量に吸い上げ、その演算をしていた本体だ」

と、師匠が喝破する。

「あなたは、ロゴスリアクトだ」

アトラス院の、七大兵器。

さすがに、ここでその名が出るなどと思わず、アッドの記憶を受け継いでるはずの騎士サー・ケイも動搖の気配を隠さなかった。

「ああ？ アトラス院だかの兵器が、人だって？」

「少し違う。ロゴスリアクト自身の、この世界における化身アヴァターが正確なところか」

佇んだモノを睨みつけながら、師匠が言う。

「なるほど、アトラス院の七大兵器であれば、アーサー王の精神をコピーすることだってかなうだろう。その程度は、本来の機能ならざる余剰でもやってのけるはずだ。なにしろ、人類を滅びから救うためにつくられながら、その結果世界を滅ぼすに至ってしまったとかいう代物だからな」

「…………」

骸王は、骸王だったモノは、口を開かない。

いつのまにか、その顔は騎士サー・ケイと同じく、茫と霞んでいる。精神のアーサー王の貌かおなのか、それともロゴスリアクトの化身としての貌かおなのか。

「そうだ。ここは、過去なんかじゃない。繰り返しループでもない。だからこそ、骸王の死が確定するタイミングまでしか、再演はかなわない。死を起点かつ終点として、過去のごとくに繰り返す世界となれば、その答えは瞭然だ」

ひとつ、息を吸う。

「ここは墓だ」

と、師匠が告げた。

「ここは墓地だ。ロゴスリアクトによって演算された、極小の死後の世界だ！」

喝破が、神殿へと響き渡る。

その意味は、自分にも完全には理解できない。しかし、声が轟くと、それに応じたかのように、ノイズがさらに勢いを増したのだ。

もはや、耳をつんざくほどだ。

視界も引き裂かれて、沼も神殿も、居並ぶ村人たちも同様に、傷だらけの景色としか見えない。その傷に指を突き刺せば、何もかもを殺してしまえるのではないだろうか。

「聞いているな！」

と、師匠は叫んだ。

高らかに、宙ソラの向こう側まで届けとばかりに。

「聞いているな、アトラス院よ！」

騒々しいノイズよりもさらに強く、その声音は吹き抜ける。

「謎は解けた。いまや夏は終わった！ さあ姿を現すがいい、ズエピア・エルトナム・アトラシア！」

その言葉こそが、世界を切り裂いたようにも思えた。

一瞬で、すべてが搔き消えた。

沼も、神殿も、黒い聖母も、老婆も、村人も、ベルサックも、イルミアも。

そして。

ある意味では夜明けにふさわしく、闇のヴェールを落としたかのように、ひどく自然に、その男は佇んでいた。

そこは、奇妙な空間だった。

多くの水晶球が浮かび上がり、それ以外は何も存在しない。ぼんやりとした薄闇で、地面の感触も、土とも金属とも樹脂ともつかない不思議なものだ。

視界の変化に動搖を抑え込んでいると、高らかな拍手が空間にこだましたのである。

「おめでとう。辿り着いたな。ロード・エルメロイII世」

そこに佇んでいたのは、瞼を閉じた男だった。

年齢不詳というよりも、そんな概念を超越してしまったかのような生物だった。いや生物というのって正しくなかったかもしれない。死徒という名称は、そうした活動から遠く離れたがゆえのものだろう。

死の徒ともがら。

—『お前が殺すのは、アレだけだ』

かつて墓守として、ベルサックから言われたことが、はたしてこの相手にも適用されるのかどうか。死徒とは、死靈と比較してもよいものなのか。

周囲からは、何もかもが消え失せていた。

地底から浮かび上がった神殿も、死せる骸王も、ベルサックもイルミアもトリムマウも、おばば様を含む村の人々も—自分の母親も。

いや、完全に消えたのではない。

それらの光景は、中空に浮かんだ水晶球に映っている。

いくつも浮かんだそれらの水晶球は、少しずつ違う角度から、少し前まで自分たちがいた場所を映し出しており、しかも映し出された全員が、ぴたりと動きを停止させていた。その異様な光景は、まるでこれまでの苦難が、映画で切り取られた数シーンでしかなかつたかのように思わせた。

「やれやれ、オレはこっちに引っ張り込まれたか、まあ、本体がアッドなんだから当然っちゃ当然だが、いささかタダ働きがすぎるんじゃないいか？ 昔なら所領のひとつももらっていいぐらいだぞ。ああいや、そんなものをもらっても、女の尻が追いかけられなくなるだけだがな」

うんざりとばかりに、べらべらと喋る騎士サー・ケイが残っていることに、ついほっとして、大鎌を握りしめてしまった。

そして、師匠。

こちらは、ずっと目の前の相手から視線を離さなかった。

「……ズエピア・エルトナム・アトラシア。あなたが出した謎解きは、今の答えで正解ということか？」

「そう考えてもらって問題ない」

鷹揚に、ズエピアがうなずいた。

「現代なら、ゲームクリアとでも言えばいいか。君は見事ロゴスリアクトに接触し、ロゴスリアクトの作り上げた謎を解くことで、あの世界から自らを排出させた。ああ、ロゴスリアクト本体である骸王はともかく、世界のつくりを解いてしまった外部の人間を、再演算にいりてはパラドクスが生じるからね」

「……だから、あなたもあの世界にはいなかった」

「原則的にはその通りだ」

ズエピアが認める。

ふたりのそうした会話を耳にしつつ、横合いから囁いた。

「師匠、トリムマウさんは……」

「あのトリムマウは、あくまで一周目でライネスが残していったトリムマウをロゴスリアクトが再演算したものだ。現実でのトリムマウは、今頃ライネスの世話をして紅茶でも淹れている頃だろう」

師匠の言葉に、ほっと息をつく。

だが、だとしたらベルサックやイルミアはどうなっているのだろう。もともと、この村に来たとき、人々の影は消え失せていた。

そして、「すでに一周目で死んでいた」と言われたフェルナンド司祭と、母親は……。

考えているところで、足音がした。

「教授！」

「先生！」

口々に言って、金髪の少年ふたりが駆け寄ってきたのだ。

フラットと、スヴィンであった。

「教授ならやってくれると思ってました！」

「うるさいぞフラット！　だいたい先生に間違いがあるはずないだろう！　そんな心配自体が失礼というものだ！　だいたい先生ならお前が余計なことをしなくて、この程度完璧に切り抜けたに決まってるだろう！」

「ああ！　でも教授を助けなきゃって言い出したのはル・シアンくんでしょ！　雨の日に捨てられた子犬みたいな顔してたし！」

「そ、それは先生の、魔術師たるもの常に保険を掛けておけ、といふ教えにのっとっただけだ！　というか顔は関係ない！」

きゃんきゃんと噛みつき出したふたりを見やり、ズエピアはすました顔で口を開いた。

「いい生徒をお持ちのようだ。羨ましい」

「ええ、そう思ってます」

しれっと師匠が言ってのける。

これで、場の全員だった。

師匠と、自分と、騎士サー・ケイと、少年ふたり。

そして、ズエピア。

「では、答えに辿り着いた者の権利として、私に何を求めるのかな、ロード・エルメロイII世。たとえば、ハートレスの行方かな？ それとも聖杯戦争について、アトラス院が持ちうる知識を開陳してほしいかね？」

ズエピアが問う。

あの二周目へ自分たちを送り出したアトラス院の院長の口調は、心底からこちらを祝福していると言わんばかりに、優しげですらあった。

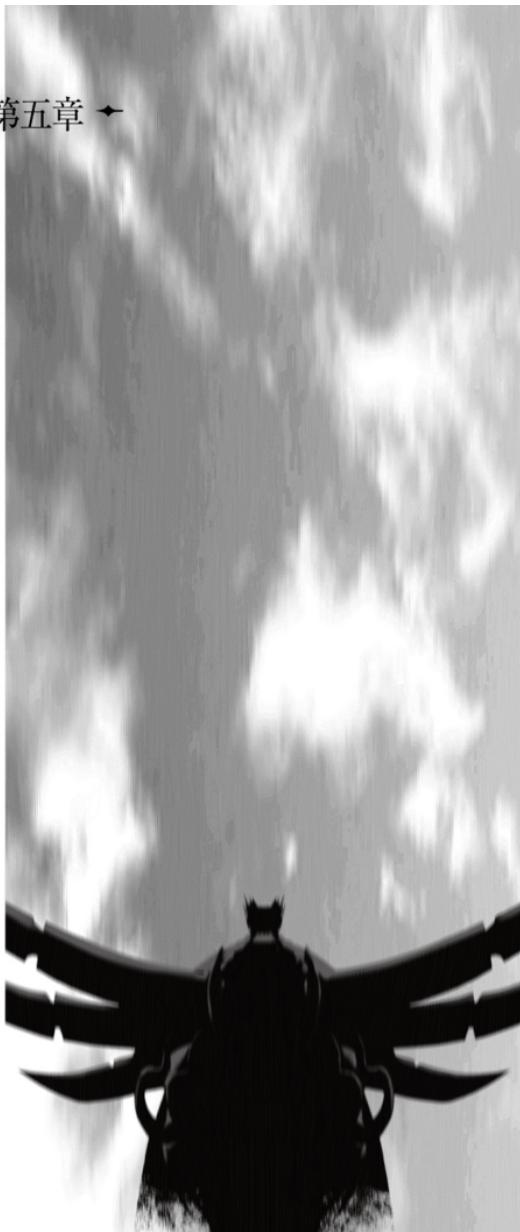
しかし、

「……いいや」

と、師匠が否定したのだ。

「こんなものは、まだなんにも辿り着いてないよ。私が辿り着くべき謎はこの先だ。ズエピア・エルトナム・アトラシア。アトラス院の、古き偉大な王よ」

◆ 第五章 ◆



一瞬、空気が変質したかに思えた。

師匠とズエピアの間で、ぎりぎりと音を立てる錯覚さえした。

「……へえ」

面白そうに、騎士サー・ケイが呟く。

喉が痛い。

ひりつくようなこの痛みは、緊張のせいだ。

ごく稀に、師匠は好戦的な表情を見せる。普段あれだけ慎重で、むしろ臆病ですらあるのに、差し迫った局面においては、むしろそれが裏返って挑発的な言動となるのだ。

たとえば、あの冠位の人形師を相手取ったとき。

あるいは、現代魔術科の前学部長ハートレスを敵に回したときもそうだった。

相手を動搖させるためとか、事態を探るためには賭けに出なければならないとか、そんな理由もあるだろう。だけど、それだけじゃない。ひょっとしたら本人はそう言うかもしれないが、けしてすべてではない。

きっと……それは、師匠の本来の姿でもあるのだ。

無茶で無謀で、向こう見ずで血氣盛んで、そんな若い魔術師の姿を、どうしても重ねてしまう。自分はそんな時代の師匠を知らないはずなのに、それでも想像してしまう。第四次聖杯戦争で、イスカンダルという英靈とともにあった頃の、師匠の背中を。

多分、師匠にとっての青春を。

ズエピアは少し間をおいて、あらためて尋ねる。

「……謎は、この先と言ったか」

「その通りです」

と、師匠は言い切った。

「だいたい言葉遊びをしているわけじゃない。あの二周目が過去でなくて墓だからと言っただけで、何の意味があると言うんです。本質はその先だ。ええ、墓だというのなら、誰の墓かこそが重大でしょう」

一瞬、ズエピアが硬直したかに見えた。

気のせいかもしれない。

しかし、そこにつけいるように、師匠はこう続けたのだ。

「なのに、なぜ、あなたは私たちの権利などと早々に切り出したんですか」

「そんなに不思議かな」

「ええ。だって、あなたは不要なことをなさる方ではない。私たちに理解不能なことも話しますが、それは単に現在の私たちでは、受け容れるだけの器が足りないだけだ。そんなあなたが、どうしてこの村にいるんですか」

「おかしいかね？」

「前からおかしいと思ってました。以前仰っていた通り、アトラス院の技術をもってすれば、世界のどこにいても指示が出せるでしょう。そして、ほかの構成員ならともかく、院長であるあなたがアトラス院のルールに従って閉じこもっている必要はない」

以前、ズエピア自身が言っていたことをなぞる。

「ですが、それはわざわざこの村にやってくる理由にはならない」

(……あ)

確かに、できるからといって、やる道理はない。

この村に七大兵器のひとつが秘められているのが本当だとして、

それはこのタイミングで院長自らが乗り出す理由にはならないだろう。まして、一周目で自分が故郷を出てから、おおよそ半年もの間、村の近くに在する必要があるとは思えない。

「いえ、そもそもこの事件自体があまりに迂遠だ。本当にあなたは、私たちをあの二周目に送り出したんですか」

二周目へと送り出された、直前の経緯を思い出す。

自分たちはハートレスの手がかりを求めて、離れていた故郷へと舞い戻り、誰もいなくなった村でズエピアに出会った。

—『ああ、起動したな。この村には、アトラスの兵器があるんだ』

—『アトラスの七大兵器。かの性質は再演。私にとっても馴染み深いものだ。正式名はないが、ロゴスリアクトなどと呼んでいる』

あれは、あくまで説明だった。

今考えれば、自分たちがあの二周目に陥る前の、最低限の準備を整えてくれたのではないだろうか。

「あれは、あなた自身の行為ではない。あなたは単に、そうなると知っていただけだ」

「……なるほど」

「ですが、この話だけを煮詰めても、おそらくあなたは認めないでしょう。ですので、先に、一周目について整理させていただきます。—サー・ケイ」

「おっと、まさかここで呼びか」

師匠の言葉に、騎士サー・ケイがわざとらしく肩をすくめた。

「魔術師同士のくだらないやりとりに、まさかオレがお呼ばれするとは思わなかった。可能なら、今からでもさっさと退散したいとこ

るだが、一体どんなご用件かな？」

「おそらく間違いないだろうが、念のため、確認しておきたい。君はアッドの記憶を受け継いでるんだったな」

「ああ、一応な。おかげで生前のオレとはいささか違ってるだろうが」

「だったら、一周目の三日目で、私がグレイと会った後、フェルナンド司祭がどうしていたか覚えているか？」

「……ふむ」

顎のあたりに触れて、騎士はこう告げた。

「フェルナンド司祭なら、確か夕方に会ったな。それから、オレ――というかアッドとグレイは、いつも通り床に就いた。まああのいつも通りの食事に、睡眠薬なりが仕込まれていたんだろう」

「だったら、やはり私たちが介入しなかった一周目では、あの神殿がもともとの仕掛け通りに浮き上がり、骸王と骨兵も地上に出てきたと考えるべきだろう。フェルナンド司祭もその際に戦ってやられたと見るべきだ」

ベルサックが見た死体はそういうことだったのか。

おそらく、当時のフェルナンド司祭は二周目ほどは用心していなかったのだろう。

二周目で彼らも地底に下りて、骸王と戦うことになったのは、自分たちの行動が契機になったものだ。でなければ、異常事態を感知して沼を監視しに行ったとしても、あんな怪物が出てくるとまでは想像すまい。結果として、地底では対応できていた骨兵にやられたとしても、不思議はない。

「シスター・イルミアの死体が近くになかったあたりからすると、彼女はやられずに立ち回ったのかもしれないが、いずれにせよ、骸王と村人たちの接触をとどめることはかなわなかった」

ひとつずつ、師匠が当時の事実関係を解きほぐしていく。

当時の師匠が気づかず、教会側が異常を察したのは、師匠の感知

能力の低さもあるだろうが、やはり普段の備えが大きい。もともと村の監視のために送られた人材なのだから、そのための仕掛けも施していたことだろう。

「残る真実は、さきほども話した通りだ。精神のアーサー王—骸王の肉体となる直前、グレイの母上が自殺した。骸王もその死に引きずられた。それだけのことだ。おそらく、村人たちより先行していたのだろう。君を近くに隠した上で、実行し、あの仮面をかぶった。仮面が骸王のものか、あらかじめ偽装としてつくっていたのかはわからないが」

アーサー王を信仰している村人や老婆は、その仮面を剥がすことを考えもしなかった。

「直前に、母上とベルサックとは何らかの打ち合わせをしていたのだろう。その結果、ベルサックは隠れていた君だけを連れ出すことに成功した。とはいえ、状況からすると、当時のベルサックも細かいところまでは知らなかったのだろうな。話していたのは、グレイを助けるために手伝ってくれ、というところまでか」

そうやって、ベルサックが師匠に自分を託してくれた。

後は、もう知っている通りの経緯だ。

ロンドンに行ってからの自分はしばらく時間がかかりつつも立ち直り、師匠やエルメロイ教室のクラスメイトと過ごしつつ、いくつもの事件に関わることとなった。

「……母……さん……」

胸を締め付けられるようだった。

さきほど母が犯人だったと聞かされたときも、自分の知っていた事実が裏返る感覚に堪えられなかつたのに、改めて整理されると、心臓が焼けつくように痛んだ。

「……なんで、そんなことを」

ホワイダニット。

どうして、そんなことが起きたのか。なんの意味もなく、彼女が命を捨ててしまったのか。彼女だって、あんなにもアーサー王の復

活を待ち望んでいた村人たちのひとりではなかつたのか。

「そんなのは決まつてる」

対して。

師匠は、考えられる限り最も陳腐な—そして、どうしても自分には至れなかつた答えを返した。

「君を愛していたからだろう、グレイ」

当たり前のように。

けして得られなかつたはずのものを、師匠が提示する。

いや、それも嘘だ。

かつて、この顔に自分がなりはてる前は知つていたはずだ。

世界は明るかた。星は輝いていた。鳥の歌は美しく、自分たちは何度も笑いあつていたはずだ。どうして、そのすべてを忘れようとしていたのだろう。どんなに否定したところで、自分の内側から消え去つたりはしないものばかりだったというのに。

そして、自分は忘れても、母は忘れないなかつた。

ずっとずっと、忘れなかつた。

「拙だけは……母の理由を分かってあげなければいけなかつたのに……」

「同時に、母上は、君にだけは悟られるわけにいかなかつた」

師匠が言う。

「君が悟つてしまえば、それは態度としてたちまち村に伝わり、場合によつては君の身柄を奪われることにもなつたろう。だからこそ、母上は村でも一番熱心に君を崇めるふりをした。そうでなくては、肉体から精神と魂を引き剥がすとかいう礼装を預かることなんてかなわなかつただろう。だからこそ、彼女は村でも最も熱心な信者でなければならなかつた。村の長たる老婆でも、一瞬も疑わないほどに」

あまりにも長過ぎる、偽装工作。

どんな決意があれば、そんなことができるのだろう。どんな覚悟をしていれば、そんな時間に耐え抜けるのだろう。今の自分にだって、それほどの時間の重みが想像できないというのに。

「だから、私たちは理由を知らねばならない」

師匠の声音は、優しくはない。

厳しい真実を突きつける時、人の声は優しいだけにはなれない。受け容れざるを得ないのだと迫るからこそ、どうしようもない酷薄さを帯びる。

今の師匠が、それだった。

「でなければ、大切なものを見落とすからだ。あなたについてだって、それは変わらないんだ。ズエピア」

そう言って、アトラス院の鍊金術師へと向き直った。

「私にも、こうした理由があると」

「もちろんです」

と、師匠がうなずく。

「では、どのような理屈が？」

「そんなの、ひとつしかないでしょう」

それから、師匠はこう続けたのだ。

「アトラスの契約です」

一瞬、背後でスヴィンが身を硬ばらせるのを感じた。

優等生である彼は耳にしているのだろう。あるいは、ズエピアと何か関連することを話しているのかもしれない。自分も、以前ズエピアと会ったときの、師匠とのやりとりを思い出していた。

—「世界に七枚ばらまかれたという、契約書のことか」

—「そう、七枚の契約書だ。この契約を発動した対象に対して、アトラス院は必ずや協力しなければならない」

「アトラス院が残した七枚の契約書。これをもとにした契約には、アトラス院は協力せざるを得ないと、以前も話しましたね。あなたがこんな迂遠で非効率的なやりかたを取るとしたら、この契約に抵触しないためしかりえない」

「抵触しない、ため？」

拙が咳くと、師匠は小さくうなずいた。

「契約で何らかの目的があるなら、迂遠な方法とは正反対だ。最短最速で達成してしまえばいい。私たちを排除するぐらいは、アトラス院の力をもってすれば難しくあるまい。しかし、そうしなかったということは、ズエピア氏は私たちを敵に回そうと思ってないが、単純に協力できる状況ではない……となる。だから、彼は果てしない計算の末、最低限の接触と会話で、たまたま私たちの行動と自分の目的が一致する形へと誘導してきた」

「……ふむ」

と、ズエピアが片眉を動かした。

「およそ推理とは言い難いな。推測に推測を重ねるのはあまり上策じゃない。脚本としては質が落ちるぞ？」

「あいにく私は探偵ではありません。……ただ、今回の場合は、ひとつ傍証も」

「傍証？」

「言いましたよ。あれが誰の墓かと」

ぐるりと、師匠の話が戻ってきた。

一旦はまるきり違う話題に変化していったようなのに、突然核心へと帰ってくる一意図しているのかしていないのか分からないが、

師匠の得意のパターンだった。

「そして、そんなのはもう決まっている。誰の死が確定した段階で、あの空間にノイズが走ったかを考えれば一目瞭然だ。あれは骸王の墓であり、グレイの母上の墓であり、ロゴスリアクトの墓だ」

ゆっくりと、獲物を追い詰めるように、師匠が言う。

「ああ、もちろんロゴスリアクトが死ぬはずがない。道具は道具であり、生きてはいない。百年無事だった道具が妖怪になるだとか、それを避けるために先に燃やしてしまうとか、アニミズムに関連する宗教習慣も各地にあるが、今の話はそれとは異なる」

「…………」

「なぜなら、骸王—精神のアーサー王を再現していたのはロゴスリアクトでしょう。グレイの母上が骸王と合一しても、そのことは変わらない。そして、骸王の死はロゴスリアクトに通常とは異なる情報をもたらした」

沈黙したままのズエピアに、師匠が淡々と話していく。

「つまり、けして死なないはずのロゴスリアクトに『死』という情報が与えられた」

死の概念がないものに、死を付与する。

そんな奇怪な現象が、あの場では起きていたのか。

「ですが、やはり道具であるゆえ、ロゴスリアクトは死なない。死なないのに死んでいる。その矛盾はかの兵器にありえない負荷を与えた。人類にしてみればほぼ無限ともとれる計算能力がその矛盾を解明するために挑み、同時にその計算能力すらもが死に続けたのだ。その果てに待つものはなんです？ ええ、アトラス院の七大兵器は、そのひとつずつが人類を滅ぼすに足りるといいます。そのロゴスリアクトが誤作動したならば、結果はどうなる？」

その言葉に、自分はぱちぱちと瞬きをした。

まったく想像が追いつかなかったのだ。ただ、魔術師にとっては重大な事項だったのか、スヴィンはもちろん、あのフラットさえも「わあ」と、思いがけない掘り出し物のゲームでも見つけたみたい

な叫びをあげて、口元を押された。ただ、騎士サー・ケイだけは面倒臭そうに欠伸を噛み殺していた。

いや。

ひとつだけ、自分にも心当たりがあったのだ。

「……じゃあ、拙たちが村に戻ってきたとき、人がいなくなっていたのは」

「ロゴスリアクトの誤作動に巻き込まれたと見るのが順当だろう」

師匠の言葉に、唾を飲み込む。

人類を滅ぼすに足ると言われる兵器の誤作動。ならば、その現象が村ひとつでおさまっている方が、僕倖なのではないか？

「……だから、あなたはたったひとりで、この村を見守っていたのでしょう」

と、師匠はズエピアに告げたのだ。

「え？」

思わず間抜けな声をあげた自分を気にせず、師匠はさらに言葉を紡ぐ。

「ひょっとしたら、たったひとりで世界を守っていた。そうでしょうとも。あなたはズエピアという個人の鍊金術師である以前に、そして強大な死徒である以前に、アトラス院の院長なのですから。いかがですか？ ここまで迫れば、追認なさっても、契約を破ったことにはならないのでは？」

「……いいね、ロード・エルメロイII世。君は本当に面白い」

ズエピアは目を閉じたまま、くっくと肩を揺らした。

「君の推察どおり、契約によってアトラス院はロゴスリアクトを貸与している。アーサー王が復活するまでという契約期間が終わるか達成が不可能になるまでは、監視はできても手出しへはできない。たとえ誤作動が起きたとしても同様だ」

ああ、これもホワイダニットだ。どうして、彼がこうしなければならなかつたのか。どうしてこの村で、ただひとり待つていなければならなかつたのか。因果の糸をたどつていけば、必然的に辿り着く果て。

でも、それだとおかしい。

やはり、理屈に合わない。

「……なぜ、そんなことを？ 別に、ロゴスリアクトを見守るのは契約じゃないのでは？」

つい、自分も訊いてしまつた。

無視されても仕方ないと思っていたが、丁寧にズエピアは返した。

「君の師が言つただろう。それが、アトラス院の義務だからだ。私たちは人類を維持するという義務を、自らに課している。可能な限り遠くまで、可能な限り彼方まで。そのためにこそ、我らが院の鍊金術師たちは何千年もの間、自らを捧げ続けてきた」

ズエピアの言葉は、とても真摯だった。

時計塔と同じ魔術協会でありながら、まるで異なつてゐる。限りなく個人主義の時計塔と、個人の欲を捨て去つたかのようなアトラス院。そのどちらが人間として正しいのだろう。同時に、契約についての、人間的というよりもおよそ機械的に思える判断が、自分は恐ろしくてならなかつた。

「今回の場合、私たちが手を出せるとしたら、契約達成が不可能になつたと判断できるときだ。それまでには……そうだな、おおよそウェールズの土地の半分ほどは、同様の奇禍に襲われてゐることだろう。私の監視は正確にそのタイミングを見届けるためだよ」

さらりと、そんなことを言う。

先の印象通り、判断のどこにも感情らしきものは含まれていなかつた。鉄のごとき、冷たく虚しいまでの裁定が、ヒトのカタチをしているのだった。

「……ロゴスリアクトを壊すべきだと？」

「いいいや、そんなことは言っていないし、契約上言う権利もない。君が至った推測について、当然の事実を確認したまでだ、君主ロード。別段ウェールズごとき吹き飛ぼうと、私がどうしたものではない。人の抑止力も星の抑止力も、その程度では働くまい」

そこで突然言葉を切って、ズエピアが空を振り仰いだのだ。

といっても、この空間に本物の空はない。どこまでも乳白色のぼんやりした天蓋が広がっているだけだ。

その天蓋に、びきりとひびが入ったのである。

「え」

あのノイズと非なる、しかし同質の響き。

しかし、二周目ならざるこの空間で、その音が鳴り渡る理由とは。

「一申し訳ないが、君たちに警告しなければならない」

と、ズエピアが改めて口を開いた。

「今も誤作動しているロゴスリアクトだが、どうやら向こうからこちらへ割り込むべく、干渉ハッキングをかけてきている」

「向こうから？」

「ここは未明領域だし、今まで積極的な行動に出たことなどなかったのだがね。どうやら、彼女は一いまや彼女となっているアレは、思っていた以上に、君たちにご執心のようだ。これも同一化した相手の影響ということか」

何かの研究結果のように、ズエピアは淡々と呟いた。

「ああ。いけすかない脚本家の手のひらで弄ばれてると思うなら、帰還するがいい。君は謎を解いたのだ。そのための扉は開こう。なんなら先に言ったとおり、君の好きな知識も開陳してやろうとも。アレの誤作動に巻き込まれない程度の時間は稼げるだろうし、時計塔の在するロンドンまで被害が広がることはありえまいよ」

「もうひとつの手段については？」

「……何のことかな？」

一瞬返答が遅れたズエピアへ、師匠はかすかに目を細めた。

「そちらは契約に抵触するということですね。そうであろうとは思います。もしもその手段が可能だと語ったならば、たまたまなどではなく、はっきりとロゴスリアクトへの介入に、我々を誘導したことになりますから。ですが、逆に否定されないということは、不可能でもないということです」

そう言って、こちらへと振り向いた。

「師匠？」

「グレイ」

名を、呼ばれた。

「二周目で、これは君の事件だと言った。だから、君に選択を委ねたいと」

「はい」

「すまない。あんな大言壮語をしておきながら、私は、今自分の工ゴで、この事件の最後に関わりたい。魔術師としてもエルメロイ派の君主ロードとしても正しくないというのに、私はどうしてもこの問題に関わらずにいられない」

「…………」

なぜだろう。

こんな追い詰められたときなのに、なんだかくすぐったい気持ちになってしまった。

「どうして、関わりたいんですか」

「言えない。言えないが、私に命を預けてくれないか」

「……師匠は馬鹿ですね。そんなの、申し訳なさそうに言わないでください」

微笑せずにいられなかった。母親のこと、ロゴスリアクトの

ことも、ウェールズの半分が同じ奇禍に巻き込まれるなんてことも、到底自分の頭では受け容れきれない。衝撃はこの程度の時間で冷めやるはずもなかったが、それでも口をついて出たのは、自分にとって当たり前の答えだった。

「だって、そんなものは、とっくに預けています」

自分が言うと、あちゃあ、というように、横合いの騎士が曖昧な顔を押さえたのだ。

何かしら彼が口を挟もうとしたところで、今度は背後から声があがった。

「だいたい、ここで退くとかないでしょ教授！」

と、フラットがぴょんぴょん跳ねながら、嬉しそうに拳を突き上げたのである。

「だって、まだゲームクリアしてないですよ！ どこからどう見ても隠しボス登場ってやつでしょこれ！ せっかく見つけたのに放置とかありえないです！」

「僕は、先生とグレイた……グレイさんがいいように」

こほんと咳払いして、スヴィンが言う。

「それに、今回について、先生は僕たちの力を借りると仰いました。借りる側だって、きちんと最後まで借りていただかないと、契約違反というものです」

「覚えてたか」

苦い顔をして、師匠が淡く笑う。

対して、今度こそ騎士サー・ケイが、勢い込んで抗議したのだ。

「おいおいおい、バカじゃないのかお前ら！ 残らず頭がゆだった上に、巨人用の酒でもかくらったのか。わざわざここで退いていいなんて、相手から言ってくれて、あげくあれだけ酷い目にあつたくせに、まだ火だるまになりにいく気か。やめるチャンスを与えてやったのに、選定の剣なんぞ引き抜きやがったどこぞの村娘じゃあるまいし、自分からくだらない地獄に飛び込むなんぞごめんだ

ぞ」

「だけど、サー・ケイはついてきてくださるでしょう」

つい自分が言ってしまうと、騎士は喉から低い唸りをあげた。

「……なんで、そう思う」

「だって、あなたはアッドでもありますから」

「……というか、お前が本体の大鎌アッドを持っていく以上、オレは逃げようがないわけだが。悪いと思ったらズラかってほしいが、そうしないんだな」

「はい」

うなずくと、はたして騎士は心底落胆したようにうなだれた。

それを確認してから、師匠はズエピアへと持ちかけた。

「いいでしょう。ロゴスリアクトの誤作動を止めてさしあげる」

「本気かね？」

ズエピアが、眉根を寄せた。

「もちろんです。だいたい、この答えだってあなたなら演算してい
たんじゃないのか」

「無論、していたとも」

師匠の言葉を、ズエピアは肯定する。

「可能性として高くはなかったが、君の選択肢としては候補にあつた。君のこれまでの行動の統計は、そうした回答を示唆していたからだ。だからこそ私は契約違反の危険を冒しても、君たちと接触する道を選んだ。だが、それでもなお分からぬ」

アトラス院の鍊金術師は、初めてかぶりを振ったのだ。

「なぜ、そんな選択肢がありえる？ 君の知性ならば、不合理だと分かっているはずだろう。ロゴスリアクトの危険性は十分承知しているはずだ。まさかウェールズを救いたいからなどと戯言は言い出

すまいね？」

よほど理解不能だったのか、ズエピアは多弁に語りかけてきた。

「それとも、もうひとつの手段とやらかね。仮にそんなものがあるとしても、仮説に仮説を重ねたような籠で不合理な選択肢に、君主ロードが命をかけるというのか。君だけじゃない。生徒や内弟子のものもかかっている。確か、君は生徒が自分の戦いに関わることさえも忌避する性質じゃなかったかね？」

「先ほど言いましたが、私は探偵じゃありません」

と、師匠は返した。

「不合理を消していった最後に、真実が残るなんて思わない。魔術師ですから。そして、最善や最適解なんてもので行き着ける果てに、とっくの昔に私は飽き飽きしているんだ」

極めて生真面目な表情で、そんなことを言い放ったのである。

呆気にとられたような空気が、つかのま流れた。

そして、

「ははははははははは！」

その答えに、鍊金術師は笑い始めたのだ。

「不合理を消そうとしないだって！ 君は馬鹿か愚鈍かアホウドリか！ 何を言い出すかと思えば、そんなくだらなくて無意味な筋立てか！ 不老の魔術を使おうが、たかだか三百年生きるのも難しい身が、最善も最適解も打ち捨てて、どこに辿りつくつもりだ？ あげくに、そんな薄弱な理由で、たったそれだけの戦力で、誤作動したロゴスリアクトと向き合うだって！」

心底おかしくてたまらないとばかりの口調だった。

さきほどの神殿にも似て、いまもひびを加速度的に増やしていく空間で、鍊金術師の哄笑はなおも大きく響き渡り、こんな風に結論したのである。

「そうか、それは一筋が通っている！」

「はあああ?!」

その台詞に、騎士サー・ケイが素っ頓狂な声をあげる。

「ああ、そうだ。飽きるだろう。うんざりだろう。だからこそ私はそんな思想を捨てた。思い煩うことを止めた。だが君はそんな思想を持ったまま、先に行こうというのだね。なるほどそれは愚かしい。なるほどそれはくだらない。なるほどそれはー」

そこで、ズエピアは一旦言葉を切る。

「いいや、もはや見守るだけと決めた私が、この先を続けるのは無粋というものだろう。ならば、話を続けよう。君たちがロゴスリアクトを止めるというのならばよし。ただし、エルメロイII世が看破した通り、契約上、私は助力をすることはかなわない」

静かに、鍊金術師は続けた。

「それでも、舞台ぐらいはいささか整えてやれるだろう。君たちにもアレにも有利にはならないだろうが、それでも、気持ちの上ではいささか楽になるかもしれない」

「御協力痛み入ります」

師匠が頭を下げるとき、ズエピアはすうと手を挙げた。

「さあ、再演の幕が下りる時間だ！」

その指が、弧を描く。

何かが、砕けた音がした。

今まで目には見えない、氷の宮殿に包まれていたかのようだった。

エレベーターの浮遊感を百倍したかのごとき酩酊に襲われていると、ズエピアはさらに言葉をつなげた。

「そうだ。ひとつ教えてやろう。ああ、関わると決めてしまった今ならば、教えて契約には抵触しないとも。君の目算どおりだ、エルメロイII世。グレイの母とフェルナンド司祭の死は、まだ確定していない」

「——っ?!」

驚愕が脳に浸透する暇さえなかった。

声ならぬ『情報』が、自分たちの脳にこだました。

—コード：ロゴスリアクト、変則起動。

—歪曲固定値B。

—摘出期間：■■■■■■■■■■

—アンロゴスプログラムスタート。対象の変換を開始。

—全行程、完了クリア。アトラスの人理継続第五実験を開始します。

*

時計塔の魔術師たちの姿が消えてから、残された錬金術師はため息をついた。

少しでも、誤作動による暴走を遅らせる必要がある。ロゴスリアクト自体に手出しするのは契約上かなわないが、周囲の要素を弄るのは、エルメロイII世たちを間接的に誘導したのと同じく、からうじて許される範囲だ。

無論、厳密には抵触する恐れがあると並列思考六番は警告しているが、二番・三番が許容範囲だと主張していることを優先する。並列思考同士の矛盾によって幾分性能低下は起きるが、これは諦めるしかない。

この半年ほど、ずっとそうしてきたように、ズエピアは浮遊する水晶球に触れて、無数とも思えるパラメータを制御し続ける。ある意味では、フラットとやりあった干渉合戦などよりもよほど纖細な技術。いかにアトラス院の錬金術師といえど、彼以外なら即座に脳

が焼き切れるほどの負荷ではあるが、その程度こなせなくば、死徒になりはてた甲斐がないというものだ。

たったひとりで、いつものように彼の指は動き続ける。

その途中で、

「なるほどそれは愚かしい。なるほどそれはくだらない」

歌うような言葉が、形の良い唇から零れた。さきほどエルメロイII世を笑って評した台詞であった。

今回は、こう続けたのである。

まるで数十年も間をおいて、もはや顔も忘れ去った初恋の相手と出会ったみたいに。

「なるほどそれは—愛おしい」

風が、頬を叩いた。

二周目の夏でも、現実の冬でもなかった。

空は濁った雲で覆われて、幾多の石柱が大地からそそり立っている。そのひとつひとつに名前が刻まれ、まるで忘れ去られた子供のように、黒い地面へ薄い影を落としているのだった。あの村のそれよりも遙かに広大だったが、淀んだ空気や湿った土の臭いは馴染み深いものであった。

一墓地。

ズエピアが場所を選んだというのはこういうことか。

母の墓であり、骸王の墓であり、ロゴスリアクトの墓であると。

ただ、今はその環境よりも、別のことでの自分の頭はいっぱいだった。

「師匠！」

と、自然に呼びかけていた。

「どういう、ことですか。母さんの死も、フェルナンド司祭の死も、確定してないって」

「あくまで仮説だし、ぬか喜びさせるのは酷だったから、あの場では言えなかっただがね。ふん、アトラス院も思いがけないサービスをしてくれる」

苦笑を浮かばせて、師匠はこう付け加えた。

「彼の言葉そのままだ、君の母上の死は、まだ確定していない」

「……確定？」

「なぜならば、ロゴスリアクトが、ずっと死を検証し続けているということは、あの場での死者がまだ確定していないということとイコールだからだ。おそらくは仮死状態のまま、ロゴスリアクトはある村の人々を保存している。フェルナンド司祭も同様じゃないかと思っていたが、ズエピアの方からお墨付きを出してくれるとは」

「……あ」

奇妙な気持ちだった。

フェルナンド司祭とは多くの言葉を交わしたわけじゃない。だけど、自分にアーサー王を重ねて見ないという意味で、不思議と救われた気がしたのも本当だった。

「それで、確定していない。母さんの死も、フェルナンド司祭の死も」

「……なるほどねえ。ホント、魔術師ってのは、いろいろわけの分からぬことばかり考えるもんだ」

話を聞いていた騎士サー・ケイが、首の裏を搔きながら、口を開いた。

「なかなか面白かったけどさ。で、どうするわけだよ。あんたならそのロゴスリアクトとかいうポンコツを直せたりするわけか？ いや、あんたの腕じゃ無理だよな。だったら、あんたの生徒がかかる？」

「どちらでもないが、手段はある。これをあの二周目から持ってこられたということは、多分そういうことなんだろう」

答えて、師匠が、懐から湾曲した短剣を取り出したのだ。

侵刃黄金イロウシェン。

母の体から、精神と魂を引き剥がした古き魔術礼装。

「この場所も、ロゴスリアクトの演算する一部には違いない。だから、人はともかく、携帯していたモノを持ってくることはできたということだろう」

そこで一呼吸おいて、騎士の問いに、師匠はこう答えたのだ。

「この礼装を使って、死せる骸王の精神とロゴスリアクトを引き剥がす」

「——っ！」

一瞬、戸惑った。

だけど、確かに可能かもしれない。

侵刃黄金イロウシェンとはまさにそのための礼装なのだから。死せる骸王とつながっていることによって誤作動しているロゴスリアクトも、当然復帰する理屈だ。

理屈だけならば。

それで本当に直るかどうかなんて、自分には到底分からない。狩りで射られた野獣から、矢を引き抜いたところで、それだけで治癒するわけではあるまい。あくまで治る可能性が出てくるだけだ。

「それで……直らなかつたら？」

「そのときは、破壊するしかないだろう」

決意を秘めた声に、ごくりと唾を飲み込む。

いずれにせよ、困難極まるミッショソには間違いない。母やフェルナンド司祭の命もさることながら、まず自分たちが生き残れるのかどうか。

「先生、グレイさん。来たみたいです」

すん、ヒスヴィンが鼻をうごめかす。

墓地のただ中であった。

いくつもの石柱を隔てて、十数メートルほど向こうに、あの金属の仮面をつけた女ひ性とが現れていた。

「……ロゴスリアクト」

「どうやら、夢を見ていたようだ」

女性が、仮面を外す。

その内側は、もはや自分の母ではなかった。

かといって、自分と同じでもなかった。曖昧模糊とぼやけた、騎士サー・ケイと同じ顔。おそらく、それが本来の彼女なのだろう。

「そうだ。私はそういうモノだった」

まるで、違う。

再演されていたあの夏と—自分たちの体感時間で言えば、わずか数十分前の骸王と、まるで異なっている。

「そうだ。私は、精神のアーサー王であり、アトラス院のつくりあげた兵器だ」

ようやっと気づいたように、女性が右手を掲げた。

闇が、そこに集った。

凝集した闇は、それだけで力タチを持った。

「そうだ。この『槍』もロンゴミニアドであり、またロゴスリアクトであった」

漆黒の『槍』をかざして、貌なき女性一口ゴスリアクトは断言したのだ。

「おいおいおい、デタラメもいいところだろうが」

と、騎士が唸りをあげた。

顔に吹き付ける魔力の風は、対処を知らぬ一般人であれば、それだけで神経系を搔き乱されて、気絶しかねないほどだった。ばかりか、今『槍』が生まれたのと同じようにして、ロゴスリアクトの周囲に、新たなヒトガタまでが形成されたのだ。

わずか数秒で、そこにはふたりの一見覚えのある人影が佇んでいた。

「……ベルサックさん」

と囁いたのは自分であり、

「……シスター・イルミア」

と口にしたのは、騎士サー・ケイだった。

ふたりとも、その身体から、殺意混じりの闘志を発散させていた。

「なるほど。再演に取り込まれた者ならば、ロゴスリアクトの能力によって再現できるというわけか」

冷静に分析しながら、師匠が口にする。

ロゴスリアクトの意思のもと、ヒトもモノも再構築されるということか。

「だったら、一周目では私たちと一緒に帰還したトリムマウやズエビアは、おそらく再構築されない。まだマシと思うべきかどうか」

言葉のすべてを、聞く余裕などなかった。

たまらず、自分は声をあげていた。

「ベルサックさん！」

「ああ、グレイ。俺は俺だ」

いつも通りの低い声で、ベルサックが応じてくれた。

その口調も、小さくうなずく仕草も、いつもの墓守のものとしか思えなかった。なのに、まるで安堵できなかった。

「だが、分かっているだろう？ 再構築された際に、俺の思考のパラメータもいじられている。事情はどうあれ、今はお前を殺すことしか考えられない」

「……ベルサックさん」

息をつまらせた自分に、ブラックモアの墓守は困ったように笑った。

「存分にやれ。再構築された複製品レプリカには違いない」

ごお、と斧がそのまま振るわれたのだ。

大鎌で正面から受け止めただけで、全身に衝撃が突き抜けた。幾百と繰り返した訓練がどれだけ手加減してくれていたか、初めて自分は知った。

「さあ、お前の全力を見せてみろ！」

怒号とともに、ベルサックの手から靈体の鴉が飛び立つ。

なし崩し的な強引さで、自分は戦いへと引きずり込まれた。

*

同じく、シスター・イルミアは、騎士サー・ケイと向かい合っていた。

「じゃあ、こっちも同じか。女性に手をあげるのは好みじゃないわけだが」

「そう？ あたしは男に手をあげるのは、とても好みよ。可愛い女の子相手だと、つい苦悩しちゃうけど、ああそれはそれで愉しみではあるわね。好みの顔が歪むところなんて、何度も見返したくなるもの」

シスター・イルミアが唇の端をつりあげた。

横に持ち上げた手甲一灰かい錠じょうが、紫電を散らした。鍛え上げられた代行者は、神秘の光を浴びて、なお凄艶だった。

「うん。今のあたしには分かってる。あなたが古いにしえの騎士をモデルにした精神のコピーであることも。あなたの本体がどういう意図でつくられたかも」

動作のおこりさえ、訓練された肢体からは感じ取れなかった。

鋭くつっかけたイルミアの打撃を、かろうじて騎士がかわす。

運動能力だけでいえば、シスターが上か。

アッドによってカタチを与えられたものの、靈基も不安定で、人

間以上の身体能力を獲得しているわけでもない。サーヴァントとして呼ばれた場合のサー・ケイとはやはり大きく違うのだろう。

「ちーっ！」

やりにくそうに、騎士が舌打ちした。

まだしも、『槍』の威力で圧倒しようとする骸王の方が彼としては相性が良かったかもしれない。速度と技術で果敢に先手を取ってくるシスターの戦術は、ねちねちと誤魔化していく彼の戦術と噛み合わず、苦戦を強いられる格好となる。

「さあ、騎士の戦いを見せて！　あたしと打ち合って！　主の御心のままに、あたしを猛らせて！」

笑うシスター・イルミアが両手を打ち合わせ、強烈な紫電を騎士へと进らせる。

その狭間を縫いながら、騎士は面倒そうに剣を抜き放った。

*

さらに、そそりたった石柱の近くから、おびただしい人影が生まれたのだ。

その身体は、水晶でできていた。

おそらく、村人たちが元なのだろうと思われたが、こちらの水晶のヒトガタからは意思を剥奪しているらしかった。専門の訓練を受けたわけでもない彼らを戦いに駆り出すには、その方が都合が良かったのだろう。水晶の身体も同じ理由か。

ゾンビのごとく群がって、こちらへと殺到してくる。

「わっとととと、みんなで集まるのはショッピングモールだけいいってば！」

対して、フラットの指が、空中に紋章を描いた。

それは氷の茨となり、たちまち人々の足を搦め捕った。けして少年の魔術が干渉だけではないという証拠であり、誇らしげに胸を張って、フラットは片目をつむってみせた。

「エルメロイ教室……参……戦つ！ こんな感じでどうかな！ ル・シアンくん」

「お前とひとまとめにするな！」

級友たるスヴィンもまた、自らの精才氣ドを練り上げていた。

魔力は、不可視の狼の外殻となり、すでに彼の身体を包んでいる。

ぐいと首を伸ばして、その喉から魔力を解き放つと、獣性魔術による咆ほう哮こうは残った水晶の人々を打ち倒した。

「先生、これなら一気に」

「いいや」

と、エルメロイII世はかぶりを振った。

「まだ来るぞ。気をぬくな」

彼の見据える先で、石柱のそばから、新たな水晶の戦士たちが生まれてきた。しかも、それぞれに剣や盾を構えた様子は、明らかにさきほどと違っていた。

ばかりか、彼らの顔は骸骨を剥き出しにしていたのだ。

「骨兵たちか」

村人が再構築できるというなら、骸王に従っていた骨兵たちを再構築できるのも当然だったろう。

戦いの趨勢は、いまだいすれに傾くともしれなかった。

一見は、五分に思えた。

ベルサックとイルミアにはやや押し込まれているが、ほかの多勢はフラットとスヴィンが次々撃退している。敵も対策を取っているようだが、まだまだフラットの手札が尽きる様子はない。師匠の指示も考えれば、十分有利に戦えるだろう。

しかし。

自分が靈体の鴉を薙ぎ払い、ベルサックから距離を取ったタイミングで、ロゴスリアクトの声音が聞こえたのだ。

「……私は、分からぬ」

咳きの間にも、女性の姿は変わっていく。

人の形さえばやけさせ、もっと曖昧な一何かへと。

「なぜ、私はここに来た？ なぜ、私はこのような外部要素を放置できなかつた？ なぜ、私は自分の内側の独立要素まで解放している？ なぜ、私は私が分からぬ？ 再検討、再検討、再検討すべし。契約によるアーサー王の精神模造は保持。検討のため、並行して一部パラメータを初期値に設定」

もはや骸王でもなく、母でもない、ロゴスリアクトの言葉。

「トライヘルメスによる初期値を確認。アトラス院院長による認証を確認。靈長の規模と変遷を確認。人理の継続と範囲を確認。限定状況下において、並行世界にありうる可能性を検討……検討終了まで三秒……二秒……一秒……終了。

以上をもって、私は続けるべきである。限定環境だけではなく、すべての可能性を検討すべきである。閉ざされた小宇宙ミクロ・コスモスにこそ、無辺なる大宇宙マクロ・コスモスへの扉はある」

自問自答。

もしくは、たったひとりで壁に数式を書き続けるがごとき行為。

「そう。私は守らねばならない。辿り着かねばならない。救済せねばならない。私の能力の拡張できる限りを拡張し、滅びを止めねばならない」

(……救済？)

あの神殿で、師匠が言っていた。

アトラス院の七大兵器は、人類を滅びから救うためにつくられたのだと。しかしその結果、滅びを救うのではなく、かえって人類に滅びを与えるだけの『力』を持つに至ったのだと。

目的と手段が矛盾した、逆理の果て。

どうしても諦められぬ目的を設定してしまったからこそその、夢の残骸。

(……ひょっとしたら)

ひょっとしたら、自分の村もそうだったのかもしれない。

死せるアーサー王を蘇らせようとした……その始まりは、きっと王を敬っていたり、もう一度会いたかったり、といった目的だったのだろう。蘇りというのも、そうした目的を遂げるための、あくまで手段だったはずだ。

しかし、続く世代には、王を蘇らせること自体が目的となってしまった。過去の王が蘇ったところで、彼らをどう導いてくれるかなど分かりはしないのに、おばあ様などはそれに取り憑つかれていた。

きっと、そんな間違いは、誰にでも起ころう。

一瞬そんな感慨にとらわれながら、自分はロゴスリアクトの『槍』が、魔力の渦をまとい始めるのを見た。

(……あれは……っ！)

「私は定義する。この時間は私の救済を遅らせる障害だと。演算の効率化を是として、出力の八%まで使用を申請。設定を確認。使用許可承認」

ごお、と『槍』の魔力がさらに凝集する。

黒いロンゴミニアドの真名解放。

あれが振るわれれば、すべては終わる。抵抗する手段などない。かの宝具がどれほどの威力を持っているかなんて、自分が一番よく知っている。

「よそ見する暇があるのか、グレイ！」

ベルサックが、離れていた間合いを潰す。

ほぼ同時に、墓守の手元から飛び立った霊体の鴉が、こちらの逃げ道を塞ぐ。訓練でさえ見せなかつたコンビネーション。以前の自分であれば、これで詰みだ。回避するには巧みすぎて、防御するには強烈すぎて、何ひとつ対抗手段を持ち得ない。

しかし、今の自分には。

「ああああああっ！」

ベルサックの斧に自らぶつかるようにして、転がる。

フードの襟元が切り裂かれた。ほんの少しづれれば、頸動脈を持つていかれただろう。そのまま立ち上がった自分は、ベルサック一ではなく、横合いで戦っていたシスター・イルミアに突撃したのだ。

「えーっ？」

「サー・ケイ！」

言葉より早く、歴戦の騎士はこちらの意図を理解した。

ぐるんと回り込み、追いすがろうとしたベルサックに立ちはだかる。逆に自分は、騎士と対戦していたシスター・イルミアに向かって、大鎌を振りかぶった。

騎士との交代スイッチ。

イルミアの速度と技術が騎士にとって相性が悪いなら、大鎌で強引に吹き飛ばす。それが自分の目算だった。全神経を騎士に集中していたためか、一瞬逡巡したイルミアの手甲に、大鎌が炸裂した。

追いすがったベルサックの斧を、今度は騎士サー・ケイの剣が受け止める。

片手で、どんと背中を押された。

「行けよ、グレイ！」

「はい！」

今の自分にかなう限りの『強化』を込めて、跳躍する。

一飛びで十メートルを超えて、今度こそロゴスリアクトへ！

「フラット！」

「イエス、教授！」

背後で、少年の指が、虚空に術式を描いた。

一瞬、ロゴスリアクトが停止した。アトラス院の技術にすら干渉しうる、少年の異能。

ただ、その刹那にすべてをかけて、大鎌を振り落とす。

硬い音が鳴った。

魔力を集中しかけていた『槍』が、こちらの大鎌を受け止めた音だった。

「……やはり、不可解だ」

と、ロゴスリアクトが呻いた。

フラットの仕掛けた硬直を破って、無理やり『槍』を持ち上げただけに、彼女の体勢は大きく崩れていた。こちらが付け入ることが、できるだけの隙があった。

「なぜ、私はお前を無視できない？ 私は私であるだけでよいのに、どうしてお前を追いかけてきてしまった？」

声からは、何の感情も読み取れない。

言葉面からすれば疑問符がついているはずなのに、そのことを本当に不思議に思っているかさえ不明だ。

だけど、自分はこう言っていた。

「あなたの中に、骸王がいるからでしょう」

感じている。

いまだ、彼の中には、やはり自分と同じ存在があると。肉体と精神と魂。ひとりの人間に備わっているべき三要素のひとつずつ。

だったら、やはり自分はできそないなのかもしれない。

かつての王を蘇らせるためにつくられたのに、それも成しえない一なりゆきとはいえ自分可愛さに逃げ出して、母を犠牲にして、さらには大本となったロゴスリアクトを停止させようとしている。

それでも、もう逃げたくないと思う。

母については、いまだに整理できていない。

それでも、できれば向かい合いしたいと思う。

「なぜ、お前は私を妨害する？」

「ごめんなさい」

両腕にあらん限りの『強化』を回す。周囲の魔力は十分。さきほど『槍』を振るわんとした大マ源ナが満ちている。だから、魔術回路が焦げ付くまで、ただひたすらに魔力を回転させる。

「あなたに、罪なんかない。アトラスの契約どおりにずっと動いていて、精神のアーサー王をきちんと模造して、その結果で誤作動しただけ。拙たちはそのときどきの勝手な都合であなたに命令したり停止させようとしたり……時には破壊しようとしたりもしている」

なぜだか、涙腺がゆるんでしまった。

目の前の相手は、もはや精神のアーサー王ではなく、母でもなく、さりとてロゴスリアクトそのものでもない。三者がそれぞれの配合で混じってしまった存在だ。

だけど、同時に、これは自分でもあると感じていた。

勝手に期待されて、勝手にアーサー王の肉体とされて、それでも逆らうことなんて考えもしなかった、昔の自分だと思った。

「ごめんなさい。謝ります。それでも、拙はここで退けません」

じり、じり、と大鎌が相手に向かって動いていく。

本来なら、再構築されたシスター・イルミアかベルサックが介入するところなのだろう。だが、師匠や騎士が阻んでくれているらしい。自分とロゴスリアクトの戦いを、誰も止めに入ろうとはしなかった。

大鎌を見やり、ロゴスリアクトが言う。

「なんだそれは？ ロンゴミニアドか？ だが構成要素がロンゴミニアドではない？ 一体それはなんだ？」

「あなたにとって、それは聖槍ロンゴミニアドなのでしょう」

大鎌は、自分の力に応えてくれる。

たとえ口を開かなくなっても、こちらに悪罵をつかなくなっても、いつも自分を助けてくれている。

「でも、拙には違う」

神経の引きちぎれそうな痛みを無視しながら、叫ぶ。

「拙にとって、これはアドです」

なおさら強く、大鎌を握りしめて。

返事をしてくれなくなった薄情な相手に、それでもあらん限りの思いを込めて。

「拙の、友達です」

「…………」

一瞬、ロゴスリアクトが絶句した。

「……なぜ、私はここに来た。不可解だ……不合理だ……理解不能……判断不全……理論矛盾……演算不成立……」

ぶつぶつと、咳くたびに、力がゆるむ。ゆるんでいく。

「死とは、なんだ」

それこそが、彼女の最後の問い合わせかもしれなかった。

完全に、拮抗が崩れた。

解き放たれた大鎌が、女性の身体を袈裟懸けに切り裂く。

それだけじゃない。深々と肉と骨を断つ手応えと同時に、自分は大鎌から片手を離し、師匠が投げはなった短剣を受け取っていた。

侵刃黄金イロウシェン。

無我夢中で、その手を振り落とした。

黄金に輝く短剣が、ロゴスリアクトの肉体を穿った。

確かに、短剣が彼女の鎖骨あたりに刺さっていた。

「これ、でー?!」

ロゴスリアクトは、停止するのか？

母やフェルナンド司祭の死が、覆るのか？

痛みにもがくでもなく、血を吐き出すでもなく、虚ろに女性が動きを止める。

まるで、糸が切れた操り人形みたいだった。侵刃黄金イロウシェンが正しく効果を発揮したとすれば、骸王の精神がロゴスリアクトから剥離されたのか。

前のめりになった身体を受け止めようとして、自分は硬直した。

「理解したぞ」

転倒しかけていた身体が停止して、ぎょろりとこちらを向いたのだ。

「ああそうか。だから私は執着した。死とはこれか。墓とはこれか。そうだった。だから私はお前に執着した、私は正しかった」

やはり曖昧に霞んだ顔なのに、瞳がこちらを睨ねめつけているのが分かった。口元には会心の笑みが浮かんでいることが分かった。

「お前が、私の死だ」

途端、ロゴスリアクトに異変が生じたのだ。

「えー!？」

ずしゃあと音を立てて、女性の身体は、自分の目の前から崩れ去ったのだ。

砂である。

赤い砂だった。

異様なまでに引き込まれる、鮮烈な赤い砂へと、ロゴスリアクトの肉体がたちまち変換されたのである。

その変化は少女ひとりにとどまらず、離れていたベルサックやイレミア、水晶の骨兵たちまでも一気に砂となって崩れ去っていった。しかも、その量たるや、墓地のあらかたを呑み込むほど、莫大な量へと膨れ上がっていったのだ。

「これは……まさか、アトラス院における賢者の石の赤化変質か……！」

師匠の呻きが、すぐにとある名前を吐き出した。

「くそファック、ロゴスリアクトはそういう兵器か！」

「どういう、ことですか」

「もともと、賢者の石はアトラス院の研究成果のひとつだ！ ほぼ無限の情報を記述し得る究極の記憶媒体にして、至高の書物！ ロゴスリアクトはそれ自体が賢者の石の特定状態でできあがっていて……おそらくは記録の続く限り、際限なく増殖できる……！ ああ、だからあの村の人々は消えた！ 初めて、自ら死を知ろうとしたロゴスリアクトに巻き込まれた！ 人類を救うはずが世界を滅ぼすに足るとはこういうことか！」

赤い砂。赤い砂漠。

どこまでも、どこまでも、真紅の世界が広がっていく。

「自分の性能を、初めてロゴスリアクトは自覚した。自分自身でつくりあげたこの仮想演算世界など、すぐに埋め尽くすぞ。長時間触れていれば、我々ですら情報のプールに分解されかねん。そうなれば、次は……」

次は現実だ、ということか。

多分、ズエピアが食い止めていたものもこれだ。

世界のすべてが赤い砂に変じてしまうのを止めるべく、彼はあの村にずっと滞在していたのだろう。おそらく、そこに入らしく良心はない。分かりやすい正義感や人類愛のようなものはない。

そのように決めたのだから、そうする。

ただそれだけの、道具のような人。人のような道具。

そして、一度ロゴスリアクトが消え失せたと思われた地点から、巨影が空に向けて飛び立ったのだ。もはやそれはヒトのカタチさえしていない。新たに群れ集った砂の身体は、巨大で勇壮な翼を広げて、赤い大地で狼狽えるばかりの、哀れな自分たちを睥睨していた。

ああ、その姿は……。

鳥だ。

「ヘルメスの鳥……」

師匠が、空を仰いだ。

その名前は、確かギリシャ神話で、旅人や商人を守護すると言われた伝令神のものだ。

「ギリシャ神話のヘルメスは、後にエジプト神話のトートや鍊金術師メルクリウスと習合し、鍊金術において象徴ともされるようになった存在だ。人であったり、その名を冠した鳥であったり、さまざまな形で多くの書物に姿を現す。ああ、今回の場合はふさわしいだろう。ギリシャ神話におけるヘルメスは、しばしば冥界への導き手でもあるからな」

人類を救済するために、人類を滅ぼす、聖なる鳥。

【お前が、私の死だ】

赤へキル聖メ鳥スが言った。

声音ではなく、脳に直接叩きつけられる情報だった。

初めて骸王と出会ったときのように、それはまた言葉を使わぬモノに戻っていた。

【だから私は、お前を殺しに来た。死を避けるためにそれは正しい。私は私が正しいことを定義する】

巨大な翼が広げられる。

その羽に宿った魔力の凄まじさを悟って、咄嗟に自分は警告を発していた。

「師匠！」

だが、間に合うはずもない。

咆哮とともに、おびただしいまでの赤い砂すな羽はねが叩きつけられた。

それは、もはや爆撃だった。羽の一枚一枚に込められた膨大な魔力が、いかなる火薬よりも強烈な現象を引き起こしたのだ。

赤い砂に埋れた大地が一瞬でクレーターだらけのあばたと化し、突き出していた石柱が残らず破壊される。狙われた自分だけではなく、師匠やスヴィンたちもその余波だけで吹き飛ばされる。半端な結界など紙切れほどの効果も持たないくらいに、砂羽の破壊力は圧倒的だった。

さすがに連発はかなわないものか、地に伏したこちらを憐れむようにして、聖鳥は天空でぐるりと弧を描く。

（……ああ）

声が、出ない。

単に物理的な問題ではない。今の砂羽が発した魔力の衝撃は、こちらの身内までぐちゃぐちゃに搔き回していた。内臓を素手で握りつぶされるようなものだ。『強化』で強引に立ち上がろうにも、その魔力が精製しきれない。

空中を飛翔しながら、聖鳥は魔力を再び凝集させる。

さきほどと同じ爆撃が地表を襲ったならば、もはや生き延びることは不可能だろう。

「……つ……あ……」

だが、たった一撃で立ち上がれなくなるとは。

威力だけならば、あのフェイカーの魔天の車輪へカティック・ホールにも匹敵する。攻撃範囲の広さを含めれば、それ以上か。七大兵器に恥じぬ恐るべき結果は、しかしそれでさえ、聖鳥の性能の一端でしかないのだろう。ただの人間だろうが魔術師だろうが一ひょっとしたら英靈だろうが、その程度の差など存在せぬのと同じだと喝破するごとく、かの鳥は雄壯に天空を舞っている。

(師匠……は……？)

うずくまつたまま、瞳だけを動かす。

どうやら、ギリギリで、スヴィンが庇ったらしかった。

あの中では、獣性魔術が一番防御に長けていると、咄嗟に判断したのだろう。だが、余波だけとはいえ、今の爆撃を受けてはすぐに立ち上がれないらしかった。

自分も、同じだ。

大鎌と『強化』を併用し、かつ衝撃に乗るようにしてダメージを軽減させたが、それでも今の爆撃は致命的すぎた。

(……立て)

必死に、思う。

この程度で、地に伏しているな。

骨が何本か折れた程度で、うずくまっている場合じゃない。

いくら鼓舞しても、叱咤しても、動くのは瞳と肺だけだ。物理的にも魔力的にも、今の自分は破損してしまっている。意思で覆るほど甘くはなく、焦りだけが幾度となく脳裏を循環し続ける。

(立て、立て、立て……立て！)

今起きなくて、どうするのだ。

ずっと目をそむけてきた故郷の問題をやっと解決できるというこのときに、自分がここで立ち上がらなくて、どうするのだ。

「起きろ」

むんず、とフードを掲めた。

途切れかかった意識を、その手と声が引きずり戻した。

「起きろ、グレイ」

「…………っ！」

引き起こされたまま、いまだ覚醒しきっていない脳が、かろうじて相手を認識する。

「サー・ケイ……」

「あいつは、お前が自分の死だとか言ってただろ」

あの思念を、騎士も聞いていたらしい。

彼の鎧も、さきほどの爆撃で無残に爆ぜている。いや、自分などよりもよほどひどい状態だった。胸甲は穿たれ、足甲もほかの部分もほとんどが割れたり、裂けたりで、まともな人間ならば息をしているのも考え難いほどだ。

それでも、騎士は揺らがなかった。

「だったら、こいつはもう人類の救済だとか滅びだとか、クソくだらない荒唐無稽な御伽噺じゃない。単に、お前が生きるか、あいつが生きるかってだけの生存競争だろうが」

騎士の言葉が、自分の鼓膜を叩く。

「拙、は……」

自分が、いまだ大鎌を手放していないことに気づいた。

心だけじゃなく、身体も諦めてなどいないのだと、教えてもらった。

「そうだ。そいつを構えてろ」

満足げに、騎士が言う。

でも、駄目だ。

単純に、間に合わない。師匠にも自分にも、ばかりかフラットやスヴィンにとっても、今の一撃は致命的すぎた。たとえ心が折れないなくとも、もっとどうしようもないところで、すべてを終わらせるべく、死神がやってくる。

自分を殺すために、聖鳥ヘルメスが飛来する。

*

聖鳥ヘルメスの翼が、魔力を込めた砂羽を解き放つ。

その威力はすでに証明済み。砦だろうが打ち壊し、中の軍隊を殲滅する一対城宝具にも匹敵するほどの、絶大な破壊を巻き起こす。

しかし。

今回は、その爆撃が、大きく逸れたのだ。

「え……？」

茫然と、自分から離れた破壊現場を見やった。砂漠を大きく抉ったクレーターは、その破壊力が一切衰えてないことを示している。

ばかりか、聖鳥の飛翔がぐくりと不安定になり、墜落を防ぐため

か滑空し始める。

目を見張っていると、背後から陽気な声音が響いた。

「ビンゴビンゴビンゴ！ せっかくだしトリムマウちゃんの代わりに言うよ！ 『来いよヘルメス！ 翼なんて捨ててかかってこい Throw away that chickenshit wing』 ……ってね！ グレイちゃんがあの礼装を突き刺した瞬間に、もうちょっとだけ付け入る隙が見えたんだよね！」

横倒しのまま、かろうじて手だけを上げたフラットが笑ったのだ。

そのすぐ近くに、あの水晶球が浮いていたのである。ズエピアと出会った空間で、無数に浮いていたものだった。

「移動する前に、ひとついただいておきました。まあ、ズエピアさんは気づいていたと思いますけど」

はにかむみたいに、獸性魔術の少年が唇をほころばせる。

つまり、それはロゴスリアクトと接続するための、アトラス院の礼装でもあったのだろう。けして簡単ではなかろうが、こと干渉ハッキングに関しては絶大な異能を誇るフラットならば、そこからロゴスリアクトに侵入することも可能だったということか。

「スヴィンさん……でも」

「なんでもないですよ、こんなの」

と、スヴィンは顎元の血を拭う。

師匠とフラットを庇った分だけ、彼の傷は大きかった。

だが、血まみれの若き獣は、むしろ気高く見えた。同時にフラットも、こうしたスヴィンの態度を当然と捉えているのか、この場においては礼も言わず、恐縮もしない。あれだけ普段諂いを繰り返している少年ふたりは、この場において、命を共有したひとつの生き物のようだった。

「まだ、僕、何もできてないですから」

「そうそう。冠位の人形師にだって負けないって豪語しておいて、これきりなんて、恥ずかしくてエルメロイ教室に戻れなくなるしね！」

フラットが笑う。

無邪気で、しかし不敵極まりない。これもまた魔術師の本質なのだろう。

その間にも、水晶球に映る風景はどんどん移り変わっていく。数字や記号が大量に浮かび上がり、それらを好奇心いっぱいの瞳に映しつつ、フラットがリズミカルに指を動かしていく。今までと似ていて、少しだけ違うその運指は、まるでピアノか何かの楽器を演奏しているようだった。

師匠が、そんな少年へと声をかける。

「どうだ、フラット」

「はい。ロゴスリアクトの誤作動部分をデバッグすればいいんですね？ いま検索をかけてるから、グレイちゃんのお母さんとかも、うまくサルベージして……」

しかし、そこまで口にしつつ、少年の面持ちはみるみる強張っていったのだ。

「……これ、なんだこれ……」

「フラット？」

師匠が眉を寄せ、それにも気づかぬように、フラットが呻く。

「明らかに、演算速度は本来の一割以下なのに……こっちの干渉ハッキングに対応できる部分はさらにごく一部なのに……俺よりずっと速いよこれ！」

いつも、余裕と気楽さを滲ませた少年が、そんな悲鳴をあげるのは初めてだったかもしれない。

「半分よこせ！」

スヴィンが獣性魔術を起動して、フラットの背中に手をあてる。

多分、師匠が以前にルヴィアとやった、魔術回路の接続だっただろうか。ふたりの魔術回路が相乗して、演算速度をさらに向上させる。

しかし、それでもロゴスリアクトの一ごく一部にも及ばない。エルメロイ教室きっての麒麟児ふたりをもってすら、アトラスの七大兵器は寄せ付けないのか。

十数秒ほどでフラットの様子は安定したが、それは聖鳥も同様だった。

再び、飛翔の制御を取り戻し、悠々と空を飛び始める。

もう一度戻ってくれば、今度はフラットが攻撃を逸らせるかも分からぬ。いいや、おそらくは不可能だろう。

「さすがは七大兵器というわけか」

そこまで見極めて、師匠が口を開いた。

「こちらの演算速度があげられないなら、向こうを削ぐしかないだろう」

「じゃあ……」

「もう一度侵刃黄金イロウシェンを、刺すしかない」

師匠が、こちらの懐を見やる。

あの短剣は、咄嗟に自分が回収していたのだった。

「侵刃黄金イロウシェンは、あれの本体に刺さりきってない。だからこそ、君が自分の死だと言い出すほどに、こだわった。骸王とロゴスリアクトはここに来て、より切実に絡みついている」

なんとなく、それは実感できる。

あのロゴスリアクトから、骸王は剝がれ落ちていない。むしろ、剝がれ落ちる寸前で、強固に保護されたようにも感じた。ロゴスリアクトが死の概念を理解するのに、骸王というパートは不可欠と考えた……ということかもしれない。

ならば、

「……深く、侵刃黄金イロウシェンで穿つ」

それで、今度こそ事態は解決するだろうか。

「でも、どうやったら？ 飛び回っている聖鳥ヘルメスには拙も接近できません」

「なるほど、動きを止めればいいんだな」

すると、騎士が口を挟んできた。

勝手に納得してうなずき、踵を返して、こんな風に言い残したのである。

「それは任せてもらおう」

「サー・ケイ」

「ほんの半日ほどだったが、お互い悪い時間じゃなかったな。エルメロイII世」

そんな言葉を、噛みしめる時間もなかった。

騎士が、天空を振り仰ぐ。

三度、聖鳥ヘルメスがこちらに向かって、翼を羽ばたかせる。

「ああ、これは仕方ないな」

どうしてだろう。

曖昧に顔を霞ませた騎士は、聖鳥への歩みを止めようとしなかった。

「サー・ケイ……っ」

「どうにもこうにも、役回りが変わらない。おかげでこちらはカムランの丘にも辿り着かなかったってのに」

カムランの丘は、確かアーサー王が最期を迎えた土地だっただろうか。

円卓の騎士でありながら、彼はそこに行けなかった。行く前に命を落とした。

「あなたは……」

ひどく、嫌な予感がした。

止めなければいけないと感じて、でも身体が動かない。

これは止めてはいけないと、自分の中の何かが叫んでいた。そうでなくとも、まだ倒れないでいるのが精一杯で、誰も彼もまともに動ける状況ではない。騎士が平気そうなそぶりをしてるのも、単に生身の肉体を持ち合わせていないがゆえだろう。

「なあグレイ。お前がちょっとでも立ち止まるようだったら、こっちも適当に手を抜いて済ませようなんて思ってたんだけどさ。案外負けず嫌いだろ。今回もなんだかんだと弱音は吐くくせに、無駄な自虐には陥らなかった。きちんと生き足搔いてるじゃないか」

それは、けして自分の美質ではない。

昔なら、簡単にそうなっていたはずだ。だけど、多くの事件と人々が、自分をほんの少し変えてくれただけなのに……

「いいな、生者はそんな風に変わっていける」

と、騎士が言う。

「死者に心を残すな。ここにいるのは所詮影法師だ。どれだけ偉業を成した英靈だろうが、あるいはオレみたいな過去の残像だろうが、どっちにしろ死者には違いない。生きている人間が縛られるべき存在じゃない」

そこまで口にして、少し億劫そうに付け足した。

「……とはいえ、子供の頃は、古い英雄が出てくる御伽噺は嫌いじゃなかったがね。安酒みたいな夢があつて。はは、お前の師匠みたいなのも、悪くはないのかもな」

聖鳥の翼が大きく膨れ上がる。

赤き砂羽の爆撃が、再び降り落ちる。

その正面へと、騎士は堂々と立ちはだかった。

「一疑似展開」

右手を掲げたのだ。

ひどく軽い上げ方だったのに、反比例して重厚な魔力がそこに宿るのを感じた。

「宝具設定。偽装登録。ああ、細かいパラメータ設定は抜きだ。英靈でもないオレには、ギャラハッドの真似事になるがね」

騎士サー・ケイの宝具。

ぐるりと指を回すと、乾いた赤い砂漠を、唐突に霧が覆い始めた。

おそらく、本来は水にちなんだ宝具だったのだろうか。だけど、所詮は疑似。サーヴァントならざるサー・ケイのつくりだした宝具など、仮想構築するのだって、本来かなわないはずだ。それほどサーヴァントという存在は隔絶している。

無理をすれば、発動さえせずに、騎士だけが死ぬ。

「サー・ケイ……っ！」

「大丈夫だ」

初めて。

初めて、ほんの一瞬だけ、その素顔が見えたのだ。仮想宝具を構築するために、膨大な魔力を集積させた結果だったのだろうか。

いかにも人の悪そうな、しかしどこか困ったような、はにかんだ笑顔が。

おそらく、本来のサー・ケイの素顔そのものではない。最初から本人が自己申告していたように、骸王がアーサー王そのものではないように、本体であるアッドと混ざり込んだ貌かおのはずだ。

だとしても、いやだからこそ、自分にとっては……



「お前は、大丈夫なんだよ。愚図グレイ」

聖鳥ヘルメスの砂羽が、射出される。

こちらを見ていた騎士が、その絶大な破壊を前に振り向き一吼えた。

「仮想宝具展開—儚くも忘れじの城キャメロット・イマージュ！」

いいや、それは美しい城塞そのものか。

霧によってつくられた、麗しの城塞キャメロットが、騎士を取り巻き聳え立つ。遙かな伝説の時代より、幾多の詩人に謳われてきた白亜の城。華やかなりし円卓の騎士たちが集い、彼らが一丸となっている内は、いかなる蛮族も怪物も寄せつけなかったという。

ああ、仮想構築すらかなわないと言った。無理をすれば発動さえせずに、死ぬだけだと。そんな不可能を、今騎士は成し遂げていた。

なのに。

それほどの奇蹟さえ、所詮は紛い物と断じるごとく、聖鳥ヘルメスの羽の爆撃が襲いかかる。

硝子の城の、ようだった。

ほんの数秒ほど、爆撃を城塞は押しとどめ、それきりであっけなく碎け散ったのだ。

「ちくしょう、だが清々した！ あんなお綺麗な城、大っ嫌いだったのさ！」

笑い声と共に、爆撃が騎士を覆う。

凄絶に巻き上がった粉塵の向こう側へと、彼の姿が消え失せる。

聖鳥ヘルメスが、高らかに鳴いた。今度こそ勝利を確信したか。

だが、別の現象が新たに生じた。さらなる爆撃を見舞わんと翼を膨らませたとき、粉塵の内側から、何かが聖鳥ヘルメスへと突き刺さり、絶大な威力で爆発したのである。

聖鳥ヘルメス自身の砂羽が。

「——っ！」

爆風の余波に手を掲げながら、自分はその意味を悟って、嗚咽を噛み殺した。

霧の城塞は、おびただしい爆撃から、騎士の身を守ったりはしなかった。もとより、そんなことは、騎士も期待していなかった。かの城塞を大嫌いだったと叫ぶ彼の仮想宝具にそんな力が宿るはずもない。しかし、その代わり、自らを碎いた聖鳥ヘルメスの羽の一部を取り込み、反転射出するという、イカサマめいた性質を実現させていたのだ。

聖鳥ヘルメス自身の爆撃ならば、通用するのは当然。天空を舞う七大兵器が、大地のすぐ近くへと引きずり落とされていく。

……この騎士がいかにも軟弱で、実力で正面から打ち勝ったことなどまるでなくて、しかしいかなる騎士や怪物にもただ敗北することなどなかったように。

彼の命を、体現するように。

「サー・ケイ！」

声は、返らなかった。

口の悪いあの騎士は、最初から何かの間違いだったみたいに、消えていた。当然だ。たとえ爆撃を食らわなかつたとしても、サー・ヴァントですらない身で宝具を仮想構築させたのならば、一時的な靈基など残らず燃え落ちる。

とある言葉を、自分は思い出していた。

ロンゴミニアドを使用する際、あの十三拘束で、彼はこう言っていたのだ。

一時は、生き延びるための戦いである。

最初に、自分を承認してくれた声。

だから、生き延びようとした自分を、評価してくれたのかもしれない。今にもその場に座り込んでしまいそうな衝動を、自分は必死に堪えていた。そうしてしまえば、騎士サー・ケイが命がけで残してくれたものが、打ち砕かれてしまう気がしたから。

「サー……ケイ……」

呼んでも、返事のあるはずもない。

代わりに、

「……イッヒヒヒヒ。ずいぶん寝ぼけていたな」

大鎌が、奇怪な金切り声をあげた。

ほんの一日足らず離れていただけの声音が、どうしてこんなに懐かしいのか。

「……アッ……ド……？」

「ヒヒヒヒヒヒ！ ようやく目が覚めた。記憶はアレと共有してたから状況は分かってるが、よくもまあこんなややこしいことにしやがったもんだな！」

いつもの調子で、大鎌に開いた目玉がぎょろりと動き、ある意味表情豊かに語りかけてくる。

どうしよう。泣きそうだ。

ずっと泣いてばかりな気がする。自分はこんなに無力で、肝心なときに役に立たなくて、だけどどうしても、今だけは戦わなきゃいけない。

「アッド……！」

ぎゅう、と大鎌を握りしめる。

「痛ったたたたたたたたたたた！ こらてめえ！ 馬鹿力で握りしめるな！ こっちが戻ってきた分だけ、『強化』も増幅されてるのを忘れてんじゃねえだろうな！」

その通りだ。

自分とアッドとで『強化』のための魔力吸収は分担している。これだけ大マ源ナの濃い空間で、アッドが参戦したならば、その結果は必然だ。かつてないほどに、濃密な魔力が、自分の身を循環していた。

「力を貸して、アッド」

「あーあー！ 仕方ないから少しだけな！ ぴいぴい泣いてるんじゃないぞ！」

「当たり前、です！」

感情が堰を切ってしまいそうなのを堪え、自分は全力で地面を蹴った。

*

騎士の仮想宝具が、聖鳥ヘルメスの砂羽を打ち消し、ばかりか一時的にとはいえ大地につなぎ止めたのを、硬い面持ちで、エルメロイII世は見守っていた。

「……ああ」

そうなるだろう、と思っていた。

任せろと言った背中に覚えがあった。もはや帰らないことを覚悟した背中だ。かつて、彼の人生を定めた王も、同じように真紅のマントを翻していた。

少しだけ、羨ましかった。

「死者に心を残すな、とは言ってくれる」

淡く、苦笑する。

彼の人生に対して、これほど痛烈な言葉はあるだろうか。

御伽噺は嫌いじゃなかった、というのはフォローのつもりかもしれないが、あれだけ口が悪ければ、円卓では鼻つまみ者の扱いだつただろう。

そして、なくてはならない存在だっただろう。

「先生、指示をお願いできますか」

「ああ」

スヴィンの言葉に、エルメロイII世もうなずく。

天空を飛翔する聖鳥ヘルメスは、いまや大きく傾ぎ、制御を失っている。

その分だけ、七大兵器としての演算速度も落ちていた。まだ決定的ではないが、今の内に準備しなければならることは山とある。

「フラット、構築した術式を念話で送り込む。おそらく、あのロゴスリアクトに介入するにはこちらを使った方が効率的なはずだ」

印形とともに、魔力を注ぎ込む。

直接思念情報を転写されたフラットが、二度瞬きした。

「これって教授……ハートレスのウェビングの？」

「ああ。理屈だけなら分析できていた。お前ならこれで十分だろう？」

「さっすが教授！ 任せてください！ こんなの鬼に金棒、マリオにスター、空手道にブーメランですよ！」

もはや、円卓の騎士はいない。

次の聖鳥ヘルメスの爆撃に、彼らは耐えられない。無防備に羽を喰らうこととなれば、ほぼ間違いなく、誰も生き残れないだろう。

それでも、もう誰も怯まない。

*

フラット・エスカルドスの二つ名は、天恵の忌み児であった。

エスカルドス家は、時計塔においても、稀に見るほど古い家系だ。通常なら、よほど長命の魔術刻印でも腐敗してしまうほどの年月。その上で、少年が生まれるまで、大した魔術師を輩出してきたわけでもなかった。おおよそ神秘は古いものほど力を持つとされる、魔術師の世界の中で、エスカルドス家は稀な例外だったと言える。

ではフラットという神童が生まれたことで、エスカルドス家が歓喜したかというと、それも違う。

最初はそうだった。

家系が古い以外は凡庸、歴史倒れなどと嘲られていた一族は、ついに大輪の花を咲かせるときがきたと、大いに盛り上がった。

しかし、その喜びを享受し続けるには、あまりに少年は優れ過ぎていた。

異端過ぎた、とも言えるだろう。

事実、彼は両親にさえ殺されかけたのだから。

ゆえに、天恵の忌み児。ほとんどの魔術師が垂涎の、類なき天恵を与えられながら、忌み嫌われた子供。

(うーん、なんで今更、こんなこと思い出したのかな？)

エルメロイII世から伝達された術式を再構築しながら、少年は考える。

ずっと、実力を出してはいけないと思っていた。そうすれば、まわりが不幸になるのだから、適当に手を抜いた方がマシだ。笑顔は偽ればいいし、表情筋を魔力で操るぐらいはたやすい。偽装を見抜ける相手なんていやしない。

でも、それは。

教授と、スヴィンに出会うまでのこと。

—『先生、先生！　こいつ、すごくとっちらかった臭いがするよ！　僕が壊していいですか！』

—『ええ?!　本当にこいつが僕の後輩になるんですか?!　だってこのいがいがしてる臭い、絶対先生を困らせますよ！　噛まれる前に噛みちぎった方が！』

ああどうしよう。それだけはまだ秘密にしてるのだ。

教授はもちろんのこと、開口一番そんなことをスヴィンに言われて、総毛立つぐらい嬉しかっただなんて。

(.....そっか。それはそうだね！)

舌なめずりする。

今になっては、単なる過去の確認だ。少年はもう恐れない。自分の才能も、才能を駆使することも、あるいはその先へと踏み込んでしまうことも。

だって、そうだ。

「さあ、待ってろ」

墜落した、聖鳥ヘルメスを睨みつける。

今ここは、自分が全力を振るって構わない—ひょっとしたら全力でさえかなわないかもしれない、待ち望んだ場所なのだから—！

「当たり前、です！」

うなずき、自分は大地を蹴った。

騎士サー・ケイの消滅した地点を一足で追い越し、さらに蹴る。

振り返らない。そんな時間などない。彼がくれたこの刹那を、そんな風に消費するなんてありえない。

聖鳥ヘルメスが再び飛び立つ前に跳躍し、同時に、自分は叫んでいた。

「アッド！ 第一段階応用限定解除！」

「イッヒヒヒヒヒ！ あれは初めてだな！ うまくやれんのか！」

一瞬匣に戻った大鎌が、ルービックキューブみたいに組み変わり、変形した。

それは、巨大な翼状のブーメランだった。

ただし、今使用したのはブーメランとしてではなく、滑空翼としてだ。けして長距離を飛ぶことはかなわないが、充分な助走がついていれば、ごく短距離の滑空だけはなしうると見たのである。今までまともに使ったことのない機能だったが、まるで誰かに導かれるみたいにして、自分の身体が空を滑った。

転がり込むようにして、聖鳥ヘルメスの背中へと飛び乗り、そのまま駆ける。

聖鳥ヘルメスも、それに反応した。

飛び乗った背中から、赤い砂の槍を形成し、こちらに向かって乱射してくる。

「アッド！」

再び大鎌へと戻して、それらの槍を迎撃した。

目指すべき場所は、分かっている。

ロゴスリアクトが精神のアーサー王一骸王を取り込んだままだとしたら、それも当然だったかもしれない。

背中の一点に、はっきりと自分には視えている。

砂槍の一群を切り裂き、続く攻撃は身をよじって回避。道化クラウンめいた身軽さで、綱渡りよろしく槍の上を、さらに蹴る。

その中空から、思い切り、短剣を投げ放ったのだ。

もちろん、それでは表皮にしか刺さらない。侵刃黄金イロウシェンの切れ味はせいぜい普通の短剣と同程度だ。聖鳥の核を深く穿つなど、達成できるはずもない。砂の槍も気にせずに、こちらを貫くべく殺到する。

だけど、

「第一段階応用限定解除・破城槌バタリング・ラム！」

さらに変形したそのカタチは、破城槌。本来は複数人で城門を破る、攻城兵器の名。

サーヴァントでさえDランクの魔力放出スキルに匹敵する、アッドの中でも最大の攻撃力を誇る形態。残った魔力のありったけをそこに注ぎ込んで、自分は吼え猛った。

「あああああああああああああ！」

襲いかかった砂の槍ごと、叩き伏せる。

破城槌で、表皮に刺さった侵刃黄金イロウシェンを思い切り打ち込むー！

*

大きく、聖鳥ヘルメスが揺らいだ。

今度こそ地面へと墜落し、自分の身体も投げ飛ばされる。

ギリギリで受け身だけはとった。偶然ではあったが、師匠たちが待機していたのと同じ方角だった。あるいは、聖鳥が、師匠たちを攻撃しようとした結果だったかもしれない。

いずれにせよ、墜落した聖鳥を見やり、師匠が叫んだのだ。

「いまだ、フラット！」

その声とともに、呪文スペルが唱えられた。

「干渉開始ゲームセレクト！ 全回路接続サーキット・フルコネクト！」

フラットの手から、光が走る。

複雑に数字や記号を溶け込ませた光だと、自分の魔術回路は感じた。

いいやフラットだけではない。その光の大本はスヴィンだ。少年の肩に手を置いたスヴィンから、膨大な魔力が供給されているのだった。力強い精才氣ドの助けを受けて、またスヴィンの嗅覚の支援も受けて、フラットは巧みに光を操作する。

光は水晶球へと伸びて、おそらくは師匠から預けられた術式の効果によって、さらに神秘の鎖へと変じた。

赤き錬金術師の聖鳥を、神秘の鎖が捕縛する。

しかし、聖鳥もけして攻め込まれるばかりではない。ついさきほど、天才少年たちを狼狽えさせたように、鎖を別の力が逆流するのを感じた。

自分には、それ以上のことは分からぬ。

ただ、聖鳥ヘルメスとフラットたちの狭間で、たった今勝利の天

秤が揺れ動いているのだろうとしか。

時間さえ分からなくなるほどの、濃密で不可視の攻防。

「どちらが……」

脱力しきった身体で、自分は茫然とその様子を見守っていた。

ふと、その鼻孔を嗅ぎ慣れた香りがくすぐった。

師匠が、葉巻を吸っていたのだ。

自分が見つめている間に、取り出したらしかった。

「そんのは決まっている。ここまで型にはめた時点でな。相手の性能が分かっていなければ、逆にやられることだってあるだろうが、そのおおよそ最初の接触で知れている」

師匠が囁くのを、自分は不思議な気持ちで聞いていた。

その目が、かすかに細められている。

羨むように。

妬むように。

彼方の星でも、見つめるように。

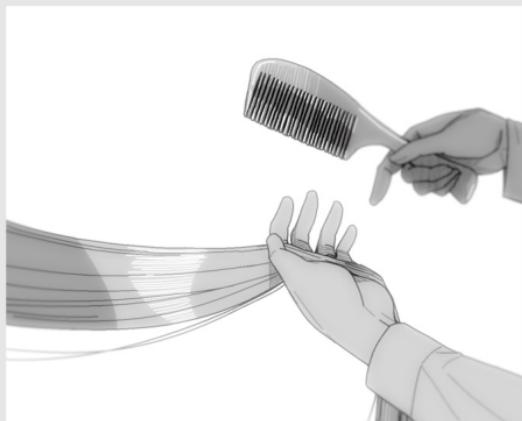
「一だったら、私の教え子が負けるはずないだろう」

けして無理な強気でも、過剰な信頼でもなく、師匠は当たり前のように言った。

—そして。

その通りになったのであった。

◆ 終章 ◆



「一母親に、会わなくていいのかね？」

問い合わせてきたズエピアは、陽光を避けるべく木陰に佇んでいた。

野外である。

村から離れた、山の麓であった。

夕暮れで、太陽も八割がた地平線に落ちているのだが、アトラス院の院長として陽光の対策に成功したというズエピアでも、まだ直射日光はいささかの苦痛を伴うらしい。いつものマントに加えて、頭からはフードをかぶっていた。

「……はい。母さんは、無事だったんですね」

「ああ。フェルナンド司祭と双方瀕死だったので、それなりの措置を施した上で、シスター・イルミアともども麓の聖堂教会ゆかりの病院近くへ移動させてもらった。命に別状はあるまい。聖堂教会は、君の母親が身代わりだったことも知らないし、もはや骸王との縁も絶たれているから、魔術的なサンプルにもなりはしない。……結果として言えば、あの村では誰も死ななかった」

なんだか、冗談みたいだ。

泰山鳴動して鼠一匹。あれだけ大げさ極まりない騒ぎで盛り上がったあげくに、結果はそれだけのこと。

あるいは、それだけのことに、集約された。

ぶるり、と震える身体を擦る。二周目の夏に触れていた自分たちには、現実の冬の風がいささか堪えた。

「あえていえば、精神のアーサー王一骸王は例外かもしれないが、彼女にしたところで、精神モデルとしてロゴスリアクトの内に戻っただけだ、精神のみの存在にとって時間はあやふやなもの。地底にいた年月も、ほんの数分の午睡も変わりはすまい」

すでに、戦いから半日ほどが経っている。

あの空間から戻された自分たちは、ズエピアが後始末と称した作

業を待つ内に、いくつかの説明を受けていた。

いわく、アーサー王が復活するか履行不可能と判断されるまでロゴスリアクトを貸与し、アトラス院はこの儀式を妨害しないとされた、アトラスの契約は続行。

今回の要因—母親および精神のアーサー王との接続を切られたロゴスリアクトは、現在自己診断・修復フェイズに入っているらしい。おおよそ数年は起動しないだろうし、冬木市の聖杯戦争の間隔を考えれば、しばらくは心配いらないだろうとのことだった。

もちろん、村で最も熱心にアーサー王を信仰していたあの老婆が諦めたわけではないだろうが、諦めなくともどうしようもないとは言える。彼女が聖堂教会との戦いまでを決意したのは、肉体と精神と魂が揃うチャンスがあったからで、それが消え失せてしまった以上、今は動きようがあるまい。

「拙が生きていることは、母は分かっているでしょうか？」

「それは伝わってるだろう。なにしろ、一時はロゴスリアクトと接続していたんだ。常人の脳ではあの情報量は欠片も受け容れられないだろうが、それでも君が生きていたという印象程度は残っているはずだ」

「だったら、いいです。拙が生きていることさえ伝わっているなら、それだけで」

自分が会いに行けば、万が一あの村に伝わることもあるだろう。そうすれば、自暴自棄になった老婆やほかの信者が暴走することもありえる。

「なんだったら、変装して、会いに行く手もあるよ？」

こちらの考えを悟ったのか、フラットが隣から言ってくれた。

そういえば、あのボタンにかかった幻術の術式はそのままで、こちらに戻ってきたときは、自分が違う顔になっていたからびっくりしたものだ。二周目に入ってからの自分たちは、ロゴスリアクトによる仮想再現だったらしく、おおよそ傷も残っていなかった。

「大丈夫です。それに、拙にも母さんにも、もう少しだけ時間が必要でしょうから」

必ず、会おうと思う。

でも、今じゃない。もっときちんと、心の整理がついてから。

母が自分にやってくれたことに、どんな意味があって、どんな気持ちが込められていたのか。もう誤解しないよう、ひとつひとつ再確認を終わらせてからにしたかった。どれだけの時間がかかるのか、まだ分からぬけれど。

いや、それ以前に、多くの村人はアーサー王の復活の儀式を始めようとしていたら、突然夏が終わり、冬が到来したことに困惑しているだろう。今後、あの村にいかなる未来が訪れるかは分からないが、今まで通りではあるまい。その意味でも、母が聖堂教会ゆかりの病院に運ばれたというのは安心できる材料に思えた。

そんな思考を進めていると、ふと師匠が口を開いたのだ。

「……現時点では騎士団なりが動いていないということは、聖堂教会もまだ事態を認識していないようだな」

「あれ？ それっておかしくないですか？ この半年、村から人々が消えていたということは、あのシスター・イルミアとフェルナンド司祭との連絡も半年取れなかったんですよね？ もともと、あの村の監視のためにつけられていたのに、そんなに悠長に構えてることってありますか」

スヴィンが、鋭く指摘する。

確かに、それはもっともだ。もともと危険視していたのなら、連絡が取れなくなった時点で、聖堂教会本体が乗り出す方が普通だ。そうしなかった理由が、何かしらあるとするならば……

「誰かが情報を操作していた……？」

「ハートレス、か」

「さて、どうだろうね」

はぐらかしたズエピアから視線を切って、師匠が生徒たちに命じる。

「フラット、スヴィン。先に、麓の町の様子を確認してもらえる

か。問題ないと思うが、それこそ聖堂教会なりが来ていたら厄介だ」

「わっかりました！」

「すぐ戻ってきますので！」

フラットとスヴィンが一礼して、さっと踵を返した。

最初は街道を普通に歩いていたのに、なぜだか途中で一方的な言い合いを始めて、魔術交じりの駆けっこを始めたのがなんとも彼らしくはあった。傷はともかく疲労は残っているはずなのに、もうあんなに元気なあたり、恐るべきはエルメロイ教室の双璧というべきか。

それを見送ってから、師匠はズエピアに向き直った。

「ところで、ひとつ、ひっかかってることがありました。お別れする前に、尋ねても構わないでしょうか」

「なんだね？」

促したズエピアに、師匠が続ける。

「順番が、違うんじゃないかと」

「順番？」

「四つのルールは、墓守の魔術刻印と関連付けられていました。つまり、西暦以前まで遡る、ブラックモアの一族に伝わっているものと考えてよいでしょう」

「なるほど、道理だな」

うなずいたズエピアの頭上で、鳩が鳴いた。

夕暮れの空に、その声は寂しそうに聞こえた。

ベルサックも、当然この現実に戻っているはずだ。これからあの村がどうなっていくとしても、自分にさまざまな知識と技術を仕込んでくれた墓守だけは、土地を離れることはないのだろうと思えた。命が果てるそのときまで、ブラックモアの墓守として生きてい

くのだろうと。

「ですが、黒い聖母はおそらくモルガン・ル・フェにちなんだもの——アーサー王の時代のものです。彼女の時代は西暦よりも後。諸説ありますが、おおよそ五世紀頃とされています。なのに、墓守の四つのルールに、黒い聖母が入っている理由はなんでしょう」

「別に、矛盾はしない。後の時代に、誰かがルールを追加したんだろう。もともとブラックモアの墓守は、優秀な魂の運び手ソウル・キャリアーだ」

「そうですね。魔術刻印は代々新しく魔術を刻んでいくものです。至極自然なことだと思います。……ですが、そもそも四つのルールなんてものが追加されたのは、案外近い時代ではないでしょうか？たとえば数百年前。あなたがアトラス院の院長に就任されたのと同時期では」

師匠の言葉に、一瞬、ズエピアの眉が揺れた。

「何を言いたいのかね」

「さきほどの順番と逆になりますが、四つのルールの中で、本当に古くからあったのは黒い聖母だけだと考えます。アーサー王の因子を判別し、効率的に高めるためのものです。あの像はそうした魔術礼装でもあったでしょう。ですが、残りのルールは実際には必要ない。……ええ、村人を不用意に神秘に近づけないためとか、沼の結界を隠すためとか、もっともらしい理由はつけられますが、結局のところ、残りのルールは単に何かをしないことだけで設定されてます。たとえば、定期的に見守るアトラスの鍊金術師が、人々のパラメータを計算しやすくなるように」

最後の言葉に、自分は思わず目を剥いた。

「この土地のロゴスリアクトは、アトラスの契約が履行されるか、履行不能が決定されるまで回収できない。あなたはどちらかが決定するのを、よりやりやすい——計算しやすい形で監視していた。無論、直接監視するための礼装などを置くこともできたでしょうが、あなたが直接介入するのは契約違反だと、今回の件ではっきりしています。魔術刻印と同様、四つのルールはあくまでブラックモアの墓守に対してのもの。あなたが可能な範囲で、当時の墓守とともにギリギリの線で設定したものじゃないですか」

師匠の話が終わると、鍊金術師はやれやれとばかりに肩をすくめた。

否定しないのが、この場合、何よりの肯定だった。

大きく、師匠がため息をつく。

「まったく、気長で用意周到な話です」

「アトラス院の鍊金術師も、魔術師には変わりない。まるきり信用したりする相手じゃないと、最初から分かっているだろう？」

顔をしかめた師匠に、おかしそうに鍊金術師が言う。

「…………」

啞然として、自分はその話を聞いていた。

今回の件だけで、ズエピアの印象は二転三転してしまう。一体どんな風に捉えればいいのだろう。最初はいかにも恐ろしげな謎の人物と思い、ロゴスリアクトの故障が知れてからは世界の守護者と見えて、今はしたたかな商人のようだ。いや、きっとそのすべてこそが、ズエピア・エルトナム・アトラシアという死徒であり、鍊金術師なのだろう。

「やはり、最初に気づいたのはそれだったかな？」

「ええ、地底の神殿で、黒い聖母とモルガン・ル・フェについての話をしたときです。今思えば、一周目のあなたはあからさまなヒントを言ってましたからね。ここの一族と縁がある死徒が二千年以上前に名を馳せた、とか」

それで、ライネスから聞いた話を思い出した。

—『ブラックモアとは、もともとこの一族と縁がある、古い死徒の名でね』

—『鳥を使役する魔術師あがりの死徒として、二千年以上前に名を馳せたんだが、残念ながらすでにこの脚本では滅んでしまっている』

まさか、こんな風につながっているとは。

「後は順繕りに推測しただけです。あなたがここにいる理由。人を作形する三要素や墓地の話までしていたこと。もっとも、確信に至ったのは、情けなくもハートレスのウェビングを解読したときですが」

「私にとっても賭けだったとも」

夕闇で、ズエピアは溶け込むようにうなずいた。

「幾多の可能性きやくほんは見える。検討することもできる。しかし、やはり現実はひとつしかない。ふむ、では私とハートレスが取り引きした内容を、訊かなくてもいいのかね？」

「ああ。それだけはもう確信を持っています。あなたが何を得たかはともかく、ハートレスが何を求めたかは明白です」

「ほう。確認しても？」

興味深そうに訊いたズエピアに、師匠は躊躇いなく返答する。

「かまいません。もし、ハートレスがこの村の術式についてあなたに尋ねたなら、グレイの母上を情報源にする必要はない。また、ハートレスは異様なまでに慎重一ある意味で私と似て、臆病なぐらいで予備策を張り巡らせている一だとすれば、あなたに依頼するのはひとつだ。自分のことについて未来を演算しないこと、でしょう」

そう結論して、続ける。

「だからこそ、彼の関係した一連の事件は、あなたにも事前に読み解ける範囲が限られていた。今回後手後手にまわった理由のひとつでしょう」

「ご名答。……加えて言えば、彼から提供されたのは聖杯戦争の過去データでね」

一瞬、聞いていた自分の身体が強張った。

ハートレスは、冬木市の聖杯戦争について、綿密に調査していたことがあった。アトラス院の院長すら知らぬデータを出せたのも、そうした経緯からだろう。

しかし、そんな情報をズエピアが求めていたとすれば……

「ああ、そんな気をはらなくてもいい。別に、私が聖杯戦争に参加するつもりだと、そういうことではない。単に、あの聖杯戦争を形成している術式は、私にとって興味深かつただけだ。そう、魂すら再現して英靈を呼び出すあの術式は、私が希求する第三魔法との因縁がある」

肉体と、精神と、魂。

ここに来るまでもその話は、何度か出てきていた。

ただし、魂だけはいかな魔術をもってしても再現できないとも。

その例外が、第三魔法。本来魔術でも不可能な一人類ではいまだ実現できない、その先へと指をかけるための方法。

ただ、それは今回の件とも関係のない事柄なのだろう。師匠もそれ以上踏み込もうとはしなかった。必要以上の知識は、かえって危険を招くこともある……とは、よく師匠が講義で言っていることだ。

代わりに、ズエピアは小首を傾げた。

「どうかしたかね？」

「もうひとつだけ……尋ねてもかまいませんか」

「好きにしたまえ」

もう一度、鴉が鳴いた。

どこからか、夕餉の香りがした。錯覚かもしれない。あるいは麓の町で、誰かがつくっている料理の香りが風に乗り、たまさかここまで届いたのかもしれない。母がつくってくれたシチューを思い出した。当時は寒々しくさえ思えた匂いが、今はただ懐かしかった。

師匠は、こう訊いたのだ。

「私がやってきたことは、あなたの視点から見て、正しい選択だったでしょうか？」

「ナンセンスな質問だ。世に間違った脚本はあるが、真に正しい選択などというものは存在しない。そんなものがあれば、アトラス院はずっと昔に救われているだろうとも。あるいはとっくの昔に終わり果てているだろう。どっちが楽だったかは分からないが」

そこまで言って、ズエピアは台詞を切った。

瞬きしてしまった。

ほとんど地平線に太陽も落ちきり、粘っこい夕闇に隠れて、何か見たことのないものが、彼の唇に宿ったように思えたから。

「だが、その上で言えば……ほかの誰にもできない、君だけの選択をしたな、君主ロード」

「……え」

間抜けな声が漏れてしまった。

ひょっとして。

ひょっとして、と。

フラットとスヴィンが戻ってくるのさえ気づかずに、ずいぶん長いこと、自分はその想像にとらわれていた。

常に超然として、ある種の狂気を発露したときでさえ、人というよりはコンピュータのバグじみていたアトラス院の院長—そんな彼が漏らした、あまりに人間臭い、忘れがたい微笑だったように思えたのだった。

*

ロンドンに戻ると、何よりも多くの音が耳についた。

この街は、さまざまな響きに満ちている。ラジオやテレビから流される音楽はもちろんのこと、通行人のお喋りや車の排気音、子供の泣き声、あちこちの工事の音さえも渾然一体となって混じり合い、ひとつの楽隊のごとき様相を呈している。

あの田舎にも、もちろん多くの音はあったのだけど、多分一番の違いはその主体が人間であることだ。

人が生きていることで、増る堀つぼのごとく集まることで、奏でられるオーケストラ。

「…………」

初めて故郷の山を下りて、ロンドンにやってきたときは、立ち並ぶビル群をまるで墓標のようだと思った。どこからか大量に現れ、灰色や茶色の建造物へ吸い込まれていく人々は、まるで陰府を彷徨い歩く死者の列だと。

今は、違う。

ビルはビルで、墓地は墓地だ。いくら人が多くなるが、ひとつの土地に群れ集おうが、それはそれだけのこと。特別な意味を牽強付会する必要はない。多分こんな感想も時間が経てばまた変わっていくのだろうけれど、今の自分の気持ちはわりと嫌いじゃなかつた。

昼までにいくつかの用事をすませてから、今日はバスに乗った。

スラーの通り近くで降りて、ほど近い屋敷を目指す。

十分足らずで、辿り着いた。

言っていたように裏庭に回って、二度チャイムを押してから、勝手口バックドアをくぐる。さすがに慣れてきたもので、案内を待たずとも、迷わずに廊下を歩むことができた。それでも、色鮮やかな絨毯を踏むたび、ほんの少し脈拍が速くなるのは仕方ないと思う。

ライネスは、応接室で待っていた。

こちらの手のあたりを見て、何か思いがけないものでも見たみたいに、瞬きした。

「グレイ。君、その手に持つてるのは？」

「あの、一緒にお菓子を食べられないかと思って。……いつも、ライネスさんに用意してもらってばかりですから」

品の良い応接室には似合わない、安っぽい紙袋を手にしたまま、自分は硬直していた。

一応百貨店で買い求めたものなのだが、なにしろ美味しい店を見つける審美眼など自分には皆無だ。こういうのも経験値がものをいうのだと、嫌でも思い知らされた。

「私に、君がかい？」

「は、はい。拙が、ライネスさんに、です」

しばらくライネスは神妙な顔で固まつていて、お見合いみたいになってしまった。

それでも、一生懸命に掲げていると、彼女の方からこう言ってくれた。

「トリムマウ、合いそうなお茶を見繕ってくれるか」

「分かりました。お嬢様」

完璧なお辞儀カーテシーを行つて、水銀メイドが部屋を退出する。

それから、彼女が用意してくれた白磁の皿に、こちらが用意してきたチョコレートを載せてもらうと、なんだか申し訳ない気持ちになった。

並べた見かけだけでも、ライネスが普段用意してくれているものにはまるで及ばない安物だ。すすめられて一口食べて、なおさら猛烈に恥ずかしくなる。耳まで熱い。道化もいいところだ。どうして自分は、こんな真似をする気になったのだろう。

はたして、自分の目の前で、チョコを食べたライネスは不思議そうに目を見開いていた。

自宅だけに、目薬をささぬ間の綺麗な焰色で、なおさら申し訳な

さが募るのだった。

「……美味しいな」

「あ、あの、無理なさらなくても」

「いや、どうしてだろうな。確かに味は大したことはない。テンパリングに失敗してるから舌触りがモソモソしてるし、そもそもカカオの品質がいまいちだから深みも足りないんだが……なぜだろう。美味しいなこれは」

もう一度、少女が首をひねる。

ひねりながら、何度もぱくりと口に含んでいるから、嘘というわけでもないらしい。考えてみれば、社交会的な必然性でもなければ、お世辞を言う相手でもない。

自分も、なんだか騙された心地で、もう一度つまんでみた。

二口目からは、意外といけた。

ライネスみたいな、細やかな味の分析はできないけれど、そう、うん、美味しかった。

「おふたりだからでは、とトリムマウは指摘します」

「そんなわけないだろう！　他人との関係性なんぞで味が変わるか！」

トリムマウの言葉に、珍しく勢い込んでライネスが返す。

「何の話ですか？」

「む。なんでもない」

すんと鼻を鳴らして、ライネスはこちらのティーカップを指した。

「お茶も飲みたまえ。菓子の時間は双方を楽しむものだから」

「は、はい」

言われた通りにして、また驚く。

トリムマウの淹れてくれたお茶を飲むと、平凡だったチョコレートはくるりと化けるようだったからだ。けして普段のライネスが用意してくれるほどの、夜空の星をデコレートしたみたいな鮮やかさではなくても、きちんと地に足のついた、落ち着いた甘さ。

一緒にひとつ、ふたつとつまんで、めくるめく贅沢な時間を味わう。

お菓子とお茶を互いに楽しみあえるというのが、とても嬉しくてたまらなかった。

それから。

故郷での話をゆっくりと聞いたライネスが、こう切り出したのだ。

「なるほど。報告は受けていたが、アトラスの七大兵器まで出てくるとはね」

呆れたように、ライネスが唇の端をつりあげる。

「次から次へと、いくら君主ロードとはいえ、とびきりの難事を引き寄せすぎじゃないか……とは思うが、こうなってくると偶然ではあるまいね。いや、ある意味で最初の出会いだけが偶然だったのかもしれない」

「…………？」

意味が分からなくて、小首を傾げると、ライネスは微苦笑した。

「君と兄が出会ったことだよ」

テーブルの上を、白い指が揺れる。

つう、と縁をなぞるように触れていった。美しい指だと思う。陶器人形ビスクドールみたいな、美しくあるための造形。でも、そうじゃないことを自分は知っている。彼女がここに至るために、どれだけの障害をはねのけ、どれだけの代償を払ってきたかを。

「もちろん、それとて兄が対サーヴァント用の人材を探していたことから起きたことだろうが、君たちの相性はそういうところとは別に噛み合ってる。……ある意味で、ハートレスもそうだろうが」

そこまで言って、少女は目を細めた。

「兄とドクター・ハートレスは、もっと以前から何かと噛み合いすぎている。だからこそ同じ現ノ代一魔リ術ッ科ジの学部長なんぞになつたんだろうが、この場合、必ずしも考え方が一致してゐるわけじゃないのが肝だな。どちらかといえば凹凸が合つてしまつてゐる、とでも言うべきか」

「凹凸、ですか」

「そうともさ。フラットとスヴィンみたいなもんだ。うまくいければ互いを補い合う関係を築けるだろうが、悪ければ……」

「悪ければ？」

訊き返した自分に、ライネスがチョコレートをふたつ持ち上げた。

両手に持つて、かつんと目の前でかちあわせる。

「どちらかが、壊れるしかないだろう」

その言葉に、心臓が跳ねた。ほかの誰かではなく、おそらくは最も師匠を知るひとりであろうライネスの口から出たからこそ、真に迫る説得力を持っていた。

対して、かちあわせたチョコレートをふたつとも口に入れてから、ライネスが足をぶらぶらとさせつつ、天井を見上げる。

「とはいえ、こちらの調査もちょっと妙な感じでねえ」

「何か、あったんですか」

「新年ということで、時計塔まわりのパーティも多かったし、この際だからあちこちつづいてみたのさ。貴族主義、民主主義、中立主義、それぞれの情報通をあたってみたんだがね……うん、やはり、あまりにも聖杯戦争の話は広まらなすぎている」

「話が？」

首をかしげると、ライネスは小さくうなずいた。

「ああ。そもそも、仮にもエルメロイ派の君主ロードだったケイネスが死んだわりに、聖杯戦争の扱いが辺境の一魔術儀式のままだ、とは思っていたんだがね。今回の第五次聖杯戦争に際して、時計塔は冬木市にわざわざ封印指定執行者まで送り込んでいるんだ。やっていることは十分な措置なのに、その噂がほとんど時計塔に広がっていない。情報の分布に落差がありすぎる」

少女の考察は、時計塔で、常に権力抗争の渦中にある者ならではの鋭さを秘めていた。

無論師匠にもその能力はあるが、やはりライネスに比べると劣る。経験もさることながら、持って生まれた性質と性格が大きいのではないかと、密かに自分は思っていた。

「こと魔術師の世界において、そんなことができる組織は、ひとつしかない」

もう一口、今度はアーモンドチョコレートを口に入れてから、少女は人差し指をあげた。

「法政科だ」

自分の脳裏に思い浮かんだのは、当然、これまで何度も邂逅した法政科の魔術師だった。蛇を想起させる、極東の民族衣装を纏う女ひ性と。

化あだし野の菱ひじ理り。

彼女なら、どんな手を打ってもおかしくはない。剝離城アドラでも魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでも、師匠の推理に一步もひけを取らなかった魔術師。

ただ、自分が今唾を飲み込んだのは、また別の理由だった。

「あの後ズエピアが、似たことを言ってました」

「ほう。どんなかな？」

興味深げに、ライネスが身を乗り出す。

おずおずと自分が口にしたのは、別れる寸前、何気なくといった素振りで、かの錬金術師からかけられた台詞であった。

「ハートレスは君の敵かもしれないが、時計塔の敵とは限らないぞ……と」

ぞくり、と胃の底に嫌な感覚が溜まっていた。

けして、時計塔は清廉潔白な組織ではない。いくつもの人間の思惑が絡み合い、権力の多重構造で腐敗している……という意味では、それこそアトラス院など比較にもならないほどだ。誰が味方で誰が敵かなんて、分かったものじゃない。

だとしたら。

時計塔の中にハートレスの味方がいると考えた方が、自然ではないか。

「なるほど。こちらでも調べておくが、もしも法政科が相手だとしたら期待しないでほしい。……そもそも、法政科が一枚岩だとすら限らないがね」

いささか憂鬱そうに、ライネスが片目を閉じる。

権謀術数は日常茶飯事の時計塔といえども、法政科は特別な名である。彼女が打てる手も必然限られてくることだろう。

「ところで、ズエピアが言ったのは、それで全部かな？」

ライネスが、猫の悪戯みたいな仕草で、ずいとテーブルに乗り出す。

つぶらな目の中に、大粒の光が煌めいていた。男女を問わず、吸い込まれそうな魅力を感じる者は多いだろう。

「そ、そうですけど」

「本当に？ 本当かな？」

じり、じり、とライネスが詰め寄ってきたときだった。

「イッヒヒヒヒヒ！ 目を覚ましたら、ご馳走タイムじゃないか！」

右肩の固フ定ツ具クの内側から、突如けたたましい叫び声が湧いたのだ。

「アッド」

「ヒヒヒ、女子会とはグレイのくせに生意気だ！ この際だから俺も交ぜるといいぞ！ 俺は匣だから性別とかないんだが、まあそのときどきの有利でいいよな！ この際パジャマパーティでもなんでもお邪魔するが、俺好みの美女でも呼んでくれればなおよー」

ご希望と思われたので、固フ定ツ具クを外して、思い切り打ち振ってやる。虫を轟き潰したような悲鳴があがるが、気にしてやらない。やるものか。どれだけ心配をかけたと思ってるのか。

ライネスが手を叩いて喜び、トリムマウは澄ました顔の表面に喚く匣を映すばかり。

とても、楽しい時間だった。

ついついエスカレートして、アッドを苛めすぎてしまい、後で謝る羽目になるぐらい。

思わず、泣き出してしまいそうなくらい。

本当は、言われたことは、もうひとつあった。

だけど、それだけは、ライネスにもアッドにも明かせないのだった。

*

—彼の言葉は、こうだった。

ロゴスリアクトとの戦いの後。

アッドがまた眠っている際、ズエピアが水を向けたのである。たまたま師匠とフラットたちが今後を相談していたタイミングでもあり、こちらからは注意が逸れていた。

「今回の礼に忠告しておくが、以降、ロンゴミニアドは使わない方がよかろう」

「……え」

突然、そんなことを言われるとは思わず、自分は返事に窮してしまった。

「なぜ、ですか」

「君は、あの魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでロンゴミニアドを解放したのだろう。確かに、物語の幕を下ろすにはふさわしい宝具だとも。かつて舞台の主役を演じた英靈たちだとて、かの最果ての錨には一目置かざるを得まい。だが、不完全だったようだから良かったが、もしも十三拘束で可決され、完全解放されていたら、間違いなくアッドは破壊されていた」

「……あ」

その言葉が、ひどく腹に落ちた。

確かに、アッドがやたらと睡眠を欲するようになったのは、あの魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン以降だったからだ。あの睡眠は、アッドの修復に必要な休息だったのか。

「彼は極めて高度な礼装だ。ある程度までは自動修復する。だが、それでもギリギリだっただろう。不完全とはいえ十三拘束が解放された聖槍は、それだけの負担を強いた。無理もあるまい。たとえオリジナルでも、いささか手こする相手には違いない」

「オリジナル？」

「ふむ、気づいてなかったのかね？ もちろんアッドの記憶には制限がかかっているが、こんなのは、まがりなりにもサー・ケイの精神モデルを顕現させられた時点で、明白だろう。ましてや仮想宝具なんて構築できたとあってはほかにあるまい。もちろん、あれとて

オリジナルの演算空間の中だからこそできた離れ業だろうが」

そう言って、アトラス院の鍊金術師はこう告げたのだ。

「封印礼装としてのアッドの核は、ロゴスリアクト・レプリカだ」

*

鍊金術師の言葉は、抜けない棘のように、胸に刺さったままだった。

師匠なら、もう気づいているかもしれない。ズエピアが言った通り、推論を重ねれば到達する程度の事実である。師匠の觀察眼で見破られていないという方が、むしろ不自然なぐらいだ。

(……でも)

でも、アッドが壊れる可能性については？

ロンゴミニニアドを解放することなんて、ほとんどありはしない。しかし、ハートレスと関わっていくならば、そんな状況が来ないとも言えないのだ。まして、これだけ何度も聖杯戦争というキーワードが出てくるなら、極東の第五次聖杯戦争を間近に控えた今、いつ大事件が起きないとも限らない。

もしも、師匠やライネスに命の危険が迫ったら、自分はロンゴミニニアドを振るうのか？

そんな問い合わせ、頭の中を何度も往来する。こんなにひとつのことを考え続けたのは、生まれてから一度もなかったぐらいに。

翌日になって、自分は寮を出て、ドルイド・ストリートへ向かった。

肌寒い頃合いで、吐息が白く染まった。ほんの数日前、自分たちは夏を謳歌していたなどと言って、信じる者はこのロンドンに何人いるだろう。

まだ、エルメロイ教室の授業は本格再開していない。

なぜなら、最高責任者である師匠が復帰していないからだ。授業自体は、シャルダン翁をはじめとした現代魔術科が誇る講師陣が受け持っているため、特に問題はないのだが、なんとなく教室もしゃっかりしない感じではあった。

薄暗いドルイド・ストリートから、結界のなされた横道へと移る。

こちらのアフバラーットの方にも、たまに愛人志望のイヴェットが押しかけたりするのだが、ほかの熱心な生徒たちも抜け駆けされないようアンテナを張り巡らせており、結果、突然の決戦場になっては師匠に追い散らされる……なんて光景も、見ることがあった。

螺旋階段を上り、ノックをしてから、扉を開く。鍵はかかっていないで、玄関のすぐ向こうに、散らかった部屋が広がっていた。大量の本と書類と服と煙草と医薬品らしき壇と一珍しく酒と缶詰と、ほかいろいろが積み重なった、見事なまでの混沌である。

さらに奥に、いつもの人影が見えて、つい苦笑してしまった。

少し、リラックスしすぎではなかろうか。

ゴルディアスの結び目をモチーフとした複レ製ブ絵り画力を背にして、師匠は深くソファにもたれかかり——というか、半ば沈んでいたのである。

いかにもぐうたらな体勢で、無心にコントローラーをいじっている。

そんな風にゲームをしている師匠を見るのは、ずいぶん久しぶりな気がした。

「師匠、言っていたスナックとコーラを用意しましたが」

「そこに置いといてくれ」

液晶テレビの画面から視線を離さず、煙草を咥えたまま、師匠が言う。

少しだけ、口元に髪が生えている。ひょっとして昨夜からぶつづけで遊んでいたのだろうか。それはもちろん疲れを癒やすために、二日ほど自宅に引きこもるとは話していたけれど、まさかゲーム三昧になっていようとは。

いや。

前言撤回。そうなるんじゃないかとは、わりと思っていた。師匠のことだし。いつもの葉巻でなくて、安易に吸える煙草なのも、きっとゲームに集中するためだろう。

小さくため息をついて、こちらから申し出る。

「せめて、髪を整えて構いませんか？」

「好きにしてくれ」

一生懸命画面を見ながら、師匠が言う。

あんまり凝視しているので、眼精疲労にならないかと不安になるが、それこそ魔術でなんとかなるのだろうか。仮になるとしても、普通の医者にかかるより桁ひとつは多く持つていかれて、一週間ぐらいたる愚痴っていそうでもあるが。

ともあれ、梳りやすいよう姿勢だけまともにさせて、背後からそっと髪に触れる。

取り出した櫛を通して、毛先から整えていく。

いい加減な暮らしをしてるわりにもつれが少ないのは、魔術によるものだろうか。髪を伸ばしているのも魔術のためだとは知っているが、本来は女性魔術師のための技術で、男性がやったところで、リスクも少ないとリターンも大したものじゃないと自嘲していたのを覚えている。自嘲しつつも欠かさないあたりも、師匠らしかったけれど。

遊んでいるゲームはどうやらRPGらしく、主人公っぽい赤毛に鎧を纏ったキャラが剣を振るうたび、派手なエフェクトとともにモンスターが打ち倒されていく。師匠の遊ぶゲームはさまざまなジャンルにわたっているが、日本製のシミュレーションゲームとRPGがとりわけ好みらしかった。

「……ちょっと、いいですか」

と、尋ねた。

「ゲームしながらでよければ」

気もそぞろな返事が、なぜだかちょっと嬉しい。ほんのちょっとだけ。

テーブルの上の品々をちらりと見て、

「こちらの薬を置いていったのは、メルヴィンさんですか」

「ああ。ロンドンに戻ってきたその日にやってきて、疲労回復の魔術薬と缶詰と酒だけ無理やり押し付けていった。腹は減っていたし、ひとまず魔術薬と缶詰をもらったがね」

「やっぱり」

半分は必需品、半分は趣味の品で揃えるあたりが、メルヴィンらしい。とりあえず必要なものは受け取るという、師匠の性質をよく理解している。ついでに言えば、受け取った品もきっちりチェックして、師匠への貸しをリストにしているのだろう。あの自称大親友、気前もいいが取り立ても悪魔のごとしなのである。

だけど。

それ以上に、こんなとき師匠に会いに来てくれたという心遣いが嬉しかった。

今回の事件では、ひどく疲れた気がした。

解決こそしたが、師匠にも自分にも生傷が残っている。それは目に見えるものではなくて、いくら元気そうに見えても、突然立ち止まってしまいたくなる心の傷だ。

初めて死者も出ず、むしろ死んだはずの母や司祭を助けることに成功した。これ以上喜ばしいこともなく、安堵するべきだというのに、それ以上に粘っこい疲れが身体のあちこちに沈殿していた。

多分、終わっていないと感じているからだ。

まだ事件は終わっていない。最も肝心なところに、自分たちはまだメスを入れられていない。

しばらく、電子音と息遣い、櫛が髪を梳かすささやかな音だけが入り交じった。

それから、ふと師匠が呟いた。

「……あんなことは、尋ねるべきじゃなかった」

何のことかは、言われなくても分かった。

ズエピアに、自分が正しかったどうかと、訊いたことだろう。

「少しはマシになったかと思っていたが、やはり変わらずに未熟なままだ。人間というのはよほど成長しないと見える」

「初めて会った頃も、そんなことを言ってましたよ」

言いながら、自分も思い出していた。

—『私は、何も成長なんかしていない。あの頃から何も変わってなどいない。なりたかった自分になど、まるで近づけていない』

血の滲むような言葉だと感じた。

多分、あの台詞があったから、自分は師匠についていったのだ。この人は正しい答えはくれないかもしれないけれど、きっと自分と一緒に悩んで苦しんで傷ついてくれるだろうと、そう思えたから。

当時の想像は正しかった。

だけど、こんな風に苦しくなるなんて思わなかった。

「拙はもっと未熟ですから、いつも叫びたくなります。誰かに正しいと言ってほしくなります」

「怠慢だな、お互い」

「そうかもしれません」

なるべくゆっくり髪を梳かしながら、自分はうなずく。

また、しばらく沈黙が落ちた。画面の中の英雄は忙しく走り回っている。どうやら終盤らしくて、魔法使いなんかは画面を何度も切り替えないとならないぐらい、大量の呪文を覚えている。師匠がこんな魔法使いを操作するのは、ちょっと皮肉な気がしないでもない。

「これだけは言っておくぞ」

と、師匠が画面を見たまま、呟いた。

「友達は大事にしたまえ。たとえ、どうしようもない状況に追い込まれたとしても、私のために妙な代償を払う必要はない。弟子に守られる師匠なのは諦めるが、弟子にくだらない葛藤をさせるぐらいなら、さっさと死んだほうがマシだ」

「…………つ」

……見抜かれていた。

またアッドは眠りについているらしく、余計な口は出そうとしない。

ゲームをプレイし続けている師匠は、憎たらしくいぐら表情を変えない。こちらが悩んでいたことなどお見通しなのか、そんなことは知ったことじゃないのか。それとも、同じぐらいに悩んでくれていたのか。

「……はい」

と、小さくうなずいた。

ただ、ほんの少しだけ意地悪をしたくもなった。

「師匠は、ズルいです」

「む、そうかね」

「はい。だって、自分はよつちゅう無茶をして、犠牲を払ってま

す。他人にだけ要求するのは無責任だと思います」

「……申し訳ない」

自覚があったのか、素直に師匠がうなだれる。

「許してあげます。代わりにひとつ答えてください」

「なんだね？」

と、訊き返された。

髪を梳かしながら、密やかに呼吸を整える。

この数日、ずっと気になっていたことだった。急いで質問のカタチにまとめながら、こんな風に切り出す。

「私を知らない君と会う勇気がなかった、とあの二周目で言いましたよね」

「それこそ覚えてなくともいいんだが」

師匠の眉間の皺が寄った。

よほど当時のことは思い出したくないらしい。

正直に言うと、自分も恥ずかしい。もしも師匠が自分のことを知らなかったら、そのまま崩れ落ちて、碎け散ってしまったんじゃないかという自信があるからだ。

だけど、これだけはどうしても訊いておきたかった。

「師匠を覚えてない王様と、会う勇気は？」

「…………」

すぐには、返事はなかった。

「多分、師匠は覚悟はしてますよね。魔眼蒐集列車レール・ツエッペリンでも互いの記憶に残っているなんて幸せは、自分の人生では払いきれないって言ってましたから。でも、覚悟はあっても、その勇気はあるんでしょうか？ どうしたら、そんな勇気を持てるのでしょうか？」

勇気が欲しい、と思う。

正論など並べるより早く、もう一度母親に会う勇気が。

優しく見抜かれるのではなく、アッドやライネスに真実を告白する勇気が。あなたたちがいなくなったらと考えるだけで、怖くて夜も眠れないのだと打ち明ける勇気が。一体どうやったら、そんな心を持つことができるのだろうか。

力チャ力チャ、とボタンを押す音だけが続いた。

いくらだって待つていいようと思った。自分はあまり我慢強い方だとは思わないのだけど、ごく稀に、いくらでも待つてもらえる、そんなときはある。

今がそうだった。

やがて、

「第五次聖杯戦争を諦めた以上、会えることなど、まずないだろうが」

と、前置きしつつ、しなやかな指が煙草を挟んだ。

灰色の煙が天井との間にくゆり、その煙に載せるようにして、師匠が呟いたのだ。

「だけど……そんな奇跡が起こったとしたら、そのとき彼に、どんな風に話しかけたらいいんだろうって、そんなことは今でもずっと考えてるよ。だから、まだ私にも、そんな勇気はないんだよ」

微笑とともに、囁く。

「だけど、そのときになったら、勇気があってもなくても……うん、ただの間違いでも一歩踏み出せる自分でいたいと、そう思ってる。多分それだけだ」

恥ずかしそうに言った横顔が、すっと胸に入り込んだ。

あまりに真摯な眼差しで、苦しくなってしまうくらいだった。

アッドの正体も、時計塔の思惑も、ハートレスの暗躍も今だけは

遠く、自分はただ懸命に櫛を動かしていた。

だけど、それがつかのまだということも、もう分かっていた。

第五次聖杯戦争と同じくして一時計塔を中心としたこの一連の事件もまた、終幕へ向かっていることを、師匠も自分も予感していたからだった。

〈了〉

解説

桜井 光

魔術（まじゅつ）

人の心をまどわしてする、不思議な術。

—新明解国語辞典第二版

超自然的存在や神秘的力能の助けを借りて不思議な行う法のこと。

—日本大百科全書（ニッポニカ）

魔力によって行う不思議な術。人心をまどわす不思議な術。妖術。魔法。

—日本国語大事典

現代ではこのように定義されているが、かつて知識は魔術であった。

遙かな過去。我々の祖先が生きた時代の話である。

祈りと儀式に次いで生み出された学問や技術もまた、当初は魔術の一種だった。

科学以前の世界に於いて、発見や発明の一部は魔術師たちの力であり、価値であり、決して外部に漏らしてはならないものだった。

シュメール、エジプト、インド、中国、ギリシャをはじめとする

地中海世界。数多の古代文明に於いて、魔術師たちはしばしば自らの技術を公にせず秘密にしたという。

時を経る中で秘密は流出し、開かい陳ちんされ、やがて科学が成立する。なおも守られ続けたオカルティズムとしての驚異や神秘さえ、秘儀の公開者と称されるエリファス・レヴィの到来から続く近代の潮流によって多くが解き明かされていった。

皆さまはお気付きのことだろう。

魔術。神秘の秘匿。これらの事柄は、本書の主人公であるロード・エルメロイII世をはじめとした「魔術師」たちの在り方によく似ている、と。

大衆の目から神秘を秘匿し、歴史と社会の裏側に息づきながら連綿と知識を蓄積し、技術を磨き上げていく魔術師たちの姿は、そう、まさしく現実の魔術師ソレと符合する。

無論意図されたものだと考えられる。

すべての原点である奈須きのこ氏は、『空の境界』『月姫』『Fate/stay night』『魔法使いの夜』といった諸作品を生み出す傍らで一情熱的な筆致を以てこれらの名著を書き上げてみせる傍らで一描写や設定の中に、こういった現実との繋りがンリクを意識的にちりばめた。

世界の在りようは我々の目に見えるものだけが全てではなく、裏側には隠された真実があり、もうひとつの驚くべき世界が広がっている—

驚嘆すべき作家性と想像性の発露が、綿密なる知識の地盤と融合することで形を成す。

時に伝奇とも称される物語分類における、まばゆく輝く正統派スタイルである。

諸作品の発表から幾年月を経た現在、この戦い方スタイルを最も色濃く受け継いだ形で紡がれている物語が在る。明確な意図を以て、溢れる才気のままに、そのようにして精緻に紡ぎながら戦っているひとりの作家がいる。

三田誠氏である。

元来、三田誠氏は「魔術」を得手とする作家として広く知られている。

『レンタルマギカ』シリーズという燐然と輝く優れた著作があり、近年では『クロス×レガリア』等も記憶に新しい。現実と架空に息づく魔術の何たるかを知り、時に紐解きながら世界を拓ひらき、そこに生きる人々を描き、胸躍る物語を組み上げるプロフェッショナルである。

奈須きのこ氏の盟友としても知られる三田氏が、諸作品（本シリーズ第五巻解説で東出祐一郎氏が述べたところの「Fate」世界、TYPE-MOON世界、海外風に言えばNasuverse）の最新作を手掛けることになるのは恐らく、運命にも等しい必然であったのだろう。

今、シリーズ七冊目となる本書にて物語は第四の事件を終える。

過去の「Fate」世界からの来訪者とも言える存在と邂逅し、共に戦い、【生き延びた】エルメロイII世は、グレイは、この先、如何なる道程を歩むのか。我々の世界で魔術の驚異が時を経て明かされていったように、彼らの物語は完結という終着点に到達し、未だ語られざる謎の数々は遂に明かされるのか。

本書の結末を以ていよいよ始まるであろう「ロード・エルメロイの事件簿」最後の事件を、三田誠氏の戦いの果てを、どうか刮目してお待ちいただきたい。

きっと氏はすべてを成し遂げるに違いない。

驚異に挑む、かのエリファス・レヴィのように。

事件に挑む、ロード・エルメロイII世のように。

あとがき

三田 誠

一たとえば、遠い日に交わした約束。

たとえば、思い出の中だけで生きる、誰かの笑顔。

死者の記憶とはいともかくのごとく、薄れ、消え行くことこそが祝福か。

お待たせしました。

『ロード・エルメロイII世の事件簿』七巻『アトラスの契約（下）』をお送りします。

前回は、奇妙な田舎がいよいよ本来の姿を暴露し、新たな（しかし物語の影にはずっと潜んでいた）人物が現れる……といったところで終わったために、待ちかねた方もいるかと思います。約束通りお届けできて、誰より僕がほっとしています。

上巻でも書いたように、これは死と墓の話です。

この場合、墓とは単に死者が眠る場所というだけではなく、死者と向かい合う場所でもあります。遙かな過去と向き合い、現在の自分の在り方を見定め、未来を模索するための道標でもあるのです。死者とはこの世界からいなくなった人々ではなく、僕たちの内側で脈動し続ける思想こころそのものだからです。

だからこそ、グレイの故郷であり、ブラックモアの墓地に迫ることの物語は、必然的に過去と現在と未来のすべてを扱うこととなりました。シリーズ全体の謎をいよいよ開示していく巻でもあり、時系列や起きた出来事のチェックで、僕も何度も自分の原稿を見直すことになりました。

そして、今回で語られるのは死と墓だけではありません。

墓地と密接に絡みついた、村人たちの悲願。

べったりとまとわりつくアトラス院の影。

彼らを監視する聖堂教会。

一見はいささか風変わり程度だった田舎に、さまざまな個人や組織の思惑が絡み合い、タイプムーン世界ならではの闇を形成しています。人によっては狂気と呼ぶだろうその闇は、同時にひどく魅力的なものだろうと……そう思って書いてきた物語ですが、あなたにうなずいてもらえたなら、これ以上の喜びはありません。

*

さて、前の巻でも触れましたが、いよいよヤングエースで『ロード・エルメロイII世の事件簿』コミカライズが始まりました！ 東冬さんから初めてネームをいただいたときの感動たるや！ ページの隅々から、魔術の息遣いを感じるほどの「圧」を感じるできばえとなっており、いまから単行本になるのが楽しみでならないのです。

また、いつものように精緻な魔術考証を担当してくださった三輪清宗さん、迫力と美麗さの同居したイラストを描いてくださった坂本みねぢさん、フラットの台詞まわりなどチェックしてくださった成田良悟さん、監修や編集など隅々まで対応くださった奈須きのさんやOKSGさんをはじめとしたタイプムーンの皆様に感謝を。

以前タイプムーンエースのインタビューなどで話したことがありました、『ロード・エルメロイII世の事件簿』はシリーズ化が決った時期から全五部を意識していました。導入となる第一部、物語の「型」を決める第二部、転換点となる第三部、伏線を回収しつつさらに速度をあげる第四部という構想です。

といっても、思い通りにいった旅路ではありませんでした。

途中で『Fate/Grand Order』の運営が開始され、さきほど話した

ように事件簿のコミカラーズも始まって、彼とともに刻んでいった物語は最初に考えていたよりずっと複層的で、数々の意味を持ち合わせたものとなったからです。お預かりした大切なキャラクターたちと世界を、どのように展開していくべきかと、一年の半分ぐらいはずっと考えていたように思います。何度も構想を練り直し、ゲストとなるキャラクターを決め直して、ようやく第四部の終わりまでやってきました。

いよいよ、次の巻からは第五部—ラストエピソードです。II世とグレイとエルメロイ教室の面々が綴ってきた物語の、ひとつの結末。

是非、あなたに最後まで見届けてほしいと、そう思います。

また、夏にお会いしましょう。

二〇一七年十一月

『ヤングエース』掲載の『ロード・エルメロイII世の事件簿』漫画版を読みながら

三田 誠

MAKOTO SANDA

-代表作-

「レンタルマギカ」

「レッドドラゴン」

坂本 みねぢ

MINEJI SAKAMOTO

-代表作-

「ドレスの武器商人と戦華の国」（著：和智正喜／富士見書房）

「Lord of Knights」（Aming）

イラスト／坂本みねぢ

装丁／WINFANWORKS

ロード・エルメロイII世の事件簿

7 「case.アトラスの契約(下)」

著者：三田 誠

イラスト：坂本みねぢ

文章校正：鷗来堂

角川文庫

2017年12月31日 発行

ver.003

©TYPE-MOON

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

『ロード・エルメロイII世の事件簿 7 「case.アトラスの契約(下)」』

2017年12月29日 初版発行

発行者 郡司 聰

発行 株式会社KADOKAWA

•お問い合わせ

<https://www.kadokawa.co.jp/>

(「お問い合わせ」へお進みください)

※内容によっては、お答えできない場合があります。

※サポートは日本国内のみとさせていただきます。

※Japanese text only



BOOK[☆]WALKER